

# 常磐自動車道遺跡調査報告63

荒井遺跡  
赤柴遺跡

[第1分冊]





図版1 赤柴遺跡調査区遠景（北東から）



図版2 赤柴遺跡・荒井遺跡調査区遠景（南西から）



図3 赤柴遺跡29・24・31号住居跡



図4 赤柴遺跡50号住居跡と土坑群



図絵5 赤柴遺跡出土縄文時代早期～前期の土器



図絵6 赤柴遺跡出土縄文時代後期前葉の土器



図絵7 赤柴遺跡出土縄文時代後期中葉の土器



図絵8 赤柴遺跡出土平安時代の土器

## 序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間、平成16年には広野～常磐富岡間が開通し、現在は富岡～宮城県山元間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が所在しております。周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成18年度から21年度に行った南相馬市の赤柴遺跡と平成20年度に行った南相馬市の荒井遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が、文化財に対する御理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料となり、さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に御活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、南相馬市教育委員会、財團法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成23年4月

福島県教育委員会

教育長 遠藤俊博



## あいさつ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査業務を行っております。

常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査は、平成6年度に、いわき市四倉町に所在する遺跡の調査を開始し、平成13年度をもって富岡IC予定地までの発掘調査は楢葉パーキングエリア予定地を除き終了しております。

また、平成14年度からは富岡ICから相馬IC予定地間にかかる遺跡の調査を本格的に開始し、平成21年度に大熊町・南相馬市・相馬市・新地町に所在する10遺跡について調査を実施いたしました。

本報告書は、南相馬市に所在する平成20年度に実施した荒井遺跡、平成18~21年度に実施した赤柴遺跡の調査成果をまとめたものです。

荒井遺跡からは、縄文時代の低地部に立地する集落跡と、それに隣接する河川跡が調査され、縄文土器を中心とする多量の遺物が確認できました。赤柴遺跡では、縄文時代の異なる時期の集落跡と、古代の集落跡を調査しました。またおびただしい量の土器・石器が出土しました。

今後、これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として、さらに地域社会を理解することや生涯学習に幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました相馬市ならびに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護に対し、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年4月

財団法人 福島県文化振興事業団  
理事長 富田 孝志



## 緒 言

- 1 本書は、平成18~21年度に実施した常磐自動車道(相馬工区)遺跡調査の発掘調査報告書である。
- 2 本書には以下に記す遺跡調査成果を収録した。

荒井遺跡	福島県南相馬市原町区馬場字荒井ほか	埋蔵文化財番号	212500602
赤柴遺跡	福島県南相馬市原町区馬場字赤柴ほか	埋蔵文化財番号	212500193
- 3 本事業は、福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し、調査に係る費用は東日本高速道路株式会社が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配して調査および報告書作成にあたった。

平成18年度

副 主 幹 安田 稔 文化財主査 佐々木慎一  
文化財副主査 笠井崇吉 嘴 託 伊藤千洋

平成19年度

副 主 幹 吉田秀享 文化財主査 宮田安志 文化財副主査 阿部知己・笠井崇吉  
文化財主事 三浦武司 嘴 託 伊藤千洋・竹田裕子

平成20年度

副 主 幹 吉田 功・吉田秀享 文化財副主査 笠井崇吉 嘴 託 西澤正和

平成21年度

副 主 幹 吉田秀享 文化財副主査 笠井崇吉 嘴 託 水野一夫

- 6 本書の執筆にあたっては、調査を担当した調査員が分担して行った。執筆分担は章・節末または文末に示した。
- 7 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し付編にその結果を掲載している。

赤柴遺跡遺構出土炭化材の樹種同定・赤柴遺跡の種実同定	株式会社 古環境研究所
赤柴遺跡の放射性炭素年代	株式会社 加速器分析研究所
赤柴遺跡河川跡出土植物の同定・河川跡出土遺物の放射性炭素年代・	
赤柴遺跡出土火山灰の分析	株式会社 バレオ・ラボ
赤柴遺跡出土製鉄遺物の化学分析	JFEテクノリサーチ株式会社
- 8 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、編ごとにまとめて掲載した。
- 9 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸機関からご協力いただいた。

南相馬市教育委員会 東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所

## 用例

- 1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。
  - (1) 方位 遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。表記がない場合はすべて図の真上を座標北とした。
  - (2) 標高 水準点を基にした海拔標高で示した。
  - (3) 縮尺 各挿図中に縮小率を示した。
  - (4) 土層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。  
(例) 基本層位-L I・L II…、遺構内堆積土-ℓ 1・ℓ 2…  
なお、挿図の土層注記で使用した土色名は、『新版標準土色帖22版』(小山正忠・竹原秀雄編著 1999 日本色研事業株式会社発行)に基づく。
  - (5) ケバ 遺構内の傾斜面は「TTT」で表現したが、相対的に緩傾斜の部分には「△△」で表している。また、「△△」は後世の搅乱が明らかである場合に使用した。
  - (6) 網点 挿図中の網点などの用例は、同図中に表示した。
- 2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。
  - (1) 縮尺 各挿図中に縮小率を示した。
  - (2) 番号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。
  - (3) 注記 出土グリッド、出土層位などは遺物番号の右脇に示した。
  - (4) 土器断面 須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し、胎土中に繊維が混和されたものには▲を付した。
  - (5) 遺物計測値 ( ) 内の数値は推定値、[ ] 内の数値は遺存値を示す。
  - (6) 網点 挿図中の網点の用例は黒色処理を示し、それ以外は同図中に示した。
- 3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

南相馬市：M S C 荒井遺跡：A R I 赤柴遺跡：A S 堪穴住居跡：S I  
掘立柱建物跡：S B 鎌冶遺構：S W k 土坑：S K 焼土遺構：S G  
集石・配石遺構：S S 土器埋設遺構：S M 溝跡：S D 性格不明遺構：S X  
小穴・ビット：P グリッド：G 河川跡：川

# 総 目 次

## [第1分冊]

### 序 説

- 第1章 事業経緯と調査方法
- 第2章 地理的環境と歴史的環境

### 第1編 荒井遺跡

- 第1章 調査経過
- 第2章 遺構と遺物
- 第3章 ま と め

### 第2編 赤柴遺跡

- 第1章 調査経過と遺跡の概要
- 第2章 縄文・弥生時代の遺構と遺物
- 第3章 平安時代以降の遺構と遺物
- 第4章 河川跡と遺構外出土遺物
- 第5章 ま と め

## [第2分冊]

### 付編 自然科学分析

- 第1章 赤柴遺跡出土炭化材の樹種同定 [株式会社 古環境研究所]
- 第2章 赤柴遺跡の種実同定 [株式会社 古環境研究所]
- 第3章 赤柴遺跡の放射性炭素年代 [株式会社 加速器分析研究所]
- 第4章 赤柴遺跡河川跡出土植物の同定 [株式会社 バレオ・ラボ]
- 第5章 赤柴遺跡河川跡出土遺物の放射性炭素年代 [株式会社 バレオ・ラボ]
- 第6章 赤柴遺跡出土火山灰の分析 [株式会社 バレオ・ラボ]
- 第7章 赤柴遺跡出土製鉄遺物の化学分析 [JFE テクノリサーチ株式会社]

### 写真図版 第1編 荒井遺跡

### 第2編 赤柴遺跡

### 報告書抄録

## [第1分冊] 本文目次

### 序 説

第1章 事業経緯と調査方法	
第1節 事業経緯	3
第2節 調査方法と出土遺物の分類	11
第2章 地理的環境と歴史的環境	
第1節 遺跡の位置と地理的環境	13
第2節 歴史的環境	16

### 第1編 荒井遺跡

第1章 調査経過	23
第2章 遺構と遺物	
第1節 遺構の分布と基本土層	24
第2節 堅穴住居跡	26
1号住居跡(26)    2号住居跡(30)    3号住居跡(32)    4号住居跡(36)	
第3節 土 坑	39
1号土坑(39)    2号土坑(41)    3号土坑(42)    4号土坑(42)	
第4節 土器埋設遺構・溝跡・性格不明遺構	44
1号土器埋設遺構(45)    1号溝跡(45)    1号性格不明遺構(46)	
第5節 河 川 跡	47
1号河川跡(48)    2号河川跡(50)    3号河川跡(78)	
第6節 遺構出土遺物	82
第3章 ま と め	88

### 第2編 赤柴遺跡

第1章 調査経過と遺跡の概要	
第1節 調査経過	91
第2節 遺跡の概要と基本土層	96
第2章 繩文・弥生時代の遺構と遺物	
第1節 堅穴住居跡	107
1号住居跡(107)    2号住居跡(110)    3号住居跡(114)    4号住居跡(118)    5号住居跡(121)	
6号住居跡(125)    8号住居跡(129)    11号住居跡(131)    14号住居跡(136)    15号住居跡(141)	

17号住居跡(143)	19号住居跡(147)	23号住居跡(152)	24号住居跡(157)	25号住居跡(165)
26号住居跡(167)	27号住居跡(169)	28号住居跡(172)	29号住居跡(175)	30号住居跡(182)
31号住居跡(188)	32号住居跡(192)	34号住居跡(195)	35号住居跡(199)	36号住居跡(205)
37号住居跡(208)	38号住居跡(212)	39号住居跡(218)	40号住居跡(222)	42号住居跡(224)
44号住居跡(226)	45号住居跡(229)	46号住居跡(233)	48号住居跡(235)	50号住居跡(237)
51号住居跡(244)	52号住居跡(248)	53号住居跡(252)		
第2節 土 坑 ..... 254				
6号土坑(254)	7号土坑(254)	8号土坑(255)	10号土坑(255)	15号土坑(255)
16号土坑(257)	17号土坑(257)	18号土坑(260)	30号土坑(260)	32号土坑(261)
36号土坑(262)	37号土坑(264)	38号土坑(266)	39号土坑(268)	40号土坑(269)
41号土坑(272)	42号土坑(272)	43号土坑(273)	44号土坑(273)	45号土坑(276)
46号土坑(276)	47号土坑(276)	48号土坑(278)	49号土坑(278)	50号土坑(279)
52号土坑(280)	53号土坑(283)	55号土坑(283)	56号土坑(283)	58号土坑(285)
59号土坑(285)	60号土坑(286)	64号土坑(286)	65号土坑(286)	67号土坑(288)
68号土坑(288)	69号土坑(288)	70号土坑(290)	71号土坑(291)	72号土坑(291)
73号土坑(291)	75号土坑(293)	77号土坑(293)	80号土坑(296)	81号土坑(296)
85号土坑(298)	87号土坑(298)	88号土坑(298)	89号土坑(300)	90号土坑(300)
91号土坑(302)	92号土坑(302)	93号土坑(304)	94号土坑(304)	96号土坑(304)
98号土坑(306)	99号土坑(306)	100号土坑(306)	101号土坑(308)	104号土坑(308)
105号土坑(309)	106号土坑(309)	107号土坑(309)	108号土坑(311)	110号土坑(311)
111号土坑(313)	112号土坑(313)	113号土坑(315)	114号土坑(316)	116号土坑(316)
117号土坑(316)	118号土坑(317)	119号土坑(317)	120号土坑(319)	121号土坑(319)
122号土坑(321)	123号土坑(321)	126号土坑(323)	127号土坑(324)	128号土坑(324)
129号土坑(325)	131号土坑(326)	132号土坑(327)		
第3節 燃土遺構 ..... 327				
1号燃土遺構(327)	2号燃土遺構(328)	3号燃土遺構(328)	4号燃土遺構(328)	5号燃土遺構(328)
6号燃土遺構(330)	7号燃土遺構(330)	8号燃土遺構(330)	9号燃土遺構(330)	10号燃土遺構(331)
11号燃土遺構(331)	12号燃土遺構(331)	13号燃土遺構(331)	14号燃土遺構(332)	15号燃土遺構(333)
第4節 集石・配石遺構 ..... 333				
1号集石遺構(333)	2号集石遺構(335)	3号集石遺構(335)	4号集石遺構(337)	5号配石遺構(338)
第5節 土器埋設遺構 ..... 339				
1号土器埋設遺構(339)	2号土器埋設遺構(341)	3号土器埋設遺構(342)	4号土器埋設遺構(342)	
第6節 性格不明遺構 ..... 344				
5号性格不明遺構(344)	6号性格不明遺構(347)	7号性格不明遺構(348)	8号性格不明遺構(351)	
9号性格不明遺構(355)	10号性格不明遺構(357)	11号性格不明遺構(359)	12号性格不明遺構(360)	
13号性格不明遺構(362)	14号性格不明遺構(363)	15号性格不明遺構(365)	16号性格不明遺構(367)	
18号性格不明遺構(367)	19号性格不明遺構(368)	23号性格不明遺構(369)	24号性格不明遺構(371)	

25号性格不明遺構(374) 26号性格不明遺構(376) 27号性格不明遺構(379) 28号性格不明遺構(380)	
29号性格不明遺構(386) 32号性格不明遺構(386) 34号性格不明遺構(389) 35号性格不明遺構(391)	
<b>第3章 平安時代以降の遺構と遺物</b>	
<b>第1節 堅穴住居跡と掘立柱建物跡</b>	393
7号住居跡(393) 9号住居跡(397) 10号住居跡(400) 12号住居跡(402) 13号住居跡(407)	
16号住居跡(408) 18号住居跡(412) 20号住居跡(414) 21号住居跡(419) 22号住居跡(424)	
33号住居跡(428) 41号住居跡(430) 43号住居跡(435) 47号住居跡(438) 49号住居跡(443)	
1号建物跡(445)	
<b>第2節 錫冶遺構</b>	446
2号錫冶遺構(446) 3号錫冶遺構(450) 4号錫冶遺構(453)	
<b>第3節 土坑</b>	454
1号土坑(454) 2号土坑(455) 3号土坑(455) 4号土坑(456) 5号土坑(456) 9号土坑(456)	
11号土坑(458) 12号土坑(458) 13号土坑(459) 14号土坑(459) 19号土坑(459) 20号土坑(461)	
21号土坑(461) 22号土坑(462) 23号土坑(463) 24号土坑(463) 25号土坑(463) 26号土坑(465)	
27号土坑(465) 28号土坑(465) 29号土坑(466) 31号土坑(466) 33号土坑(466) 34号土坑(468)	
35号土坑(468) 51号土坑(470) 54号土坑(470) 57号土坑(470) 61号土坑(471) 62号土坑(471)	
63号土坑(471) 66号土坑(473) 74号土坑(473) 76号土坑(475) 78号土坑(475) 79号土坑(476)	
82号土坑(476) 83号土坑(476) 84号土坑(478) 86号土坑(478) 95号土坑(479) 97号土坑(479)	
102号土坑(480) 103号土坑(481) 109号土坑(481) 115号土坑(481) 124号土坑(483)	
125号土坑(483) 130号土坑(485)	
<b>第4節 溝跡</b>	485
1号溝跡(485) 2号溝跡(486) 3号溝跡(488) 4号溝跡(489) 5号溝跡(491) 6号溝跡(495)	
7号溝跡(496) 8号溝跡(498) 9号溝跡(498) 10号溝跡(499)	
<b>第5節 性格不明遺構</b>	501
1号性格不明遺構(501) 2号性格不明遺構(502) 3号性格不明遺構(504) 4号性格不明遺構(506)	
17号性格不明遺構(507) 20号性格不明遺構(508) 21号性格不明遺構(511) 22号性格不明遺構(511)	
30号性格不明遺構(512) 31号性格不明遺構(514) 33号性格不明遺構(514)	
<b>第4章 河川跡と遺構外出土遺物</b>	
<b>第1節 河川跡</b>	516
1号河川跡(516) 2号河川跡(517) 3号河川跡(520) 4号河川跡(521) 5号河川跡(528)	
<b>第2節 遺構外出土遺物</b>	531
遺物の分布状況(531) 土器(534) 土製品(587) 石器・石製品(590)	
<b>第3章 まとめ</b>	607
遺物について(607) 遺構について(612) 太平洋戦争関連の遺構と遺物について(615)	

## 挿図・表目次

### 序 説

#### [挿図]

図1 常磐自動車道位置図.....	3	図3 周辺の遺跡位置図.....	19
図2 地形分類図.....	15		

#### [表]

表1 四倉IC以北常磐自動車道開通 市町村別発掘調査遺跡数.....	4	表2 荒井遺跡・赤柴遺跡周辺の遺跡.....	20
---------------------------------------	---	------------------------	----

### 第1編 荒井遺跡

#### [挿図]

図1 調査区位置図.....	23	図24 2号河川跡出土縄文土器(4).....	59
図2 遺構配置図・基本土層.....	25	図25 2号河川跡出土縄文土器(5).....	61
図3 1号住居跡.....	27	図26 2号河川跡出土縄文土器(6).....	62
図4 1号住居跡出土遺物.....	29	図27 2号河川跡出土縄文土器(7).....	63
図5 2号住居跡、出土遺物.....	30	図28 2号河川跡出土縄文土器(8).....	64
図6 3号住居跡.....	33	図29 2号河川跡出土縄文土器(9).....	66
図7 3号住居跡炉、出土遺物(1).....	34	図30 2号河川跡出土縄文土器(10).....	68
図8 3号住居跡出土遺物(2).....	35	図31 2号河川跡出土縄文土器(11).....	69
図9 4号住居跡.....	37	図32 2号河川跡出土縄文土器(12).....	70
図10 4号住居跡炉、出土遺物.....	38	図33 2号河川跡出土縄文土器(13).....	71
図11 1号土坑、出土遺物.....	40	図34 2号河川跡出土縄文土器(14).....	72
図12 2~4号土坑、出土遺物.....	43	図35 2号河川跡出土縄文土器(15).....	74
図13 1号土器埋設遺構、出土遺物.....	44	図36 2号河川跡出土縄文土器(16).....	75
図14 1号溝跡、出土遺物.....	46	図37 2号河川跡出土石器(1).....	77
図15 1号性格不明遺構、出土遺物.....	47	図38 2号河川跡出土石器(2).....	78
図16 1号河川跡、出土遺物.....	49	図39 3号河川跡.....	79
図17 2号河川跡.....	51	図40 3号河川跡出土縄文土器.....	80
図18 2号河川跡遺物出土状況(1).....	52	図41 3号河川跡出土石器.....	81
図19 2号河川跡遺物出土状況(2).....	53	図42 遺構外出土土器分布状況.....	82
図20 2号河川跡遺物出土状況(3).....	54	図43 遺構外出土縄文土器(1).....	84
図21 2号河川跡出土縄文土器(1).....	55	図44 遺構外出土縄文土器(2).....	85
図22 2号河川跡出土縄文土器(2).....	56	図45 遺構外出土石器.....	86
図23 2号河川跡出土縄文土器(3).....	58		

## 第2編 赤柴遺跡

### [挿図]

図1 調査区位置図	92	図36 17号住居跡出土遺物	146
図2 グリッド配置図	93	図37 19号住居跡	148
図3 遺構配置・基本土層位置図 北調査区	98	図38 19号住居跡炉、出土遺物(1)	150
図4 遺構配置・基本土層位置図 南調査区	99	図39 19号住居跡出土遺物(2)	152
図5 南調査区遺構集中部配置図	100	図40 23号住居跡	154
図6 北調査区縄文時代早期後葉～ 前期初頭の集落	101	図41 23号住居跡出土遺物(1)	155
図7 南調査区縄文時代後期前葉の集落	102	図42 23号住居跡出土遺物(2)	156
図8 南調査区縄文時代後期中葉の集落	103	図43 24号住居跡(1)	158
図9 基本土層(1)	104	図44 24号住居跡(2)	159
図10 基本土層(2)	105	図45 24号住居跡出土遺物(1)	162
図11 1号住居跡	108	図46 24号住居跡出土遺物(2)	163
図12 1号住居跡出土遺物	109	図47 24号住居跡出土遺物(3)	164
図13 2号住居跡	111	図48 25号住居跡	166
図14 2号住居跡出土遺物	113	図49 26号住居跡	168
図15 3号住居跡	114	図50 26号住居跡出土遺物	169
図16 3号住居跡出土遺物(1)	116	図51 27号住居跡	170
図17 3号住居跡出土遺物(2)	117	図52 27号住居跡出土遺物	171
図18 4号住居跡	119	図53 28号住居跡	173
図19 4号住居跡出土遺物	120	図54 28号住居跡出土遺物	174
図20 5号住居跡	122	図55 29号住居跡	176
図21 5号住居跡出土遺物(1)	124	図56 29号住居跡炉	177
図22 5号住居跡出土遺物(2)	125	図57 29号住居跡出土遺物(1)	179
図23 6号住居跡	126	図58 29号住居跡出土遺物(2)	180
図24 6号住居跡出土遺物(1)	127	図59 29号住居跡出土遺物(3)	181
図25 6号住居跡出土遺物(2)	128	図60 30号住居跡	183
図26 8号住居跡、出土遺物	130	図61 30号住居跡炉	184
図27 11号住居跡	132	図62 30号住居跡出土遺物(1)	186
図28 11号住居跡出土遺物(1)	135	図63 30号住居跡出土遺物(2)	187
図29 11号住居跡出土遺物(2)	136	図64 31号住居跡	189
図30 14号住居跡	137	図65 31号住居跡炉	190
図31 14号住居跡出土遺物(1)	139	図66 31号住居跡出土遺物	191
図32 14号住居跡出土遺物(2)	140	図67 32号住居跡	193
図33 15号住居跡	141	図68 32号住居跡出土遺物	194
図34 15号住居跡出土遺物	143	図69 34号住居跡	196
図35 17号住居跡	144	図70 34号住居跡炉、出土遺物	197
		図71 35号住居跡	200
		図72 35号住居跡炉	201
		図73 35号住居跡出土遺物(1)	203

图74	35号住居跡出土遺物(2) .....	204	图115	32号土坑出土遺物 .....	263
图75	36号住居跡 .....	206	图116	36号土坑。出土遺物 .....	264
图76	36号住居跡出土遺物 .....	207	图117	37号土坑。出土遺物 .....	265
图77	37号住居跡 .....	209	图118	38号土坑。出土遺物(1) .....	266
图78	37号住居跡出土遺物(1) .....	210	图119	38号土坑出土遺物(2) .....	267
图79	37号住居跡出土遺物(2) .....	211	图120	39号土坑。出土遺物 .....	268
图80	38号住居跡 .....	213	图121	40号土坑。遺物出土狀況 .....	269
图81	38号住居跡出土遺物(1) .....	215	图122	40号土坑出土遺物(1) .....	270
图82	38号住居跡出土遺物(2) .....	216	图123	40号土坑出土遺物(2) .....	271
图83	38号住居跡出土遺物(3) .....	217	图124	41~44号土坑 .....	274
图84	38号住居跡出土遺物(4) .....	218	图125	41~44号土坑出土遺物 .....	275
图85	39号住居跡 .....	219	图126	45~48号土坑。出土遺物 .....	277
图86	39号住居跡炉 .....	220	图127	49号土坑。出土遺物 .....	279
图87	39号住居跡出土遺物 .....	221	图128	50号土坑 .....	280
图88	40号住居跡、出土遺物 .....	223	图129	50号土坑出土遺物 .....	281
图89	42号住居跡 .....	225	图130	52·53号土坑。出土遺物 .....	282
图90	42号住居跡炉、出土遺物 .....	226	图131	55·56·58號土坑。出土遺物 .....	284
图91	44号住居跡 .....	227	图132	59·60·64·65號土坑。出土遺物 .....	287
图92	44号住居跡出土遺物 .....	228	图133	67~69號土坑。出土遺物 .....	289
图93	45号住居跡 .....	230	图134	70·71號土坑。出土遺物 .....	290
图94	45号住居跡出土遺物 .....	232	图135	72·73號土坑。出土遺物 .....	292
图95	46号住居跡、出土遺物 .....	234	图136	75號土坑。出土遺物 .....	294
图96	48号住居跡、出土遺物 .....	236	图137	77號土坑。出土遺物 .....	295
图97	50号住居跡(1) .....	238	图138	80·81號土坑。出土遺物 .....	297
图98	50号住居跡(2) .....	239	图139	85·87~89號土坑。出土遺物 .....	299
图99	50号住居跡出土遺物出土狀況 .....	240	图140	90·91號土坑。出土遺物 .....	301
图100	50号住居跡出土遺物(1) .....	242	图141	92·93號土坑。出土遺物 .....	303
图101	50号住居跡出土遺物(2) .....	243	图142	94·96·98·99號土坑。出土遺物 .....	305
图102	51号住居跡 .....	245	图143	100號土坑。出土遺物 .....	307
图103	51号住居跡出土遺物(1) .....	246	图144	101·104·105·106·107號土坑。 出土遺物 .....	310
图104	51号住居跡出土遺物(2) .....	247	图145	108號土坑。出土遺物 .....	312
图105	52号住居跡 .....	249	图146	110~114·116號土坑 .....	314
图106	52号住居跡出土遺物 .....	251	图147	110~114號土坑出土遺物 .....	315
图107	53号住居跡 .....	252	图148	117~120號土坑。出土遺物 .....	318
图108	53号住居跡出土遺物 .....	253	图149	121號土坑。出土遺物 .....	320
图109	6·8·10·15·16號土坑 .....	256	图150	123號土坑。出土遺物 .....	322
图110	10·15·16號土坑出土遺物 .....	257	图151	122·126·127號土坑。出土遺物 .....	323
图111	17號土坑。出土遺物 .....	258	图152	128號土坑。出土遺物 .....	325
图112	18號土坑。出土遺物 .....	259	图153	129·131·132號土坑。出土遺物 .....	326
图113	30號土坑。出土遺物 .....	261	图154	1~6號燒土構造 .....	329
图114	32號土坑 .....	262			

図155 7～15号焼土遺構	332	図196 7号住居跡出土遺物	396
図156 1号集石遺構、出土遺物	334	図197 9号住居跡	398
図157 2・3号集石遺構、出土遺物	336	図198 9号住居跡出土遺物	399
図158 4号配石遺構、出土遺物	337	図199 10号住居跡、出土遺物(1)	401
図159 5号配石遺構、出土遺物	339	図200 10号住居跡出土遺物(2)	402
図160 1号土器埋設遺構、出土遺物	340	図201 12号住居跡	403
図161 2～4号土器埋設遺構、出土遺物	343	図202 12号住居跡カマド	404
図162 5号性格不明遺構	345	図203 12号住居跡出土遺物	406
図163 5号性格不明遺構出土遺物	346	図204 13号住居跡	407
図164 6号性格不明遺構、出土遺物	347	図205 16号住居跡	410
図165 7号性格不明遺構	349	図206 16号住居跡カマド	411
図166 7号性格不明遺構出土遺物	351	図207 16号住居跡出土遺物	412
図167 8号性格不明遺構	352	図208 18号住居跡、出土遺物	413
図168 8号性格不明遺構出土遺物	354	図209 20号住居跡	415
図169 9号性格不明遺構、出土遺物	356	図210 20号住居跡カマド	416
図170 10号性格不明遺構、出土遺物	358	図211 20号住居跡出土遺物	418
図171 11号性格不明遺構	359	図212 21号住居跡	420
図172 12号性格不明遺構	360	図213 21号住居跡カマド	421
図173 12号性格不明遺構出土遺物	361	図214 21号住居跡出土遺物(1)	422
図174 13号性格不明遺構、出土遺物	363	図215 21号住居跡出土遺物(2)	423
図175 14号性格不明遺構、出土遺物	364	図216 21号住居跡出土遺物(3)	424
図176 15号性格不明遺構、出土遺物	366	図217 22号住居跡	425
図177 16・18・19号性格不明遺構、出土遺物	368	図218 22号住居跡出土遺物	427
図178 23号性格不明遺構	369	図219 33号住居跡	429
図179 23号性格不明遺構出土遺物	370	図220 33号住居跡出土遺物	430
図180 24号性格不明遺構	372	図221 41号住居跡	431
図181 24号性格不明遺構出土遺物	373	図222 41号住居跡カマド	432
図182 25号性格不明遺構、出土遺物	375	図223 41号住居跡出土遺物(1)	433
図183 26号性格不明遺構	377	図224 41号住居跡出土遺物(2)	434
図184 26号性格不明遺構出土遺物	378	図225 43号住居跡	436
図185 27号性格不明遺構	379	図226 43号住居跡カマド、出土遺物	437
図186 28号性格不明遺構	381	図227 47号住居跡	439
図187 28号性格不明遺構出土遺物(1)	382	図228 47号住居跡出土遺物	441
図188 28号性格不明遺構出土遺物(2)	383	図229 49号住居跡(1)	442
図189 28号性格不明遺構出土遺物(3)	385	図230 49号住居跡(2)、出土遺物	443
図190 29号性格不明遺構、出土遺物	387	図231 1号建物跡	445
図191 32号性格不明遺構、出土遺物	388	図232 2号鍛冶遺構(1)	447
図192 34号性格不明遺構、出土遺物	390	図233 2号鍛冶遺構(2)	448
図193 35号性格不明遺構、出土遺物	392	図234 2号鍛冶遺構出土遺物	449
図194 7号住居跡	394	図235 3号鍛冶遺構(1)	451
図195 7号住居跡カマド	395	図236 3号鍛冶遺構(2)、出土遺物	452

図237 4号鍛冶遺構	454	図278 4号河川跡出土遺物(縄文時代3)	526
図238 1~5号土坑、出土遺物	457	図279 4号河川跡出土遺物(縄文時代4)	527
図239 9・11~14・19号土坑	460	図280 5号河川跡	529
図240 21号土坑、出土遺物	462	図281 5号河川跡出土遺物	530
図241 20・22~26号土坑	464	図282 縄文・弥生時代遺構外 出土遺物分布状況	532
図242 27~29・31・33号土坑	467	図283 平安時代遺構外 出土遺物分布状況	533
図243 34・35号土坑、出土遺物	469	図284 遺構外出土遺物(1)	535
図244 51・54・57・61・62号土坑	472	図285 遺構外出土遺物(2)	537
図245 63・66・74・76号土坑、出土遺物	474	図286 遺構外出土遺物(3)	538
図246 78・79・82号土坑、出土遺物	477	図287 遺構外出土遺物(4)	540
図247 83・84・86・95号土坑	479	図288 遺構外出土遺物(5)	541
図248 97号土坑、出土遺物	480	図289 遺構外出土遺物(6)	543
図249 102・103・109・115・124・125号土坑	482	図290 遺構外出土遺物(7)	544
図250 130号土坑、出土遺物	484	図291 遺構外出土遺物(8)	546
図251 1号溝跡	486	図292 遺構外出土遺物(9)	547
図252 2号溝跡	487	図293 遺構外出土遺物(10)	548
図253 3号溝跡	488	図294 遺構外出土遺物(11)	549
図254 4号溝跡	490	図295 遺構外出土遺物(12)	550
図255 5号溝跡	492	図296 遺構外出土遺物(13)	553
図256 5号溝跡出土遺物(平安時代1)	493	図297 遺構外出土遺物(14)	554
図257 5号溝跡出土遺物(平安時代2)	494	図298 遺構外出土遺物(15)	555
図258 6号溝跡	496	図299 遺構外出土遺物(16)	556
図259 7・8号溝跡	497	図300 遺構外出土遺物(17)	559
図260 9号溝跡	499	図301 遺構外出土遺物(18)	560
図261 10号溝跡	500	図302 遺構外出土遺物(19)	561
図262 1号性格不明遺構	502	図303 遺構外出土遺物(20)	562
図263 2号性格不明遺構、出土遺物	503	図304 遺構外出土遺物(21)	565
図264 3号性格不明遺構、出土遺物	505	図305 遺構外出土遺物(22)	566
図265 4号性格不明遺構、出土遺物	506	図306 遺構外出土遺物(23)	567
図266 17号性格不明遺構	508	図307 遺構外出土遺物(24)	568
図267 20号性格不明遺構	509	図308 遺構外出土遺物(25)	570
図268 20号性格不明遺構出土遺物	510	図309 遺構外出土遺物(26)	571
図269 21・22号性格不明遺構、出土遺物	512	図310 遺構外出土遺物(27)	572
図270 30・31号性格不明遺構、出土遺物	513	図311 遺構外出土遺物(28)	575
図271 33号性格不明遺構、出土遺物	515	図312 遺構外出土遺物(29)	576
図272 1~3号河川跡	518	図313 遺構外出土遺物(30)	577
図273 1~3号河川跡出土遺物	519	図314 遺構外出土遺物(31)	578
図274 4号河川跡	522	図315 遺構外出土遺物(32)	580
図275 4号河川跡出土遺物(縄文時代1)	523	図316 遺構外出土遺物(33)	581
図276 4号河川跡出土遺物(平安時代)	524		
図277 4号河川跡出土遺物(縄文時代2)	525		

図317 遺構外出土遺物(34) .....	582	図327 遺構外出土遺物(44) .....	596
図318 遺構外出土遺物(35) .....	584	図328 遺構外出土遺物(45) .....	599
図319 遺構外出土遺物(36) .....	585	図329 遺構外出土遺物(46) .....	600
図320 遺構外出土遺物(37) .....	586	図330 遺構外出土遺物(47) .....	601
図321 遺構外出土遺物(38) .....	588	図331 遺構外出土遺物(48) .....	602
図322 遺構外出土遺物(39) .....	589	図332 遺構外出土遺物(49) .....	603
図323 遺構外出土遺物(40) .....	591	図333 遺構外出土遺物(50) .....	604
図324 遺構外出土遺物(41) .....	592	図334 平安時代以降の遺構出土石器(1) .....	605
図325 遺構外出土遺物(42) .....	593	図335 平安時代以降の遺構出土石器(2) .....	606
図326 遺構外出土遺物(43) .....	595	図336 太平洋戦争関連の遺構と遺物 .....	616

# 序 説



# 第1章 事業経緯と調査方法

## 第1節 事業経緯

### 1. 事業概要と平成18年度までの事業経緯

常磐自動車道は、埼玉県三郷市の三郷インターチェンジ(以下ICと略す)を起点とし、千葉県から茨城県、そして福島県の浜通り地方を通って、宮城県亘理郡亘理町の亘理ICを終点とする高速自動車道である。このうち、三郷IC～いわき市のいわき中央ICまでは昭和63年3月に供用が開始され、平成11年3月にはいわき中央IC～いわき四倉ICまで、平成14年3月にはいわき四倉IC～広野ICまで、平成16年4月には広野IC～富岡ICまでの供用が開始されている。さらに、平成21年9月には、宮城県側の亘理IC～山元ICまでの11.5kmが開通し、残りは富岡IC～山元ICまでの47kmの区間となった。

これらの区間に所在する埋蔵文化財については、茨城県境からいわき中央ICまでの4遺跡を、昭和59・60年度に、いわき中央IC～いわき四倉IC間の埋蔵文化財についても、平成6年度から平成9年度にかけて10遺跡の発掘調査を、いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して発掘調査を実施した。これ以外の四倉町大野地区10遺跡の発掘調査は、福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター(現、財団法人福島県文化振興事業団)に委託して実施した。

いわき四倉IC以北の路線内の埋蔵文化財については、平成9年度から福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター(現、財団法人福島県文化振興事業団)に調査を委託して実施した。平成9年度以降の市町村別発掘調査数については、表1に示したとおりである。

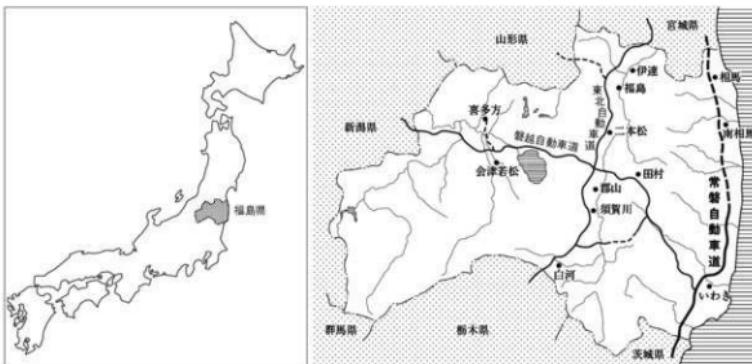


図1 常磐自動車道位置図

## 序 説

表1 四倉IC以北常磐自動車道関連市町村別発掘調査遺跡数

調査 年度	市町村名												
	いわき市	広野町	棚葉町	富岡町	大熊町	双葉町	浪江町	小高区	南相馬市	原町区	鹿島区	相馬市	新地町
H9	5	1											
H10	4	3	3	2									
H11		4	5										
H12		1	7	5									
H13			1	5									
H14				1	2								
H15						2					2		
H16					3				2		1		
H17					3	2	2	3	1	1	1		
H18					1		6	4	4	1	2		
H19							4	6	7				
H20			1				7	5	3		1		
H21						1		1	3	1	1	3	

なお、当初、富岡ICまでは、日本道路公団東北支社(現、東日本高速道路株式会社東北支社)いわき工事事務所、富岡IC以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが、平成14年7月より富岡IC～浪江町までの区間についても、いわき工事事務所が管轄することとなり、相馬工事事務所は南相馬市～新地町までの区間となった。

## 2. 平成18年度の調査経過

平成18年度の常磐自動車道(浪江～相馬)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき福島県文化振興事業団遺跡調査部の職員13名を配置して実施した。調査対象遺跡は、南相馬市小高区の4遺跡(荻原遺跡・大田切遺跡・大田和広畑遺跡・広谷地遺跡)と、同市原町区の4遺跡(仲山B遺跡・小池田遺跡・赤柴遺跡・原B遺跡)、同市鹿島区の1遺跡(北山下遺跡)、および相馬市の2遺跡(山岸硝庫跡・西原遺跡)の計11遺跡である。

年度前半期は、優先順の高い北山下遺跡・赤柴遺跡・原B遺跡・大田切遺跡の4遺跡を対象に実施した。いずれも4月中旬には表土除去作業を開始し、併せてプレハブ・駐車場等のヤードの整備を行った。北山下遺跡は3年目の調査となり、検出された中世の道跡が、現代まで踏襲して使用されていたことが判明した。赤柴遺跡や原B遺跡からは、主に縄文時代の集落跡が確認され、住居跡・貯蔵穴等の調査が行われた。大田切遺跡では、平安時代の木炭窯の操業に関わった工人たちの住居跡が確認された。なお、大田切遺跡や赤柴遺跡では、当初の調査指示面積が変更となり、大田切遺跡では3,800m<sup>2</sup>の追加、赤柴遺跡でも2,900m<sup>2</sup>の調査面積の追加となった。

5月の連休前には北山下遺跡の調査が終了し、相馬市の山岸硝庫跡の調査に移行した。原B遺跡・大田切遺跡の調査は盆前には終了し、大田和広畑遺跡と広谷地遺跡に移行した。その後、仲山B遺跡と小池田遺跡が追加となった。大田和広畑遺跡では、鍛冶炉を伴う平安時代の住居跡と縄文時代の貯蔵穴が確認され、広谷地遺跡では縄文時代の住居跡と平安時代の土坑等が調査された。

9月下旬には、赤柴遺跡と山岸硝庫跡の調査が終了し、荻原遺跡と西原遺跡の調査に移行した。西原遺跡では縄文時代の包含層と平安時代の土坑が確認され、仲山B遺跡では古代末と考えられる

精鍊鍛冶炉跡が調査された。小池田遺跡は、工事計画との調整から1,000 m<sup>2</sup>の調査となったが、縄文時代の遺物が多量に出土した。

10月末には広谷地遺跡の調査が終了し、11月下旬から12月上旬にかけては、大田和広畠遺跡・西原遺跡・仲山B遺跡・小池田遺跡で調査が収束した。荻原遺跡では、縄文時代の集落跡と平安時代の製鉄関連遺構のほか、旧石器時代の石器群が出土し、12月下旬に調査が終了した。

なお、年明けの19年3月には、工事工程上の最優先箇所である小池田遺跡・広谷地遺跡の4,500 m<sup>2</sup>の表土剥ぎを実施した。

この他、平成16・17年度に発掘調査を実施した仲山C遺跡と明神遺跡を、福島県文化財調査報告書第432集『常磐自動車道遺跡調査報告42』として、同じく、平成17年度に発掘調査を実施した南相馬市の四ツ栗遺跡（2次調査）・熊平B遺跡・荻原遺跡（2次調査）を、福島県文化財調査報告書第433集『常磐自動車道遺跡調査報告43』として10月に報告書を刊行した。

### 3. 平成19年度の調査経過

平成19年度の常磐自動車道（浪江～相馬）建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき福島県文化振興事業団遺跡調査部の職員17名を配置して実施した。調査対象遺跡は、南相馬市原町区に所在する小池田遺跡（2次調査）・西内遺跡・石神遺跡・戸鳥土遺跡・赤柴遺跡（2次調査）・切付遺跡・片倉遺跡の7遺跡と、同市小高区に所在する荻原遺跡（4次調査）・君ヶ沢B遺跡・大田切遺跡（2次調査）・横大道遺跡・大田和広畠遺跡（2次調査）・広谷地遺跡（2次調査）の6遺跡の計13遺跡であり、調査面積は総計51,100 m<sup>2</sup>である。

東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所（以下、相馬工事事務所と略す）との事前協議を受けて、4月より原町区小池田遺跡（2,800 m<sup>2</sup>）と赤柴遺跡（3,000 m<sup>2</sup>）、小高区の大田切遺跡（500 m<sup>2</sup>）と広谷地遺跡（4,600 m<sup>2</sup>）、大田和広畠遺跡（2,900 m<sup>2</sup>）の5遺跡の調査を開始した。

5月には、小池田遺跡で縄文時代前期の大型住居跡等を検出したが、5月末で調査を終了した。赤柴遺跡では、縄文時代早期の竪穴住居跡等を検出した。大田切遺跡では近世以降と思われる道路等を検出し、5月15日には調査を終了した。広谷地遺跡では、平安時代の竪穴住居跡のほか、遺跡の中央部を南北に縱断する道路を検出した。大田和広畠遺跡では、縄文時代中期の複式炉をもつ大型の竪穴住居跡を検出した。5月から調査を開始した小高区の横大道遺跡（4,000 m<sup>2</sup>）は、作業の安全上の問題等から2期線部分を含めて調査することで相馬工事事務所の了承を得た。

6月に入り、原町区では戸鳥土遺跡と赤柴遺跡の調査を進めた。戸鳥土遺跡では竪穴住居跡のほか、消滅したと思われた戸鳥土塚群の痕跡と思われる遺構を検出した。小高区では大田和広畠遺跡の調査終了をうけ、荻原遺跡の調査を開始することとなり、オオタカの営巣による規制から遠い北側9,100 m<sup>2</sup>から調査に着手した。また、調査も終盤となってきた広谷地遺跡では、遺跡が調査区外へ続くことが確認されたため、協議の結果、新たに200 m<sup>2</sup>の調査区を拡張することになった。

7月には原町区戸鳥土遺跡の調査員と作業員を二手に分け、併行して切付遺跡の調査に着手し

## 序　　説

た。小高区の横大道遺跡では、廃滓場の調査に伴い大量の鉄滓・羽口等が出土したことから、現地での洗浄と分類・計量とに多大な労力を要することとなった。

8月には連日の猛暑で調査の進捗も滞りがちとなつたが、原町区では戸島土遺跡の調査終了後に片倉遺跡900m<sup>2</sup>の調査を開始し、平安時代の竪穴住居跡等を検出した。小高区では荻原遺跡の隣接地でオオタカの幼鳥の巣立ちが確認されたことから、これまで作業を見合わせていた南側5,700m<sup>2</sup>の調査に着手することとなり、広谷地遺跡の調査終了後、荻原遺跡の新たな調査区へ移行した。

9月になると原町区で切付遺跡と片倉遺跡の調査を順次終了した。当初9月から予定された原町区西内遺跡の調査は、隣接する花栽培農家への配慮から11月以降に延期されたため、代わりに石神遺跡の調査を実施することとなった。石神遺跡の調査面積は試掘調査の段階では3,100m<sup>2</sup>とされたが、路線の一部設計変更があり実際は3,300m<sup>2</sup>となった。赤柴遺跡では、平安時代の遺構と縄文時代後期の集落跡が重複して確認されたことから、相馬工事事務所と協議の結果、重複部1,200m<sup>2</sup>については平安時代と縄文時代の2面の調査と積算し、調査面積に追加することとなった。

小高区では横大道遺跡の北部地区での試掘調査の結果から、さらに3,400m<sup>2</sup>の調査区を追加し当年度の調査面積は計7,400m<sup>2</sup>となった。荻原遺跡でも新たな試掘調査の結果から、1,500m<sup>2</sup>の調査区を追加し、当年度に調査を実施することとなった。調査面積は合計で16,300m<sup>2</sup>となった。

10月に入り、原町区の石神遺跡からは、縄文時代から近世にかけての遺構が検出された。また、赤柴遺跡では600m<sup>2</sup>の調査区を追加し、当年度の調査面積は合計で7,400m<sup>2</sup>となった。小高区では横大道遺跡で奈良時代から平安時代にかけての製鉄炉群が検出され、周囲一帯が大規模な製鉄遺跡であることが明らかとなった。また、荻原遺跡の南部地区でも、試掘調査で検出されていた廃滓場とともに製鉄炉が検出され、鋳造の鋳型も出土した。なお、横大道遺跡では、10・11月にかけて事業全体の調整から900m<sup>2</sup>の表土剥ぎを実施したが、対象とした地区には製鉄炉・木炭窯等が密に分布し当年度中の調査終了は困難と判断したため、協議の結果、表土剥ぎまでにとどめることとなった。

11月からは原町区の西内遺跡で、当初の計画から調査面積を減じて900m<sup>2</sup>を対象に調査を実施した。小高区では、試掘調査の結果から新たに遺跡登録となった君ヶ沢B遺跡の400m<sup>2</sup>について、工事用道路建設の工程上、急遽調査を実施することになった。また、荻原遺跡の調査区の一部1,500m<sup>2</sup>について、用水路のボックス工事のため11月16日に先行して引渡しを行った。

12月になると、8日に奈良・平安時代の製鉄遺跡として新たな知見の得られた横大道遺跡の現地説明会を実施した。14日には原町区の石神遺跡と赤柴遺跡の調査を終了し、21日には小高区の荻原遺跡の調査も終了にこぎ着けたこととなった。最後に残った横大道遺跡の調査では、70トンを超える鉄滓の処理に加えて製鉄炉の度重なる造り替えが確認されたため、当初予定した調査期間を大幅に延長することとなったが、工事工程との調整の結果、21日で年内の作業を終了し、1月以降に製鉄炉の補足調査を実施することにした。

なお、その後の協議の結果、製鉄炉の補足調査が次年度に持ち越しとなったことから、翌年の調査工程を考慮し、調査予定地区の一部1,800m<sup>2</sup>について2月に先行して表土剥ぎを実施した。

このほか、平成16・17・18年度に発掘調査を実施した南相馬市の北山下遺跡・仲山B遺跡について、福島県文化財調査報告書第442集『常磐自動車道遺跡調査報告47』として、同じく平成15・18年度に発掘調査を実施した相馬市の山岸硝庫跡について、福島県文化財調査報告書第443集『常磐自動車道遺跡調査報告48』として11月に報告書を刊行した。また、平成18年度に発掘調査を実施した南相馬市の原B遺跡と平成18・19年度に発掘調査を実施した大田切遺跡について、福島県文化財調査報告書第441集『常磐自動車道遺跡調査報告46』として2月に報告書を刊行した。

#### 4. 平成20年度の調査経過

平成20年度の常磐自動車道(浪江～相馬)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、福島県文化振興事業団遺跡調査部の職員10名を配置して実施した。当初計画では、相馬市1遺跡(西原遺跡)、南相馬市原町区5遺跡(菖蒲沢遺跡・西内遺跡・中山C遺跡・赤柴遺跡・荒井遺跡)、同市小高区4遺跡(君ヶ沢B遺跡・横大道遺跡・館越遺跡・四ツ栗遺跡)の合計10遺跡、総調査面積30,000m<sup>2</sup>が予定された。

調査は4月初旬より開始したが、変更箇所等があり、関係機関で協議した結果、相馬市に所在する西原遺跡(2次調査)、南相馬市原町区に所在する中山C遺跡・赤柴遺跡(3次調査)・荒井遺跡の3遺跡、同市小高区に所在する君ヶ沢B遺跡(2次調査)・横大道遺跡(2次調査)・館越遺跡・大田和広畑遺跡(3次調査)・四ツ栗遺跡(3次調査)の5遺跡、計9遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は、総計で29,200m<sup>2</sup>である。

平成20年度の調査も相馬工事事務所との事前協議を受けて、4月上旬から原町区内の中山C遺跡(1,200m<sup>2</sup>)・荒井遺跡(1,000m<sup>2</sup>)、小高区内の君ヶ沢B遺跡(1,000m<sup>2</sup>)・横大道遺跡(4,800m<sup>2</sup>)の4カ所で開始した。4月下旬には、各遺跡での表土剥ぎも進捗し、中山C遺跡では木炭窯跡、荒井遺跡では遺物包含層、君ヶ沢B遺跡では土坑等が確認された。横大道遺跡からは、古代と思われる木炭窯跡が20数基検出され、さらに製鉄炉跡も確認された。

5月に入ると、荒井遺跡で調査範囲が西側に広がることが判明し、新たに400m<sup>2</sup>が追加された。検出した遺構については順次調査が行われ、16日には、土坑5基、焼土遺構2基が確認された君ヶ沢B遺跡1,000m<sup>2</sup>の調査が終了し、館越遺跡(3,700m<sup>2</sup>)の調査に移行した。また、中山C遺跡では、斜面中腹から木炭窯跡と製鉄炉跡が各1基ずつ確認され、堅穴住居跡も検出された。

6月には、中山C遺跡の堅穴住居跡が5軒となり、同一箇所で頻繁に建て替えていたことが判明した。荒井遺跡では、検出した遺物包含層が縄文時代の河川跡であったことが確認され、隣接する微高地上に同時代の堅穴住居跡も確認された。6月下旬には、横大道遺跡で保存に関する協議が開始され、遺構の調査は協議結果を待つこととなった。さらに、館越遺跡でも木炭窯跡が多数確認され、北側斜面裾部600m<sup>2</sup>の範囲が追加された。13日には、荒井遺跡の1,400m<sup>2</sup>の調査が収束し、西側に隣接する赤柴遺跡の3次調査(3,500m<sup>2</sup>)に移行した。

7月になると、中山C遺跡1,200m<sup>2</sup>の調査が11日に終了し、本遺跡が平安時代10世紀代前半の

## 序　　説

集落跡と10世紀代後半の製鉄炉跡、中世の木炭窯跡の複合遺跡であったことが判明した。中山C遺跡の調査終了に伴い、四ツ栗遺跡(7,500m<sup>2</sup>)の調査が開始された。赤柴遺跡からは、縄文時代後期の堅穴住居跡や配石遺構、鍛冶炉跡や土坑等が確認された。館越遺跡で検出された木炭窯跡は、全長13mほどと東北でも最大級の長さを誇る古代の木炭窯跡であることが判明した。

8月には、赤柴遺跡で当初予定していた調査区南西端部にあるコンクリート擁壁の撤去が次年度に変更となり、当年度調査面積が減じることになった。四ツ栗遺跡では木炭焼成土坑が40基ほど確認され、館越遺跡では木炭窯跡が確認面から2mほどの深さで、かつ10mほどの長さになるため調査が難航していた。横大道遺跡は保存協議中であるため、現地作業は鉄滓の分類等に終始した。

9月に入ると、18日に赤柴遺跡3,100m<sup>2</sup>の調査が終了し、新たに相馬市西原遺跡5,200m<sup>2</sup>の調査に移行した。館越遺跡では連日の木炭窯跡の調査に追われ、製鉄炉跡の調査も同時に行われた。29日には四ツ栗遺跡7,500m<sup>2</sup>の3次調査が終了し、木炭焼成土坑、溝跡、堅穴状遺構等が確認され、古代の製炭遺跡であることが判明した。

10月には、当年度の調査の収束に向け、南相馬市原町区の西内遺跡・菖蒲沢遺跡の調査前の条件整備が急がれたが、両遺跡とも整わず、当年度の調査は事实上不可能となった。相馬市西原遺跡では、土坑50基ほどが確認され、縄文時代早・前期と古代の複合遺跡であることが判明した。また、10月下旬には、新たに君ヶ沢B遺跡2,500m<sup>2</sup>の調査が追加され、27日より開始した。

11月に入ると、15日に館越遺跡の現地説明会が開催され、264名の参加を得た。君ヶ沢遺跡では大規模な伏せ焼き法による木炭焼成遺構が確認され、西原遺跡では近世の建物跡も確認された。

12月には、新たに大田和広畠遺跡100m<sup>2</sup>の調査も行われたが、各遺跡の調査が収束に向かった。大田和広畠遺跡では土坑1基を確認し、3日に調査を終了した。この他、11日には君ヶ沢B遺跡、12日には西原遺跡で調査が終了し、19日に館越遺跡と横大道遺跡の調査が終了した。保存協議中の横大道遺跡では、木炭窯跡等の遺構が集中して検出された以外の範囲、2,900m<sup>2</sup>が調査終了となり、年明けに保存協議中の遺構群の養生を行うこととなった。

年が明けた1月14日から、館越遺跡出土鉄滓の分類作業と発掘器材の整理、プレハブ等の撤去作業を行い、22日から横大道遺跡の遺構群の養生を行い、1月30日に全ての現地作業を終了した。

その他、平成18・19年度に発掘調査を実施した南相馬市の小池田遺跡(1次・2次調査)・戸鳥土遺跡・切付遺跡・片倉遺跡について、福島県文化財調査報告書第450集『常磐自動車道遺跡調査報告51』として、平成18・19年度に発掘調査を実施した南相馬市の広谷地遺跡と石神遺跡について、福島県文化財調査報告書第451集『常磐自動車道遺跡調査報告52』として11月に報告書を刊行した。

## 5. 平成21年度の調査経過

平成21年度の常磐自動車道(浪江～相馬)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき福島県文化振興事業团遺跡調査部の職員7名を配置して実施した。当初計画では、新地町3遺跡(赤柴前遺跡・鴻ノ巣遺跡・白子下C遺跡)、相馬市2遺跡(払川遺跡・宿仙

木A遺跡)、南相馬市鹿島区1遺跡(榎本沢B遺跡)、同市原町区3遺跡(西内遺跡・葛蒲沢遺跡・赤柴遺跡)、同市小高区1遺跡(横大道遺跡)の合計10遺跡、総調査面積23,000m<sup>2</sup>が予定された。

調査は4月初旬より開始したが、調査の進捗に伴い変更等があり、関係機関で協議した結果、新地町に所在する赤柴前遺跡(1次調査)・鴻ノ巣遺跡・白子下C遺跡の3遺跡、相馬市に所在する宿仙木A遺跡(2次調査)、南相馬市鹿島区に所在する榎本沢B遺跡、同市原町区に所在する西内遺跡(2次調査)・葛蒲沢遺跡・赤柴遺跡(4次調査)の3遺跡、同市小高区に所在する横大道遺跡(3次調査)の計9遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は、総計で23,300m<sup>2</sup>である。

当年度の調査は、相馬工事事務所との事前協議を受けて、4月上旬から南相馬市原町区内の赤柴遺跡(600m<sup>2</sup>)を皮切りに、中旬には小高区の横大道遺跡(800m<sup>2</sup>)、鹿島区内の榎本沢B遺跡(2,800m<sup>2</sup>)の2カ所でも開始した。4月下旬には、赤柴遺跡では河川跡、榎本沢B遺跡では製鉄炉跡や木炭焼成土坑等が確認された。横大道遺跡では、南側の調査区で工事掘削ラインが確定し、このラインより西側にある製鉄炉跡や木炭窯跡の調査を行った。

5月に入ると、横大道遺跡で北区の調査700m<sup>2</sup>が追加され、調査面積が計1,500m<sup>2</sup>となった。北区では土坑3基と溝跡1条が確認された。5月下旬には、榎本沢B遺跡で製鉄炉跡2基、廃滓場跡1カ所、土坑6基が検出され、赤柴遺跡では平安時代と縄文時代の溝跡や河川跡の調査が行われた。また、横大道遺跡では、北区の調査が終了し、22日に当該地区的現地引渡しを行った。

6月になると、3日に赤柴遺跡の調査が終了したため、現地引渡しを行い、同時に、新地町鴻ノ巣遺跡(3,000m<sup>2</sup>)・赤柴前遺跡(1,000m<sup>2</sup>)の表土剥ぎを開始した。また、榎本沢B遺跡では、2基の製鉄炉跡が、それぞれ上下に重複していることが判明し、確認できた製鉄炉跡が5基になった。この他、鍛冶炉跡2基、土坑11基等が確認され、古代末の製鉄遺跡の様相が徐々に明らかとなった。

6月中旬から下旬にかけては、雨天のため作業ができない日々もあったが、鴻ノ巣遺跡・赤柴前遺跡では、木炭焼成土坑等が確認され、検出遺構の調査に従事した。さらに新地町白子下C遺跡(4,100m<sup>2</sup>)でも調査を開始し、近世から近代にかけての道跡の測量を行った。横大道遺跡では、1基の製鉄炉跡から炉壁が倒壊した状態で確認されたため、これの採り上げ作業を行った。また、木炭窯跡も20基以上が検出され、主に作業場跡のみの調査であったが、これらの調査が行われた。

7月には、常磐自動車道いわき工区側の調査が終了したため、新たに調査員を増員し、南相馬市原町区西内遺跡(3,400m<sup>2</sup>)の調査も開始した。このため、調査班は新地町で2班、南相馬市鹿島区で1班、原町区で1班、小高区で1班の計5班を、調査員8人で実施することになった。中旬には、鴻ノ巣遺跡・赤柴前遺跡で遺構検出作業がほぼ終了し、検出した土坑11基の調査が順次行われた。白子下C遺跡では、近世から近代の道跡1条のほか、平安時代の堅穴住居跡6軒、土坑1基等が確認され、西内遺跡でも平安時代の堅穴住居跡1軒が確認された。18日には横大道遺跡で現地説明会が行われ、小雨が降るなか109名の参加を得た。榎本沢B遺跡では、製鉄炉跡以外に掘立柱建物跡が3棟、柱列跡が2列確認され、廃滓場も厚く堆積していることが判明し、調査は困難を極めた。

8月になると、西内遺跡の北側調査区に隣接した箇所であらたに木炭窯が発見され、この部分の

## 序　　説

調査面積600m<sup>2</sup>が追加となり、西内遺跡の調査面積は4,000m<sup>2</sup>となった。鴻ノ巣遺跡や赤柴前遺跡では、盆前には調査が終了し、器材等の撤収後、20日に現地引渡しを行った。8月下旬には、横大道遺跡で空撮を行い、さらに、県教育委員会と南相馬市教育委員会、事業団とが協議を行い、主に調査区東側を対象とした横大道遺跡の範囲確認調査が開始された。また、榎木沢B遺跡の廃滓場の調査も収束に向かい、28日には器材等を撤収し調査が終了したため、31日に現地引渡しを行った。

9月になり、西内遺跡の調査と平行して菖蒲沢遺跡(1,100m<sup>2</sup>)の調査も開始した。菖蒲沢遺跡では木炭窯跡が確認され、西内遺跡でも木炭窯が3基となった。白子下C遺跡では、7軒の堅穴住居跡のうち、3軒が住居内鍛冶炉を有したり、カマドの造り替え等も認められる特徴があり、12日には現地説明会を開催した。あいにくの降雨のため参加人数は少なかったが、30名を超える人が遺跡を見学した。9月末には、白子下C遺跡で空撮を行い、横大道遺跡でも、遺構の調査は収束に向かった。菖蒲沢遺跡では、木炭窯跡のほか、平安時代の堅穴住居跡も確認され、住居跡内から土師器や、酸化焰で焼成された須恵器が大量に出土した。

10月に入ると、横大道遺跡では、遺構の調査がほぼ終了し、出土した大量の鉄滓の分類作業に追われた。また、当年度の調査区東側部分の取り扱いについて関係機関で協議し、13日から遺跡の養生作業を開始した。10月13日には、白子下C遺跡の調査が終了したため、現地引渡しを行い、当年度最後の調査遺跡である相馬市宿仙木A遺跡(4,900m<sup>2</sup>)の調査を10月15日から開始した。この段階で当年度の調査面積は23,000m<sup>2</sup>となり、相馬市払川遺跡(800m<sup>2</sup>)の調査は次年度以降となった。10月下旬には、西内遺跡や菖蒲沢遺跡で空撮を行い、地形測量等の作業を行った。

11月になると、6日に西内遺跡・菖蒲沢遺跡の調査が終了し、11日に現地引渡しを行った。横大道遺跡でも遺跡の養生作業が収束に向かい、調査区東側の本遺跡の範囲確認調査もほぼ終了した。16日には3年に及ぶ横大道遺跡のすべての調査が終了し、20日に現地引渡しを行った。宿仙木A遺跡では、縄文時代や平安時代の堅穴住居跡が検出され、遺物包含層や鍛冶炉跡等も確認された。また、調査区北側では埋没した河川跡が確認され、これの除去作業を重機を使って行った。

12月に入ると、調査は宿仙木A遺跡のみとなり、検出した遺構の調査が順調に進んだ。8日には空撮を行い、中旬には発掘器材の整理作業も行われ、器材の搬出作業も行った。18日にはすべての調査が終了したため、現地の引渡しを行った。

年が明けた1月中旬には、横大道遺跡の北区で追加調査が計画され、関係機関の協議を経て、2月上旬に300m<sup>2</sup>の追加調査を行うこととなった。調査は2月8～10日に行われ、10日に現地引渡しを行った。これにより、当年度の調査は9遺跡、調査面積は23,300m<sup>2</sup>となった。

この他、平成18～20年度に発掘調査を実施した南相馬市小高区の四ツ栗遺跡(3次調査)・大田和広畑遺跡について、福島県文化財調査報告書第458集『常磐自動車道遺跡調査報告55』として11月に報告書を刊行した。同じく、平成18～20年度に発掘調査を実施した南相馬市小高区の荻原遺跡(3・4次調査)・君ヶ沢B遺跡について、福島県文化財調査報告書第467集『常磐自動車道遺跡調査報告59』として、平成23年3月に報告書を刊行した。

(吉　田)

## 第2節 調査方法と出土遺物の分類

### 1. 調査方法

今回の調査で用いた測量座標は、世界測地系に基づく国土座標IX系の座標である。本報告書ではこの座標をメートル単位の座標値として表記した。現地においては測量会社に委託して、既知点から算出したメッシュ測量点の打設および簡易水準点の移動を行い、調査区内の測量基準点とした。また、調査区内における遺構・遺物のおおまかな位置を示すために、調査範囲の北西隅を原点とする5m単位の方眼をグリッドとして設定した。なお、先述のメッシュ測量点はこのグリッドに一致させた形で設定している。グリッドの呼称には、北から南に1・2…と算用数字を、西から東にA・B…とアルファベットを用い、これを組み合わせてA1・B2と呼称するのを基本とし、赤柴遺跡では北西隅のA1グリッドから南東隅のT66グリッドまで設定した(第2編第1章図2参照)。荒井遺跡では当初予定していた調査範囲の西側に調査範囲が拡張したため、A列の西側にグリッドが設定されることとなり、アルファベット最後の2文字Y・Zを加えて、Y3～H13までグリッドを設定した(第1編第2章図2参照)。また、赤柴遺跡のH62グリッドは、荒井遺跡のY3グリッドと同じ位置にあるグリッドである。

調査区内堆積土の掘削は、現表土には重機を用いた。それ以外の堆積土および遺構内堆積土の掘削は基本的に人力により、唐鋤・草割り・移植ゴテ・剣先スコップ等を用いて行った。ただし、土量が多く、遺物を確認できない堆積土については、試掘を実施し、遺構・遺物がないことを確認した後、調査員立ち会いのもと、重機による慎重な掘削を行った。遺構の掘り込みにあたっては、調査区内の基本土層とどのような関係にあるかに留意し、可能な限り断面図に記録した。

竪穴住居跡等の大型遺構は土層観察用ベルトを残した4分割法を基本とし、遺存状態の悪いものは2分割法を用いた。土坑は、半截2分割法、溝跡は適宜土層観察用ベルトを残して調査した。

遺物は、遺構およびグリッド単位、一部ドット単位で採り上げを行い、出土層位を記録した。遺構の記録は、平面図と土層断面図の作成を原則とし、平面図については、先述したメッシュ測量点を基点としたトータルステーションを使用して測量し、CADソフトを介して作図し、現場で結線した。断面図については、遺構内に移動した簡易水準点を基に作図した。各遺構および土層の図化に際しては、1/20の縮尺を原則としたが、遺構の規模・性格に合わせて1/10・1/100の縮尺も適宜使用した。また、遺跡基底面の地形図は1/400の縮尺で作成した。

土層の記載方法は、基本土層については、ローマ数字I・II・IIIを用い、さらに細分が必要な場合はアルファベットの小文字a・b・cを付して区分し、遺構内堆積土については基本土層と区別するため算用数字1・2・3で表記した。

写真は35mm判のモノクロームとリバーサルフィルムを使用するとともに、補助的にデジタルカメラを用い、同一被写体で撮影を行った。

## 序　　説

これらの調査記録および出土遺物については、報告書刊行後に当事業団の定める基準に従って整理を行い、福島県教育委員会へ移管した後、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。

## 2. 出土遺物の分類

荒井遺跡・赤柴遺跡から出土した土器類については、下記のような大まかな時期分類を行って報告する。また挿図中には、該当する分類番号を1点ごとに略表記し、おおよその該当する時代・時期を示した。表記法はI群1類土器であれば「I-1」のように表している。

### I群　縄文時代早期の土器

- 1類 押型・沈線文系土器(日計式・三戸式・田戸下層式等)
- 2類 条痕文系土器(鶴ヶ島台式・茅山下層式等条痕文を地文とするもの)
- 3類 縄文条痕土器(梨木畑式・北前式等の縄文と条痕文を地文に併用するもの)
- 4類 摺糸文系土器群(大畠G式等の摺糸文を地文に使用するもの)
- 5類 後葉～末葉の土器と判断したが、1～4類に特定できないもの。

### II群　縄文時代前期の土器

- 1類 初頭の土器群(花積下層式等)
- 2類 前葉の土器群(大木1式・関山2式・大木2a式等)
- 3類 中葉の土器群(大木3～5式・浮島式等)

### III群　縄文時代中期の土器

### IV群　縄文時代後期の土器

- 1類 前葉の土器群(網取I・II式・堀ノ内1・2式・三十穂場式等)
- 2類 中葉の土器群(加曾利B2・3式等)
- 3類 後葉の土器群(新地式等)
- 4類 後期の土器と判断したが、型式名が特定できないもの

### V群　縄文時代晩期の土器

### VI群　弥生時代の土器

### VII群　平安時代の土師器・須恵器

陶磁器類については、近世以降の所産であるため、掲載していない。

石器については、特別な群・類名は設定せず、計測値と石質を表記した。掲載にあたり、縄文時代の遺構内出土のものについては、剥片や特徴の不明瞭な欠損品等を除き、可能な限り図示し、遺構外出土遺物および平安時代以降の遺構から出土したものについては、遺存状態の良いものを選別した。なお、石材の名称については、外部委託したパリノ・サーベイ株式会社の鑑定結果を表記している。このため、流紋岩と呼ぶ石材は流紋岩質溶結凝灰岩、粘板岩は頁岩(粘板岩)と表記した。

(笠　井)

## 第2章 地理的環境と歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

#### 1. 遺跡の位置

福島県は東北地方南部、太平洋側に位置し、県土の総面積は13,782km<sup>2</sup>で、北海道、岩手県に続き全国3番目の面積を有する。県土の約8割は山地で占められ、県内には、西端の越後山脈、中央の奥羽山脈、東部の阿武隈高地が平行して南北に連なり、地理的・文化的に県土を3地域に区分している。一般に奥羽山脈以西を雪深く肥沃な「会津地方」、奥羽山脈と阿武隈高地に挟まれた人口の密集する盆地が数珠繋ぎに連なる地域を「中通り地方」、阿武隈高地と太平洋に挟まれた気候の穏やかな海岸地帯を「浜通り地方」と呼んでいる。今回報告する荒井遺跡・赤柴遺跡は、浜通り地方北部の南相馬市に所在する。行政区画では荒井遺跡が南相馬市原町区馬場字荒井、赤柴遺跡が馬場字赤柴および荒井にあたり、JR常磐線原の町駅から南西へ約4.5km、相馬野馬追の主要会場である野馬追祭場からは西へ2.6kmほどの位置にある。遺跡の東方200mには浜通り北部の山際を南北に結ぶ幹線道路である県道34号線が走っている。

#### 2. 遺跡周辺の地形

浜通り地方の地形は、大きく阿武隈高地・河岸段丘を含む丘陵地帯・海岸低地帯の3つに区分できる。阿武隈高地は東西50km、南北200kmの規模を有し、標高500~700mのなだらかな平坦面を残す隆起準平原であると考えられている。阿武隈高地の分水嶺には、靈山(825m)、花塚山(919m)、日山(1057m)、大滝根山(1192m)等の山々が残丘状に散在している。

阿武隈高地の東縁には、双葉断層(岩沼~久ノ浜構造線)が北北西から南南東方向へ継続している。この断層は、断層の東側に対して断層西側が相対的に高まり、断層東側が北へ、断層西側が南へずれた、左横ずれ逆断層とされている。浜通り地方中部以南では、この断層が形成する断層崖が、阿武隈高地と丘陵地帯・低地帯との境をなしているが、浜通り地方北部では、双葉断層に沿って断層崖が発達していない。浜通り地方北部では、双葉断層から分岐して、より東側を継走する相馬断層が、阿武隈高地と丘陵地帯との境界となっている。

南相馬市原町区を流れる河川は、新田川とその支流にあたる水無川が北部を、太田川が南部をそれぞれ東流している。これらの河川の勾配は山間部では急傾斜で、両岸のそりたった渓谷を形成するが、双葉断層の東側に入ると傾斜が緩やかになり、両岸に細い沖積平野を形成する。南相馬市域では、これらの河川とその支流に平行するように標高50~100mの東西方向に細長い丘陵が発達し、これらの丘陵の一部は海岸にまで達し、比高差10~30mほどの海蝕崖となっている。新田川・

太田川の中・下流域には、低位・中位・高位の河岸段丘がよく発達し、平坦な台地を形成している。

荒井・赤柴の両遺跡もこうした段丘面上に立地しており、赤柴遺跡は中位Ⅱ段丘面、荒井遺跡は中位第Ⅲ段丘面の西縁に位置する現在の猿部川の原形となる河川により形成された南北方向に細長い沖積地上に所在する。

### 3. 遺跡周辺の地質

非グリーンタフ地域にあたる浜通り地方は、双葉断層を境として二つの地域に区分される。双葉断層西側の阿武隈高地では、花崗岩類が広く分布し、その東縁近くには古生層が発達する。一方双葉断層東側の丘陵地帯には、中生代・新生代の地層が丘陵を形成し、それらが侵食されて段丘地形や谷底平野を形成している。

南相馬市周辺で最も古い地層とされる松ヶ平変成岩類は、古生代デボン紀以前に形成されたと考えられている変成岩類で、新田川上流の原町区高の倉地区および真野川中流の飯館村松ヶ平から鹿島区上柄窪に至る地域に分布する。主に泥質・珪質片岩からなり、これらに砂質片岩、緑色片岩、角閃岩が小規模な分布を見せる。これらの変成岩は縄文時代においては主に打製・磨製石斧等の石器石材として使用されている。

次に続く、古生代デボン紀から二疊紀にかけて形成された相馬古生層が、新田川上中流域に分布している。いずれも海成層で、頁岩(粘板岩)・砂岩・礫岩等の主に堆積岩からなる。このうち、頁岩(粘板岩)は、縄文時代においては石鎚や石斧等に、弥生時代においては石庖丁や石鍬等の石材として使用されている。

中生代の地層としては、ジュラ紀後期から白亜紀前期に形成された相馬中村層群がある。本層群は、相馬市初野付近を北限、原町区馬場付近を南限とし、双葉断層に沿って幅2~4kmほどの細長い分布を見せる。主に砂岩・頁岩等の堆積岩からなり、一部に石灰岩や石炭薄層を含んでいる。また、原町区高の倉地区の北方地域には、白亜紀前期の火山岩類である高倉層が小規模な分布を見せる。ここで産出される火山岩は、主に安山岩・流紋岩・デイサイトである。高倉層堆積以後の白亜紀前期には、浜通り地方西部は造山活動が活発になり、花崗岩・閃綠岩に代表される深成岩が貫入した。この貫入に伴い、周辺の相馬古生層や相馬中村層の境界付近では接触変成作用が生じ、ホルンフェルス・結晶片岩・角閃岩等の変成岩が発達する。なお、接触変成帶の一部はスカルン鉱床を伴い、磁鉄鉱やチタン鉄鉱等の鉱物を産出する。

続く新生代の地層は、新第三紀および第四紀に堆積したものである。新第三紀の最下部は、中新世前期に堆積した塩手層である。塩手層は、河川堆積物・浅海成堆積物・湖成堆積物で構成され、主に礫岩・砂岩・シルト岩等の堆積岩からなる。双葉断層西部では谷を埋めるように分布し、東部では新田川および水無川の中流域に堆積している。本層には、堆積物中に精緻な流紋岩質溶結凝灰岩層を含み、赤柴遺跡で多量に出土するこの種の石材の供給源となっていた可能性がある。この他新第三紀中新世の地層としては、天明山層および靈山層があり、双葉断層西側に分布する。両層と

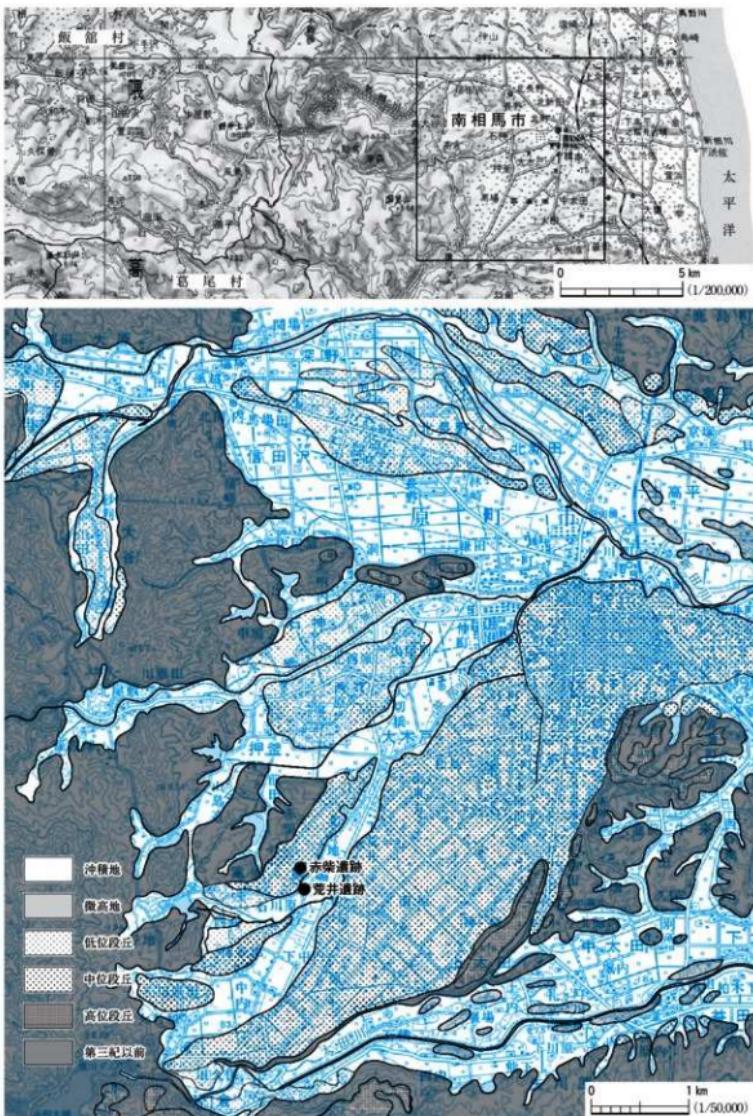


図2 地形分類図

もに溶岩流が凝固した玄武岩を主とするもので、輝石安山岩や流紋岩を含む。次の新第三紀鮮新世の地層としては、仙台層群があり、下位より亀山層、竜ノ口層、向山層、大年寺層の4層に区分されている。竜の口層・大年寺層は海成堆積物、向山層は河川・ラグーン堆積物とされる。仙台層群の各層は、主に半固結の泥岩(シルト岩)・砂岩・凝灰岩からなり、層中に多くの火山灰層を介在する。本地域では大年寺層が丘陵および段丘面の基盤層となっている場合が多い。

第四紀更新世の地層は、南相馬市域では真野川・上真野川・新田川・水無川に沿って分布する段丘堆積物および沖積層がある。本地域の段丘は、古いものから、高位Ⅰ・高位Ⅱ・中位Ⅰ・中位Ⅱ・中位Ⅲ・低位Ⅰ・低位Ⅱ段丘に区分されている。高位段丘の堆積物は風化礫を主体とし、間にラミナ状の砂層を挟んでおり、上位に風化火山灰質土壌もしくは、シルト・砂層をのせる。中位段丘堆積物は風化していない礫を主体とし、上位に砂礫層と風化火山灰質土壌をのせる。赤柴遺跡のLV・IVはこの砂礫層と風化火山灰質土壌に対応すると考えられる。低位段丘の堆積物はシルトが介在する淘汰の悪い砂礫層からなり、その上位に粘土質の砂層をのせている。沖積層は各河川に沿って分布している。シルト層・砂礫層・泥炭層からなり、軟弱地盤であることが多い。

(笠　井)

## 第2節 歴史的環境

南相馬市は、合併前の旧一市二町の頃より、戦後に行われた各種機関の発掘調査のほか、近年では原町火力発電所や常磐自動車道建設等に関連した発掘調査件数が年々増加している。これら開発に伴う遺跡発掘調査により得られた知見は、当地域の歴史像をより鮮明なものとしている。以下本節では、常磐自動車道建設予定地内に所在する荒井遺跡(1)・赤柴遺跡(2)の両遺跡を今回報告するにあたって、これまで積み重ねられてきた知見を踏まえ、当地域の歴史的推移を時期ごとに分けて概観したい。なお、遺跡名の( )内にある番号は、図3および表2に一致する。

### 旧石器時代

南相馬市の原町区内において、遺跡台帳を紐解くだけで旧石器時代の散布地を10数カ所確認することができる。その遺跡分布を見ると、塙崎丘陵北縁部のほか、橋本町A遺跡(18)や橋本町B遺跡(19)、陣ヶ崎A遺跡(24)等が立地する雲雀ヶ原台地と、畦原A遺跡(34)および畦原C遺跡(35)が立地する畦原台地上で散布が確認されている。近年、畦原台地の南側に位置する小高区内の荻原遺跡(36)において、ブロックや製品が確認され、荒井遺跡の南側に位置する切付遺跡(23)で彫器が出土し、赤柴遺跡でも、ナイフ形石器が出土していることから、今後も発掘調査による資料の増加が期待される。

### 縄文時代

縄文時代に入ると当該区域の遺跡数は飛躍的に増加する。草創期に属する資料は、隣接する飯館村の岩下向A遺跡において当該期に属するとされる竪穴遺構と土器が確認されているが、両遺跡周辺での様相は依然として不明である。早期の遺跡としては、早期中葉の遺物が出土した上ノ内遺跡

(26)・小高区の君ヶ沢B遺跡(37)があり、君ヶ沢B遺跡では堅穴状遺構が調査され、赤柴遺跡でも押型文系・沈線文系の土器片が出土している。早期後葉～前期初頭にかけては、赤柴遺跡で集落が営まれる時期であるが、原遺跡(28)・原B遺跡(29)、太田川以南の八重坂A遺跡(33)・羽山B遺跡(32)・荻原遺跡、水無川以北の石神遺跡(15)・仲山B遺跡(4)・仲山C遺跡(3)等で早期末葉から前期前葉の集落跡が確認されており、この時期の遺跡は阿武隈高地東縁部付近で調査例が増え、近年資料の蓄積が進んでいる。前期の遺跡では、赤柴遺跡に隣接する滝ノ原遺跡(21)で堅穴状遺構が確認されているほか、前期前葉から中葉にかけての集落跡が、小池田遺跡(5)で確認されている。中期に入ると、原B遺跡で中期前葉の集落が調査されており、塩ヶ崎丘陵の南縁部の高松B遺跡(9)・植松A遺跡(10)等で集落跡が確認されるほか、滝ノ原遺跡・原町西町遺跡(17)で中期後葉の複式炉を伴う住居跡が確認されている。後期は、荒井遺跡・赤柴遺跡で主体となる時期であるが、当該地域においては、次の晩期と合わせて確認された遺跡数の少ない時期である。赤柴遺跡の北1.5kmの丘陵上に位置する前田遺跡(20)は後期に属する集落跡と考えられており、横川ダム湖底に沈んでいる羽山遺跡(31)において後期から晩期の土器や土偶が採集されている。これまで遺跡の分布が希薄であった河川流域の低地部で遺跡の存在が確認され始めており、原町西町遺跡では、後期前葉の住居跡と後・晩期の包含層等が見つかっている。なお、小高区で確認されている貝塚は、原町区および鹿島区にかけては確認されていない。

#### 弥生・古墳時代

弥生時代の遺跡は全体的な傾向として、赤柴遺跡・荒井遺跡の立地する市域の西側に比較して、市域の東側に遺跡が集中する。これは古墳時代における古墳や集落の分布においても引き続き見られる現象であり、西側では小池田遺跡等にわずかに遺物の散布が確認される程度である。周辺地域を見渡しても、弥生時代中期初頭に関しては資料数が少なく、当地域における様相は未だ不明瞭である。中期中葉に入ると鹿島区の塩ヶ崎丘陵上に天神沢遺跡・八幡林遺跡が、雲雀ヶ原台地上に桜井A遺跡・高見町A遺跡、大堀丘陵南縁部に位置する川内迫B遺跡等遺跡数が南北に広く展開する。中期後葉に入ると遺跡数がさらに増加し、中でも前述の天神沢遺跡においては、石庖丁や大陸系磨製石器が多く生産されていることが確認され、同丘陵の東縁部においても小規模な集落遺跡が確認されている。その他、桜井A遺跡等で同時期の土器棺墓が発見されている。また桜井遺跡は弥生時代中期末葉の桜井式土器の標識遺跡として知られている。赤柴遺跡ではこの時期の所産と考えられる住居跡が1軒だけ見つかっている。後期の遺跡としては、桜井遺跡に隣接する高見町A遺跡で十王台式期の集落が営まれ、赤柴遺跡や君ヶ沢B遺跡でも遺物の出土がみられる。当地域における弥生時代後期の遺跡数も決して多くはないが、前期古墳の存在を考慮すると今後沖積地から当該時期の遺跡が発見されていく可能性がある。

古墳時代には、雲雀ヶ原台地北縁部に全長約75mの桜井古墳を最大とした桜井古墳群が築かれている。桜井古墳群は上浜佐支群と高見町支群の2つの支群に分けられ、前者は桜井古墳を含めた前期を中心に古墳が築かれていく。対後に高見町支群においては後期の大規模群集墳が形成され、時代

## 序　　説

を下るごとに墓域が移り変わることが見て取れる。この他、鹿島区の塩崎丘陵周辺では大規模な真野古墳群が形成され、南の大堀丘陵上には装飾壁画をもつことで有名な羽山横穴群(25)や水無川北岸の城下横穴墓群(13)等、多数の横穴古墳墓群が築かれている。

### 奈良・平安時代

大化の改新後、奈良・平安時代にかけて、当地域は陸奥国行方郡となるが、その中核となるのが郡衙跡に比定される泉官衙遺跡である。この遺跡はかつて礎石や古瓦、炭化米等が出土したことから泉廐寺跡と呼ばれてきたが、その後の調査により、郡庁院・正倉院・郡寺等の関連施設をもつ郡衙跡であることが確認された。出土した木簡から、当郡衙は8世紀前半には成立していたものと考えられ、その初現は7世紀後半、廐絶は10世紀頃と考えられている。また、宮城県の多賀城跡から出土した漆紙文書には、宝亀11(780)年の「行方軍団」の記載があり、その所在比定地として植松廐寺跡(11)が考えられている。ほかにも官衙に関連が深い瓦を生産した窯跡として、泉官衙遺跡に供給した京塙沢瓦窯跡、植松廐寺跡に供給した入道追瓦窯跡(8)が確認されている。赤柴遺跡の同一丘陵上に立地する滝ノ原窯跡(22)では長頭瓶を焼いた平安時代の須恵器窯が確認されている。またこの時期は、海浜部の丘陵地帯を中心に大規模な鉄生産が行われており、塩崎丘陵突端の金沢地区では100基を越える製鉄炉跡のほか、木炭窯、鍛冶遺構等が複数調査されている。製鉄・鍛冶関連の遺跡は、鹿島区の大庭地区・割田地区遺跡群等で多くの遺構が調査されたほか、近年では、原町区の丘陵地帯に位置する伸山B遺跡や中山C遺跡(14)で小規模な製鉄関連遺構が調査され、小高区の荻原遺跡では鋳型を含む製鉄遺構、横大道遺跡から8世紀にさかのばる環状盛土を伴う製鉄遺構、隣接する館越遺跡では大規模な木炭窯跡群が調査されている。その他、常磐自動車道関連で調査された、菖蒲沢遺跡(6)・西内遺跡(7)・石神遺跡(15)・戸鳥土遺跡(16)・片倉遺跡(30)で、平安時代の住居跡および集落跡が確認されている。この時期、赤柴遺跡でも集落が営まれ、鍛冶遺構も見つかっている。

### 中世以降

律令体制が崩壊し、源賴朝の奥州征伐が終わると、当地域は千葉常胤に所領として与えられ、建武2(1336)年に常種の子孫である相馬光胤が小高区小四郎内に小高城を築き、ここに移り住んで以後300年、相馬氏の本拠とした。南北朝時代の相馬氏は、北朝側に加担し支配地を広げ、戦国時代には伊達氏の内部抗争に関わり有力大名としての地位を固めた。この時期の遺跡としては、別所館跡(27)等相馬家臣団や地侍の居所であった城館跡が多く認められる。赤柴遺跡の北約3kmには、慶長年間の短期間であるが相馬氏の本城ともなった牛越城跡(12)が築かれる。

近世は、豊臣秀吉の奥州仕置き以後、宇多・行方・標葉郡の48,700石の所領が確定し、引き続き相馬氏が近世大名として当該地域を統治した。相馬中村藩政下では、参勤交代により浜街道が整備され、原町市街地の母体となる原の町宿が形成されるとともに、雲雀ヶ原台地を開拓するように巡る野馬土手(38)が築かれる。この土手は、相馬中村藩が野馬追の神事を行うために放った野馬が増殖し、近隣の農作物に被害を与え始めたことから、寛文6(1666)年に3代藩主相馬忠胤により数年の



図3 周辺の遺跡位置図(原町)

表2 荒井遺跡・赤柴遺跡周辺の遺跡（南相馬市）

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	荒井	原町区馬場字荒井	集落跡	縄	21	岡ノ原	原町区馬場字岡ノ原	散布地	縄
2	赤柴	原町区馬場字赤柴・荒井	集落跡	縄・平	22	岡ノ原原跡	原町区馬場字岡ノ原	窓跡	平
3	仲山C	原町区深野字仲山	集落跡	縄・奈・世	23	羽付	原町区馬場字羽付	集落跡	縄・世・代
4	仲山B	原町区深野字仲山	集落跡	縄・平・中	24	陳崎A	原町区上太田字陳ヶ崎	散布地	旧
5	小池田	原町区深野字小池田	集落跡	縄・平	25	鶴山横穴群	原町区中太田字天狗田	古墳	古
6	荒瀬沢	原町区深野字荒瀬沢	窓跡	平	26	上ノ内	原町区上太田字上ノ内	散布地	縄
7	西内	原町区深野字西内	集落跡	縄・平	27	羽付加跡	原町区中太田字羽付	城館跡	中
8	人道追瓦窓跡	原町区上北高字人道追	窓跡	奈・平	28	原	原町区馬場字原	集落跡	縄
9	高松B	原町区上北高字高松	集落跡	縄・平	29	原B	原町区馬場字原	集落跡	縄
10	植松A	原町区上北高字植松	集落跡	縄	30	片食	原町区片食字片食	集落跡	平
11	植松要寺跡	原町区上北高字植松	官衙関連	奈・平	31	羽山	原町区片食字羽山	散布地	縄
12	牛越城跡	原町区牛越字館	城館跡	中	32	羽山B	原町区片食字羽山	散布地	縄
13	城下横穴群	原町区牛越字城下	古墳	古	33	八重坂A	原町区片食字八重坂	散布地	縄
14	中山C	原町区石神字中山	集落跡	平・中	34	原A	原町区片食字原	散布地	旧・縄・平
15	石神	原町区石神字石神	集落	縄・平・中	35	原原C	原町区片食字原	散布地	旧・縄
16	戸鳥土	原町区押釜字戸鳥土	集落・塚	縄・平・世	36	萩原	小高区羽倉字萩原	集落跡	旧・縄・平
17	原町西町	原町区西町三丁目	集落跡	縄・弥・世	37	君ヶ沢B	小高区羽倉字君ヶ沢	集落跡	縄・平
18	横木町A	原町区横木町	散布地	旧	38	野馬土手	原町区地内	土壠	古
19	横木町B	原町区横木町	散布地	旧	39	菖蒲沢野馬土手	小高区羽倉地内	土壠	世
20	前田	原町区押釜字前田	散布地	縄	40	原町飛行場跡地	原町区地内	軍事施設	代

時代略記（旧：旧石器・縄：縄文・弥：弥生・古：古墳・奈：奈良・平：平安・中：中世・世：近世・代：近代）  
※原町飛行場跡地は道路整備外

歳月をかけて構築されている。雲雀ヶ原台地を開むもの以外にも、阿武隈丘陵に沿って南北に延びる土手も確認されている。この南北に延びる土手を、原町区域内では野馬土手と共通呼称をしているが、小高区内では菖蒲沢野馬土手(39)と呼ばれている。

近代に入ると、荒井遺跡・赤柴遺跡に隣接する雲雀ヶ原台地上に陸軍の飛行場が誘致されることになり、昭和15(1940)年熊谷陸軍飛行学校原町文教場が開場している。以後各地の陸軍飛行学校の分教場となり、戦況が悪化していく中、最終的には陸軍特別攻撃隊の訓練基地として運用された。現在では、荒井遺跡の東方200mの位置に、当時の陸軍航空隊の門柱や格納庫の壁や基礎の一部、航空神社(雲雀ヶ原神社)が残り、当時の面影をわずかに残している。赤柴遺跡で確認された防空壕もこの飛行場に関連する可能性が高い。

(西 澤)

## 引用・参考文献

- 西 澤 2001 「図説 相馬・双葉の歴史」
- (財)福島県文化振興事業団 2007 「仲山B遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告47』
- (財)福島県文化振興事業団 2008 「原B遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告46』
- (財)福島県文化振興事業団 2008 「小池田遺跡(1・2次調査)・戸鳥土遺跡・羽付遺跡・片食遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告51』
- (財)福島県文化振興事業団 2010 「萩原遺跡(3・4次調査)・君ヶ沢B遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告59』
- 原町市教育委員会 2005 「原町市内遺跡発掘調査報告書10 平成16年度試掘」
- 南相馬市教育委員会 2010 「野馬土手(原町区西町地区)・原町西町遺跡」

# 第1編 荒井遺跡

遺跡記号 MSC-ARI

所在地 南相馬市原町区馬場字荒井ほか

時代・種類 繩文時代の集落・河川跡

調査期間 平成20年4月14日～6月18日

調査員 吉田 功・吉田秀享・笠井崇吉  
西澤正和



## 第1章 調査経過

荒井遺跡は、平成18年度に遺跡推定地とされた場所であり、平成19年8月に実施された試掘調査により縄文時代後期の遺構・遺物の存在が確認できることから、新たに「荒井遺跡」として登録された。常磐自動車道建設工事に伴い、工区内の1,000m<sup>2</sup>について発掘調査が必要となり、平成20年4月に福島県教育委員会から委託を受けた財団法人福島県文化振興事業団が発掘調査を実施した。

調査は4月14日から開始した。現地連絡所プレハブ・仮設トイレを隣接する赤柴遺跡に設置し、重機を導入しての表土除去作業を開始した。表土除去作業が終了した同月17日からは、作業員30名ほどを導入し、器材搬入・整理、発掘現場環境の整備を行った後に、遺構検出作業を開始した。遺構検出は、排土置き場のある西側から東側に向かい、5月上旬までかけて実施した。この遺構検出作業で、調査区東側で縄文時代後期の住居跡・土坑・土器埋設遺構等を確認したほか、試掘調査で縄文時代後期の遺物包含層とされていたものが、河川跡に伴うものであることが判明した。また、この遺物包含層が調査範囲の南側に続くことが確認されたことから、福島県教育委員会と協議の末、調査範囲を400m<sup>2</sup>拡張することとし、調査面積が1,400m<sup>2</sup>となった。住居跡等の遺構の精査および河川跡の掘り下げは、5月上旬から遺構検出と平行して行った。5月中旬から6月上旬にかけては天候不順な日が多く、調査範囲の標高が周囲の水田よりも低いことから、調査区内は何度も水没した。このため、排水溝を整備して遺跡内の排水を図った。5月下旬には遺構精査および記録も進み、地形測量、調査完了の写真撮影を経て、6月13日には作業が終了した。その後、器材および作業員を赤柴遺跡へ移動させた。6月18日には、東日本高速道路株式会社へ現地の引渡しを行い、荒井遺跡の現地での調査は終了した。

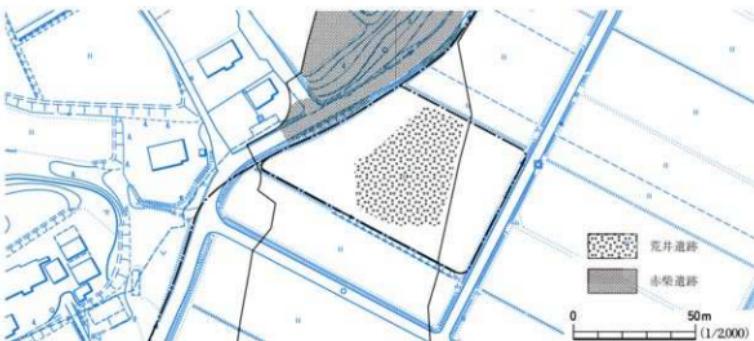


図1 調査区位置図

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺構の分布と基本土層

#### 遺構の分布（図2、写真1～3）

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑4基、土器埋設遺構1基、溝跡1条、性格不明遺構1基と河川跡3カ所である。各遺構は、調査区東部の微高地上に住居跡・土坑・土器埋設遺構・溝跡が南北方向に並び、調査区中央には河川跡があり、調査区西側の微高地上に性格不明遺構が立地している。荒井遺跡周辺は基盤となる段丘面が広く、沖積地化しており、現在の猿部川の元となる河川が絶えず流路を変更しながら概ね北流していたようで、南北方向に走る河川跡と、その間の南北方向に細長い微高地が連続していたものと推測できる。今回の調査で確認された遺構群は南北方向に走る河川跡と、その東西両側の微高地の一角に所在している。

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器片14,725点、弥生土器片1点、石器688点、土製品8点である。これらの大半は調査区中央の河川跡から出土しており、特に2号河川跡から出土した。縄文時代後期前葉の遺物は廃棄された状態で出土した。

#### 基本土層（図2、写真4）

今回の調査区は、調査前は水田であった。このため、耕作や搅乱が基底層であるLⅢにまで及んでいる部分が多く、本来の堆積状況を示す部分は極めて少ない。調査区内の土層観察にあたっては、調査区内の各地点で各層ごとの特徴や遺構の検出状況・包含遺物などから対応させ、3層に大別した。以下、各層の特徴や遺構・遺物の関係について述べていく。

LⅠは、表土・水田耕作土等で、調査範囲の全域に堆積する。厚さは15～70cm前後である。調査区内はすべて水田として利用されており、大半は水田の床土と考えられる粘質土である。

LⅡは、水成堆積層で、調査範囲の全域に堆積する。中間にラミナ砂層を包含する。厚さは6～24cmを測る。2・3号河川跡を含む遺構の上部に堆積していたことから、縄文時代後期以後の堆積物である。1号河川跡のみが、この層の上部で確認された。

LⅢは、遺跡の基盤となるにぶい黄褐色の砂層である。排水溝の一部をトレンチとして深掘りした結果、この層の下には褐色砂礫層、黒褐色砂層、泥炭化した黒色土層、黄灰色砂層が存在するが、いずれも無遺物層であり、調査対象とはしなかった。

（笠 井）

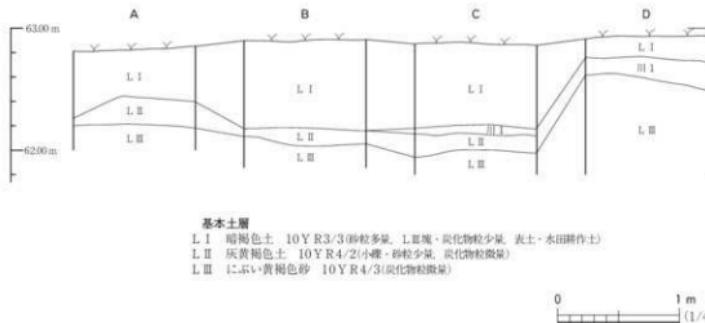
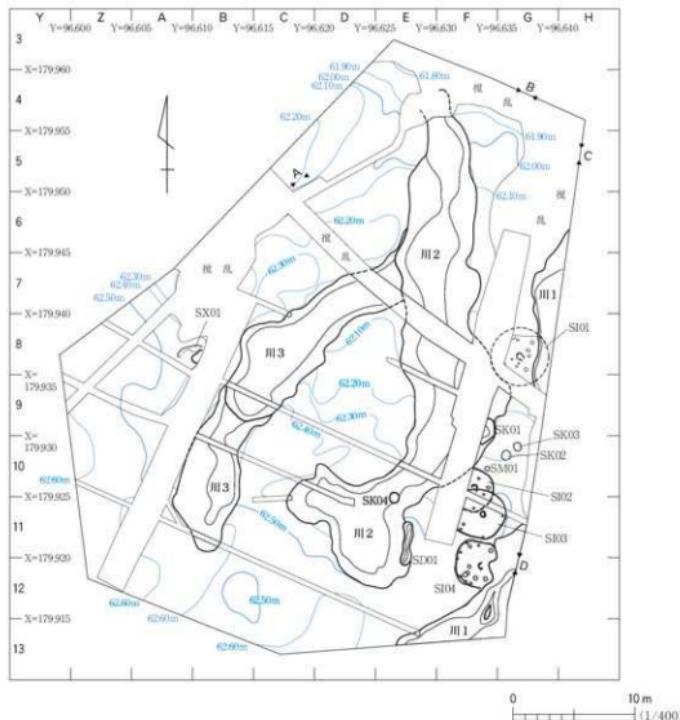


図2 遺構配置図・基本土層

## 第2節 壇穴住居跡

荒井遺跡では縄文時代後期前葉～中葉の所産と考えられる住居跡4軒を検出した。住居跡は、すべて調査区東部の1・2号河川跡に挟まれた微高地上に立地し、一部重複関係をもちらながら近接した位置に営まれていた。以下番号順に説明する。

### 1号住居跡 S I 01

#### 遺構(図3、写真5・6)

本遺構は、調査区東部のG 8・9グリッドに位置し、川1・2に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。周辺には、南西4mの位置にSK 01、南6mにSK 02・03が所在する。重複する遺構は認められない。

本遺構は、周囲が川1および用水路等の搅乱により壊されていたため、明瞭な範囲を確認できなかつたが、基本土層であるL II・IIIと明瞭に異なる堆積土の広がりを確認した。遺構である可能性もあることから、堆積土範囲内に十字の土層観察用ベルトを設定し掘り下げを開始したところ、石圓炉の上面が露出したため住居跡と認識した。

遺構内堆積土は上面が後世の削平により失われており、不明な点が多いが、遺存する部分に限れば、2層に分けられた。 $\ell$  1は遺構全域で確認した堆積土である。炉の周辺付近では床面直上に堆積する砂質土で、洪水等で遺構内に流れ込んだ自然堆積土と判断した。 $\ell$  2はL IIに非常に近い堆積土で、遺構の中央へ向かって三角形状の堆積を示している。周囲からの流入土と判断した。

本遺構は周壁が失われているため、遺構の平面形および規模は不明であるが、遺構の時期・堆積土の範囲・柱穴の位置関係から、直径5m弱の円形か円形に近い隅丸方形をしていたものと推定される。遺構の方位は主柱穴と考えられるP 9-2間とP 4-8間の中点を結んだ線を基準にするとN 11°Eを示す。床面はL IIIに形成され、硬く締まり、概ね平坦である。

本遺構の遺構内施設としては、石圓炉と柱穴を含む小穴10基を確認した。石圓炉は、遺存する床面のはば中央に位置する。炉の規模は、縁石間の外寸で長軸長69cm、短軸長60cmを測り、長さ7~24cmの自然礫11個を楕円形に並べて縁石としている。炉の南東側で一部縁石が認められない部分がある。炉の掘形は、幅11~26cm、深さ4cmの浅い溝状をしている。炉の燃焼面と考えられる中央部を掘り残して環状に掘り込まれておらず、掘形の内側寄りに縁石を設置している。縁石で囲まれた燃焼面は、縁石の一部が被熱して割れていることから、本来焼土化して赤色に変化しているはずであるが、そのような明確な熱変化の痕跡は認められなかった。

小穴は、概ね平面円形で、検出順にP 1~10とした。主柱穴は位置関係・規模・堆積土からP 2・4・8・9と考えられる。主柱穴の配置は遺存する部分に限れば長方形で、長辺にあたる南北方向のP 8-9間・P 2-4間が約2m、短辺にあたる東西方向のP 9-2間・P 4-8間が約1.3~1.6m

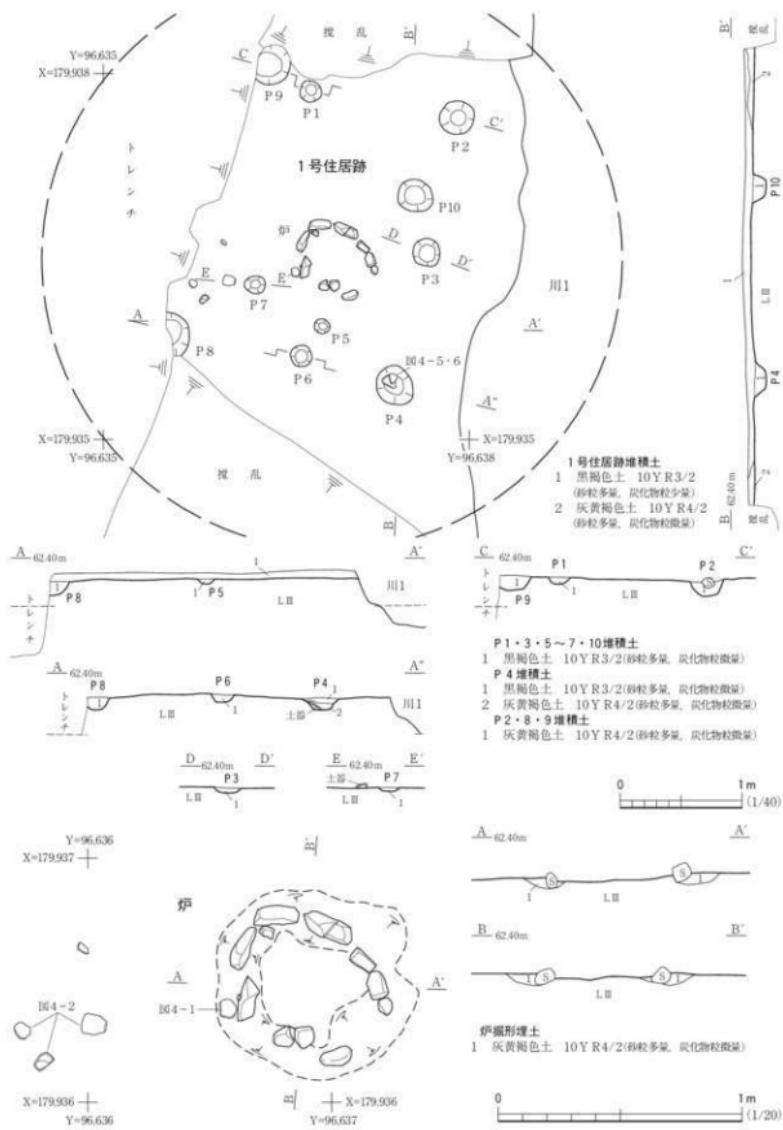


図3 1号住居跡

である。主柱穴の規模は直径26~32cmで、床面からの深さは10~12cmを測る。小穴内堆積土はP 2・8・9が灰黄褐色土であり、P 4の下層も灰黄褐色土である。主柱穴以外の小穴P 1・3・5~7・10は、いずれも黒褐色土が堆積している。主柱穴と考えられるP 4の上層も近似した堆積土であることから、主柱穴よりも後に埋没したものと考えられる。炉を中心西側に分布するP 1・5~7が、直径13~18cm、床面からの深さ3~6cmを測り、やや規模が小さく、東側のP 3が、直径21cm、床面からの深さ4cm、P 10が直径28cm、床面からの深さ10cmと主柱穴並の大きさである。

#### 遺物(図4、写真21)

本遺構からは、縄文土器片114点、石器71点が出土した。縄文土器は、後期中葉の加曾利B式に比定される。石器は剥片が多く、石材は珪質頁岩、珪化流紋岩、変質流紋岩、頁岩、砂岩等が認められ、珪化流紋岩が多い。出土遺物のうち、特徴的な土器9点と石器6点を図4に示した。

1は、精製深鉢か鉢の口縁部付近で、石圓炉の西の縁石際から出土した。内湾する器形である。口唇部は水平に面取りされており、端部外面に粘土紐を貼り付けて肥厚させ、キザミ目を施しているほか、山形の突起を付している。文様は、横位と斜位のLR単節縄文を施文した後、弧線文を対向させてモチーフを描き、部分的に縄文をナデ消している。

2は小型の鉢形土器で、石圓炉の西側で出土した。コップ形の器形で、内外面ともに丁寧なナデ調整を加え、口縁部近くでは指頭圧痕が薄く認められる。

3・4は底部資料である。両資料に内外面にナデ調整がみられる。3は2と同様に小型品の底部で、底面が上げ底状を呈する。

5・6は粗製深鉢の口縁部および胴部資料である。ともにP 4から出土したもので、同一個体と考えられる。直線的に開き、口縁部付近で垂直に立ち上がる器形で、口唇部は水平に面取りされている。文様は12本1単位の櫛状工具で、口縁部外面を横位に、胴部を波長の長い波状に引搔文を施している。

7~9は深鉢形土器の胴部資料で、7・8は精製、9は粗製土器であろう。7は2条の沈線間に刺突を施し、沈線直下に単節縄文を施している。8は幅4mmほどの浅い沈線を施し、胴部には単節羽状縄文を施している。9は外面に無節の縄文原体を縱位に回転施文している。

10~13は石鎌である。10・11は凸基有茎石鎌である。両側刃が直線的で、基部のえぐりが浅くダイヤ形に近い形状である。両面から丁寧な押圧剥離を加えられている。12・13は石鎌の未成品とみられる。器体が厚く、周囲からの押圧剥離が未熟である。

14は石錐である。素材剥片の一端に調整剥離を加えて先端部を形成している。先端には使用による磨滅が認められる。

15は敲石兼磨石である。楕円形で平たい円盤の表面と一方の側面に磨痕が認められ、資料下端および側面には敲打痕が認められる。

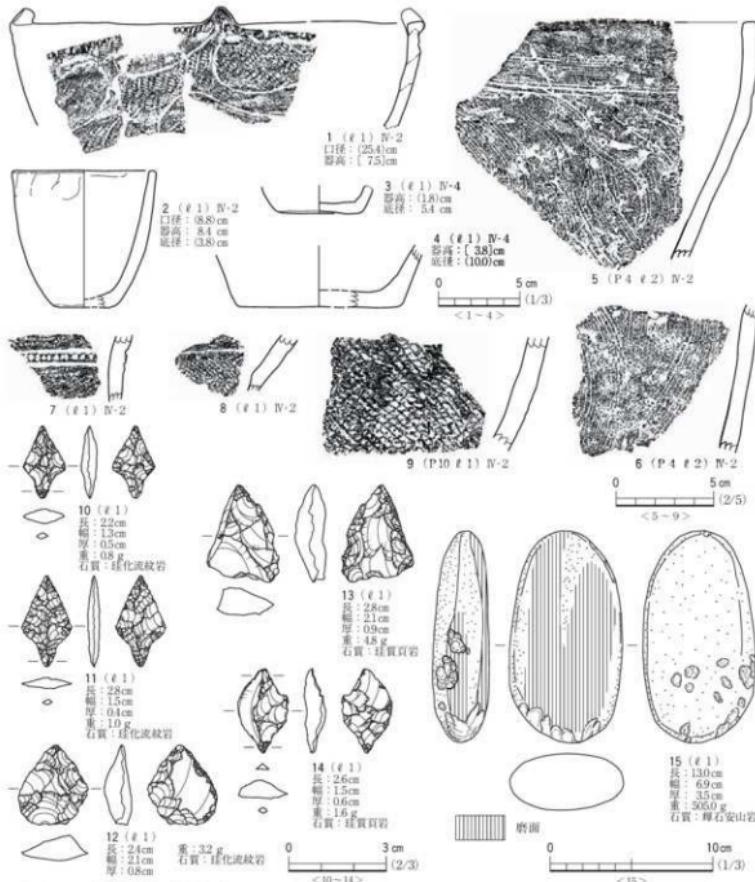


図4 1号住居跡出土遺物

## まとめ

本遺構は今回検出した住居跡では最も北側に位置するものである。周壁の全てが失われており、遺構の規模や平面形をつかむことができなかつたが、幸運なことに石窯炉を中心にして4基の主柱穴を検出することができ、住居跡の外観を推定することができた。遺構の時期は、出土遺物の特徴から、縄文時代後期中葉の所産であると判断した。

(笠井)

## 2号住居跡 S I 02

## 遺構(図5、写真7・8)

本遺構は、調査区東部のF 10・11グリッドに位置し、川1・2に挟まれた南北に細長い微高地に立地する。南側でS I 03と重複しており、新旧関係は本遺構のほうが古い。周辺には、北側に隣接してSM01やSK01~03が所在する。遺構の西側はトレンチにより、中央は水路により破壊され、遺構上面はS I 03に伴う削平をうけているため、遺構の遺存状態は悪い。

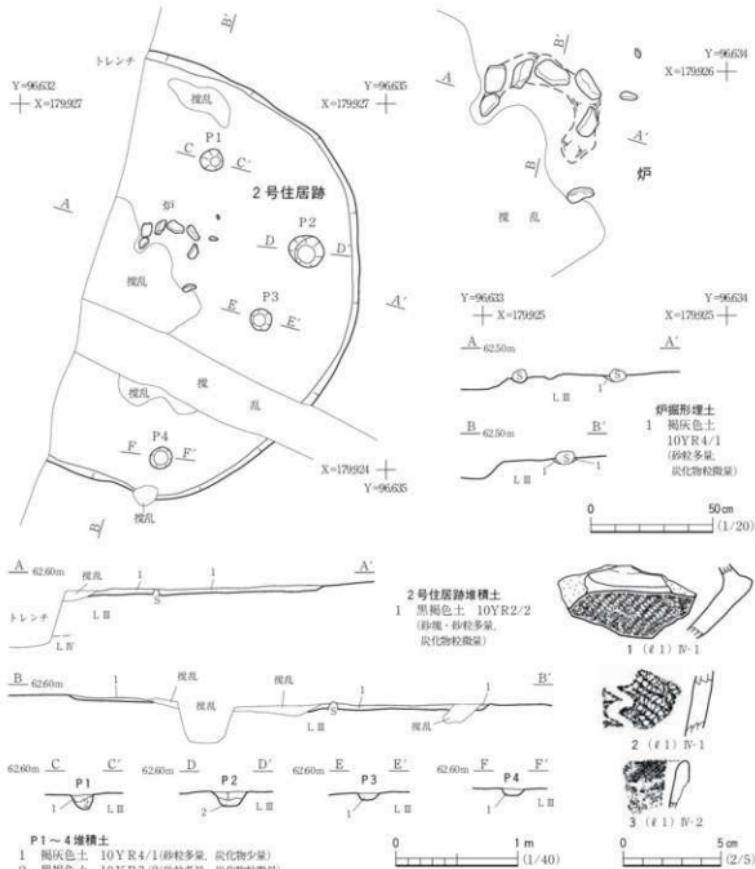


図5 2号住居跡 出土遺物

遺構検出面はLⅢ上面で、黒褐色土の半円形の輪郭を確認し、十字に土層観察用ベルトを設定し掘り下げを開始した。掘り下げの結果、検出の段階で露出していた円礫が、石窯炉の縁石であることが判明し、住居跡と判断した。

遺構内堆積土は、黒褐色土の1層のみである。層厚が5cmほどしかないため、堆積状況は断定できない。

遺構の規模および平面形は、西側3分の1が失われているが、遺存する部分から直径3.5mほどの円形と考えられる。周壁は最も遺存している部分で床面から5cmほどの高さしかなく、どのように立ち上がっていったか不明である。床面はLⅢを掘り込んで造られており、硬く締まり、概ね水平かつ平坦である。

本遺構の遺構内施設は、石窯炉と小穴4基を確認した。石窯炉は、床面の中央やや東寄りに位置する。炉は南側半分を搅乱で壊されているが、遺存部分から円形に縁石を配置していたものと考えられる。規模は、良好に遺存する東西方向の縁石間の外寸で48cmを測る。縁石は長さ11~15cmの自然礫で、6個が遺存しており、そのほかに1個が南側に確認された。炉の掘形は、ほぼ縁石と同様の寸法で、幅10cm、深さ3cmの浅い溝状をしており、炉の燃焼面と考えられる中央部を掘り残して弧状に掘り込まれている。縁石で囲まれた燃焼面とみられる部分は、縁石の一部が被熱していることから、本来焼土化して赤色に変化しているはずであるが、そのような痕跡は認められなかった。

小穴は概ね円形の平面形を呈し、遺存部分ではL字に配置され、北側からP1~4とした。小穴の規模は東端部のP2が最大で、直径26cm、床面からの深さ12cmを測る。P1・3・4はやや小ぶりで、直径18~20cm、深さ5~12cmを測る。堆積土は北側のP1・2の下層にのみ黒褐色土の堆積が見られたが、P3・4とP1・2の上層に同様の褐灰色土が認められることから、検出した小穴は、ほぼ同時期に埋没したものと考えられる。いずれも柱穴と判断した。

### 遺 物(図5、写真21)

本遺構からは、縄文土器片6点、石器2点が出土した。縄文土器は後期前葉の綱取式に比定されるが、後期中葉の所産と考えられるものも含まれる。出土遺物のうち、特徴的な土器3点を図5に示した。

1・2は後期前葉の所産と考えられるものである。1は深鉢形土器の口縁部突起直下付近の資料である。「く」の字に強く屈曲する器形で、屈曲部に隆帯を巡らせ、胴部にはLR単節縄文を横位に施文している。2は深鉢の胴部資料で、LR単節縄文を縱位に施文し、その上から断面円形の棒状工具で垂下する波状沈線を施している。

3は後期中葉の所産と考えられるもので、口縁部資料である。口縁端部付近に細かい縄文原体でLR単節縄文を施している。施文部より下位は剥離している。

### ま と め

本遺構は、石窯炉をもつ直径3.5mほどの円形と考えられるやや小型の住居跡である。縄文時代後期中葉の所産と考えられるS103と重複しており、これよりも古い。遺構の時期は、新しい時

期の出土遺物の特徴と、小さめの碟で円形に配置した石圓炉をもつことから、縄文時代後期中葉の所産としておくが、ほとんどの出土遺物が後期前葉のものであることから、より古い時期の所産である可能性もある。

(笠 井)

## 3号住居跡 S I 03

## 遺 構 (図6・7、写真9・10)

本遺構は、調査区東部のF 11、G 11グリッドに位置し、川1・2に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。北側でS I 02と重複しており、新旧関係は本遺構のほうが新しい。周辺には、南側にS I 04が隣接している。遺構の遺存状態は良好とは言いがたく、遺構の西側および北側が破壊されているほか、遺構上位は水田耕作に伴う削平をうけており、床面以外の残りは悪い。

遺構検出面はL III上面で、にぶい黄褐色土の円形の輪郭を確認した。掘り下げの結果、石圓炉の縁石を検出したため、住居跡であることを確認した。

遺構内堆積土は3層に分かれた。 $\ell$  1は遺構全域、 $\ell$  2は遺構北側、 $\ell$  3は床面の一部に堆積するにぶい黄褐色の土層である。粘土塊の有無の違いはあるが、ともに多量の砂を含むことから洪水等により遺構内に流れ込んだものと考えられる。

遺構の平面形は西側が遺存していないが、おおよそ東西方向に長軸をもつ円形に近い隅丸方形で、長軸方向はN 20°Eを示す。長軸遺存長3.6m、南北遺存長4.0mである。周壁は、北側では後世の削平により大部分が失われており、痕跡がかろうじて残るものである。南側では床面から8～10cmが遺存しており、60°ほどの角度で立ち上がる。床面はL IIIを掘り込んで形成されており、硬く縮まり、水平かつ平坦である。

本遺構の遺構内施設は、石圓炉と小穴4基を確認した。石圓炉は、床面のほぼ中央に位置する。炉の規模は、縁石間の外寸で長軸長55cm、短軸長48cmを測り、長さ7～15cmの自然碟11個を楕円形に並べて縁石としている。炉の掘形は、幅12～22cm、深さ5cmの浅い溝状で、炉の燃焼面と考えられる中央部を掘り残して環状に掘り込まれており、掘形の内側寄りに縁石を設置している。縁石で囲まれた燃焼面とみられる部分は、縁石の一部が被熱していることから、本来焼土化して赤色に変化しているはずであるが、そのような痕跡は認められなかった。

小穴は概ね平面円形で、東側から時計回りにP 1～4とした。P 1～3は壁際に位置し、P 4のみ周壁から50cmほど内側に入っている。小穴の規模は、東側のP 1・2が小型で直径14cm、床面からの深さ5～6cmを測る。西側のP 3・4は直径20cm、深さ11～12cmを測る。堆積土はP 1・4が灰黄褐色土、P 2・3が黒褐色土である。P 1～3が壁柱穴、P 4が主柱穴と推測している。

## 遺 物 (図7・8、写真22)

本遺構からは、縄文土器片30点、石器7点が出土した。縄文土器は後期中葉の加曾利B式に比定されるもので、石圓炉内や床面付近から少量が出土した。また、石圓炉の南側からは石皿と敲石がセットで出土した。出土遺物のうち、特徴的な土器8点、石器5点を図示した。

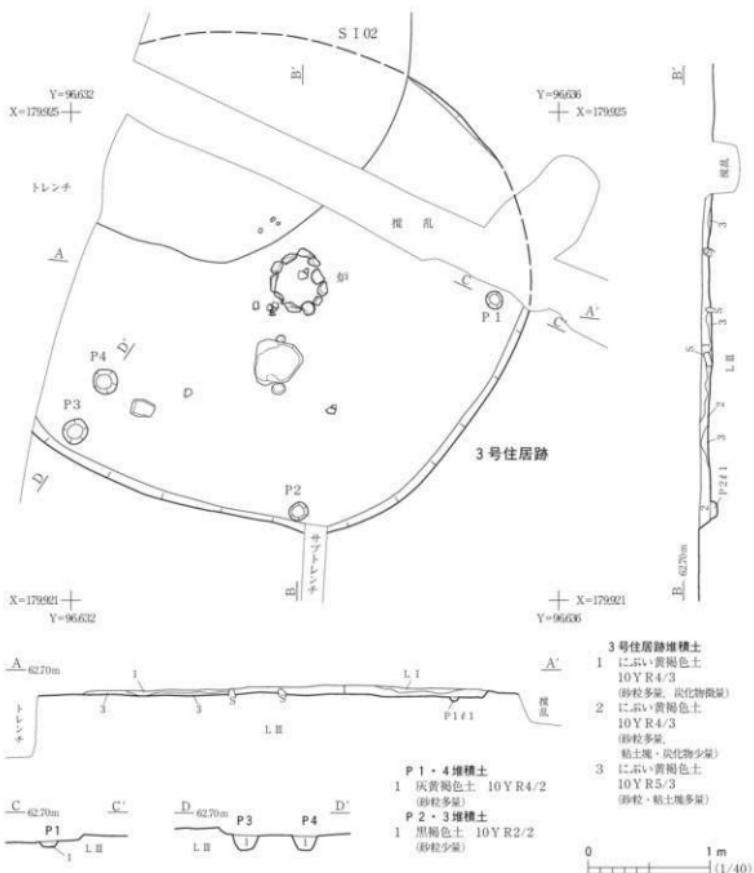


図6 3号住居跡

図7-1は、深鉢形土器の口縁部から胴部上半部資料で、炉内と炉の南東側から出土したものが接合した。弱く外傾する器形で、口唇部は水平に面取りされている。文様は口縁端部と胴部に単節繩文による繩文帯を施し、幅3.5~4mmの沈線で区画しているほか、無文帯を挟んで胴部にも沈線区画の繩文帯が巡る。4~6の資料も文様・胎土の共通点から、本資料と同一個体の可能性がある。沈線で区画した中に繩文を充填し文様帯としているもので、4には入組文もみられ、貼瘤も形成されている。

2・3は深鉢形土器の口縁部資料である。2は波状口縁をなし、内外面ともにミガキ調整してお

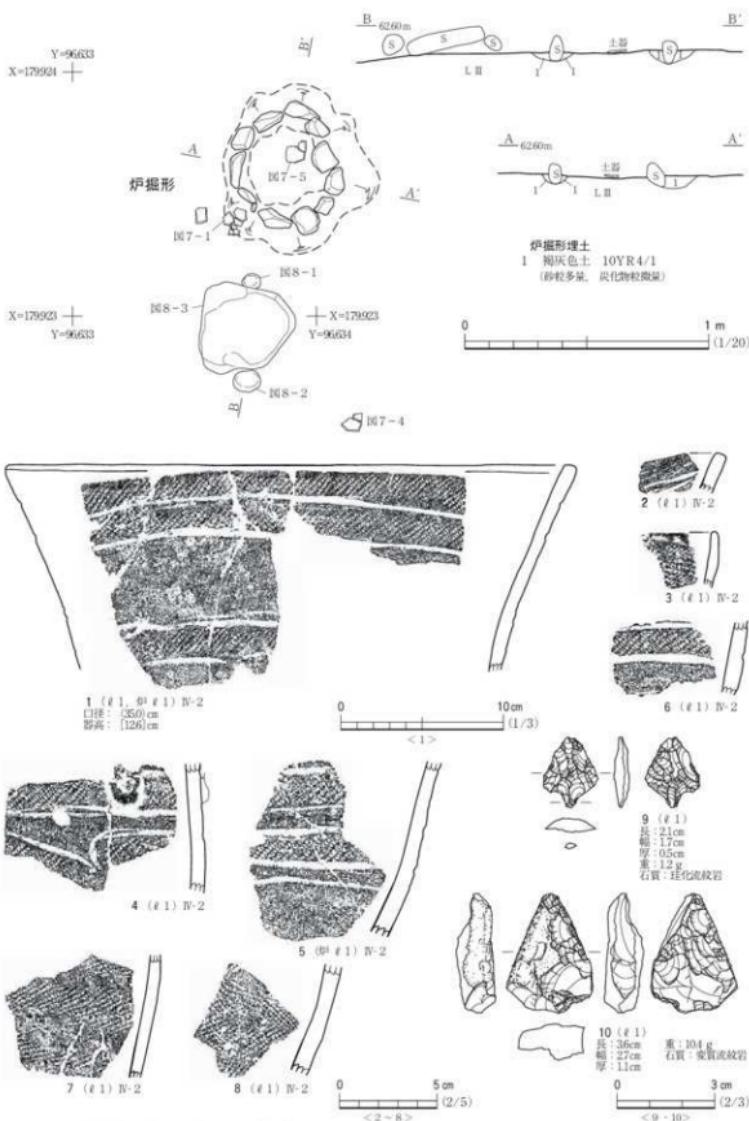


図7 3号住居跡炉、出土遺物(1)

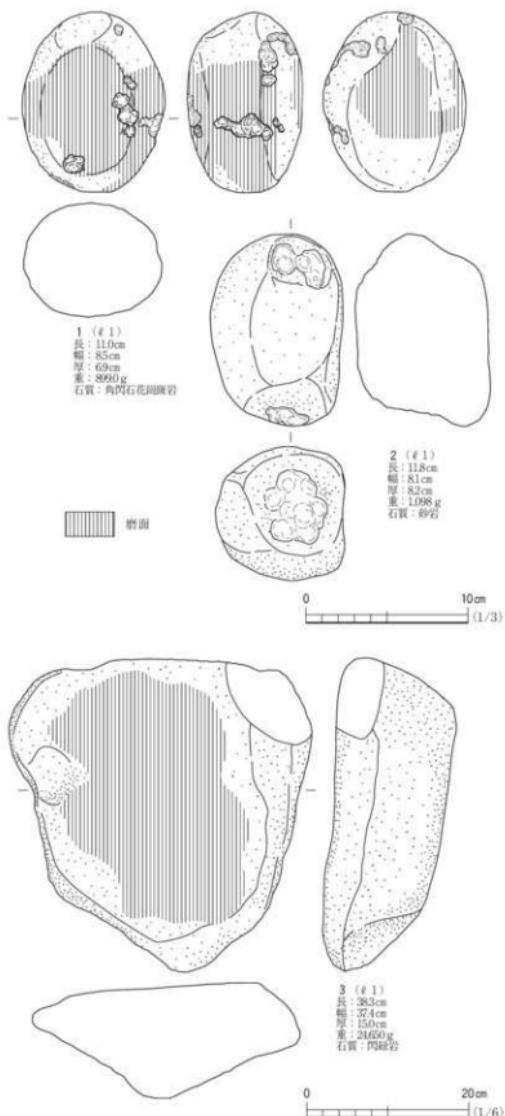


図8 3号住居跡出土遺物(2)

り、口縁端部と平行に細い沈線を描いている。3は粗製の資料と考えられ、外面に単節縄文を施している。

7・8は地文のみが施された胴部資料で、単節縄文が横位に施される。

9は石鎌である。凸基有茎石鎌と考えられるが、裏面の押圧剥離が未熟で、基部のえぐりの一方が深く、一方が浅いことから、平基有茎石鎌の未製品の可能性もある。

10は石核と判断した。側面の打面から連続して小型の剥片を剥離している。

図8-1・2は敲石である。いずれも、3とセットで出土した。1は磨石も兼ねるもので、円礫の3面に磨痕と敲打痕が認められる。2は円礫の先端部に敲打痕が認められる。3は石皿である。1・2に接して出土した。板状礫の一面を磨面としている。

### まとめ

本遺構は、石圓炉をもつて辺4mほどの円形に近い隅丸方形と推定される住居跡である。遺構の時期は、出土遺物の特徴と小さめの縄で円形に配置した石圓炉をもつことから、縄文時代後期中葉の所産である。

(笠井)

## 4号住居跡 S I 04

## 遺構(図9・10、写真11・12)

本遺構は、調査区東部のF 11・12グリッドに位置し、川1・2に挟まれた南北に細長い微高地に立地する。重複する遺構は認められないが、遺構の東側が川1により削られている。周辺には、北側に隣接してS I 03が所在する。遺構の遺存状態は、先述したように川1、水田耕作により削平をうけており、床面以外の残りは悪い。

本遺構の遺構検出面はL III上面で、黒褐色土の円形の輪郭を確認し、十字の土層観察用ベルトを設定し掘り下げを開始した。掘り下げの結果、石窯炉の縁石を検出したため、住居跡であることを確認した。

遺構内堆積土は3層に分かれた。 $\ell$  1は遺構全域に堆積する黒褐色土である。 $\ell$  2は遺構西側と床面の一部に堆積する灰黄褐色の砂質土で、南壁と西壁際で三角堆積を示す。ともに均質な土層で自然堆積土である。 $\ell$  3は遺構北側床面に堆積する灰黄褐色の粘質土で、よく縮まり平たく堆積していることから、人為堆積と考えられる。

遺構の規模は、南北3.8m、東西の遺存値2.9mを測り、平面形は円形に近い隅丸方形である。遺構の方位は、主柱穴と考えられるP 1-2間とP 3-4間の中点を結んだ線を基準にするとN 10°Eを示す。周壁は床面から10cmほどが遺存しており、約50~60°の角度で立ち上がる。床面はL IIIに形成され、硬く締まり、平坦である。

本遺構の遺構内施設は、石窯炉と小穴14基を確認した。石窯炉は、床面の中央やや東側に位置する。炉は東側半分を川1により削りとられているが、遺存部分から円形か楕円形に縁石を配置していたものと考えられる。規模は、遺存する南北方向の縁石間の外寸で55cmを測る。縁石は長さ5~14cmの自然礫で、板状のものが多く9個が遺存していた。炉の掘形は、幅9~20cm、深さ2~5cmの浅い溝状をしており、炉の燃焼面と考えられる中央部を掘り残して弧状に掘り込まれている。縁石で囲まれた燃焼面とみられる部分は、縁石の一部が被熱していることから、本来焼土化して赤色に変化しているはずであるが、そのような痕跡は認められなかった。

小穴は概ね平面円形で、検出順にP 1~14とした。主柱穴は位置関係・規模・堆積土からP 1~4と考えられる。主柱穴の配置は長方形で、長辺にあたる南北方向のP 1-4間・P 2-3間が約2m、短辺にあたる東西方向のP 1-2間・P 3-4間が約1.4mである。主柱穴の規模は、P 2~4が直径34~40cm、P 1が28cmで、床面からの深さはP 3が28cmと深く、そのほかは14~16cmである。堆積土はP 1~3の $\ell$  1が同一の黒褐色土で、P 4はやや黒味の強い黒褐色土である。P 2・3については、 $\ell$  1は柱痕跡である可能性が強く、 $\ell$  2は埋土であろう。主柱穴以外の小穴のうちP 8~14は壁際に巡ることから、壁柱穴と考えられる。これらの規模はいずれも小型で、直径16~18cm、床面からの深さ5~10cmを測る。P 5~7は周壁から50~90cm離れた位置にある小穴で、壁柱穴と考えられるものと比較すると規模が大きい。P 5は直径34cm、床面からの深さ6cm、P 6~

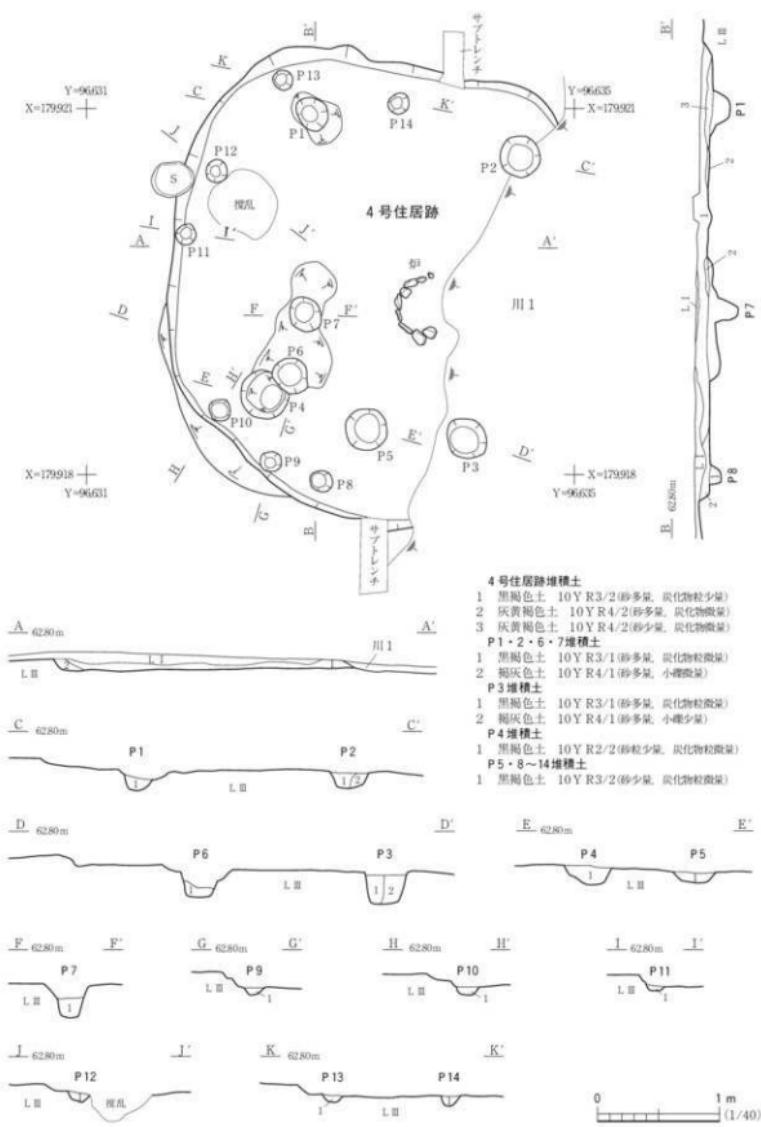


図9 4号住居跡

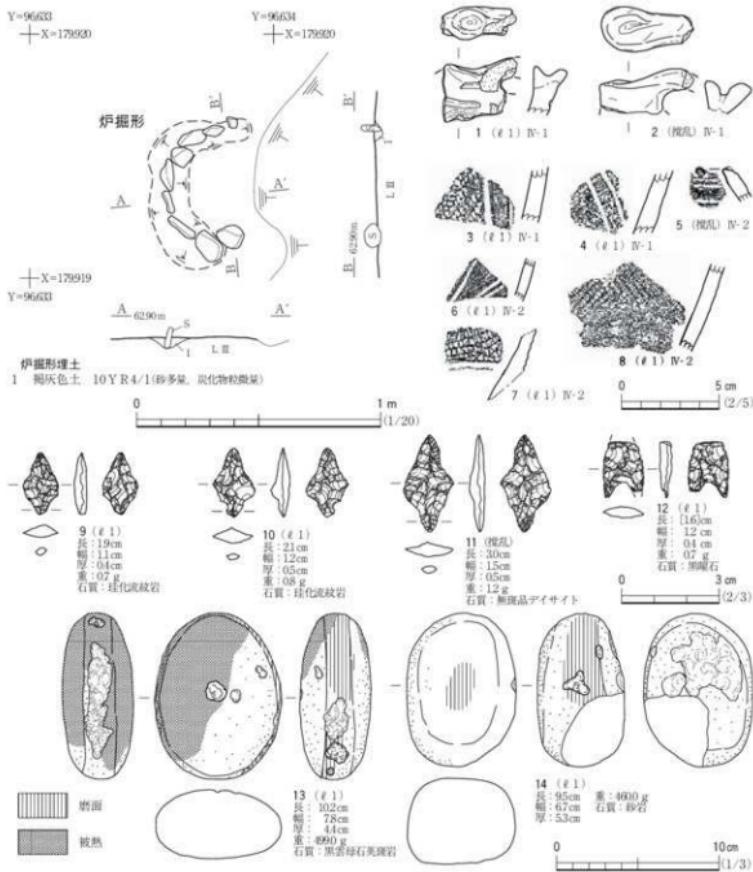


図10 4号住居跡炉、出土遺物

7は直径26cm、床面からの深さ約25cmを測り、主柱穴並の規模である。

#### 遺物 (図10、写真22)

本遺構からは、縄文土器片32点、石器24点が出土した。縄文土器は、後期前葉の綱取式と後期中葉の加曾利B式に比定されるものである。出土遺物のうち、特徴的な土器8点と石器6点を図10に示した。

1・2は、後期前葉の所産と考えられる深鉢形土器の口縁部資料である。ともに中央に円孔が貫通した突起をもち、外面から見て突起の左側に断面円錐形の盲孔を上方から施している。1には口

縁部直下の文様を区画する横位沈線と突起から垂下する沈線が認められる。

3・4は、後期前葉の所産と考えられる深鉢形土器の胴部資料である。3は横走する単節縄文を垂下する沈線で区画し、区画間を磨り消している。4は無文地に平行沈線を施す。

5は後期中葉の所産と考えられる壺か注口土器の口縁部資料である。内傾する器形で、口唇部に粒状の粘土塊を貼付している。口縁に沿って細く浅い沈線が認められる。

6は後期中葉の所産と考えられる壺か注口土器の胴部資料である。外面にはミガキが施され、5同様に細く浅い沈線が施されている。

7・8は後期中葉の所産と考えられる深鉢形土器の胴部資料である。7は沈線区画の上位に単節縄文が施されており、8は無区画に0段多条の単節縄文が羽状に施されている。

9～12は石鎚である。9～11は凸基有茎石鎚で、基部のえぐりの浅いダイヤ形の形状で、いずれも刃部の両側刃が浅くえぐれている。12は凹基無茎石鎚で、先端部を欠損している。基部のえぐりは深い。いずれの石鎚も両面から押圧剥離を加えられている。

13・14は敲石兼磨石である。13では梢円形の平たい円盤の側面に磨痕と敲打痕があり、平たい面の中央にも敲打痕が認められる。また被熱している。14は厚みのある円盤の側面と平坦な面に磨痕があり、反対側の平坦な面と側面に敲打痕が認められる。

#### まとめ

本遺構は、石圓炉をもつ一辺3.8mほどの円形に近い隅丸方形をした住居跡である。石圓炉の縁石に板状の自然縁を使用している点が、本遺跡内の他の住居跡と異なる点である。また主柱穴・壁柱穴と考えられる小穴を検出しており、本遺跡の住居跡で最も充実した内容の遺構内施設をもつ。遺構の時期は、出土遺物の特徴と、小さめの縁で円形に配置した石圓炉をもつことから、縄文時代後期中葉の所産としておく。

(笠 井)

### 第3節 土 坑

荒井遺跡では縄文時代後期前葉～中葉、晩期の所産と考えられる土坑4基を検出した。土坑は、住居跡同様、概ね調査区東部の1号河川跡および2号河川跡に挟まれた南北方向に延びる微高地上に立地し、4号土坑のみ、2号河川跡の中に立地する。以下番号順に説明する。

#### 1号土坑 SK01(図11、写真13・23・24)

本遺構は、調査区東部のF9・10グリッドに位置し、川1・2に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。重複する遺構はないが、遺構の西側半分が擾乱により壊されているため、遺構の遺存状態は悪い。本遺構の周辺には、北東4mにS I 01、南東2mにSK 02・03、南約2mにS I 02およびSM 01が所在する。

本遺構は試掘時に確認されていたもので、遺構検出面はL II上面である。また調査時には、すでに

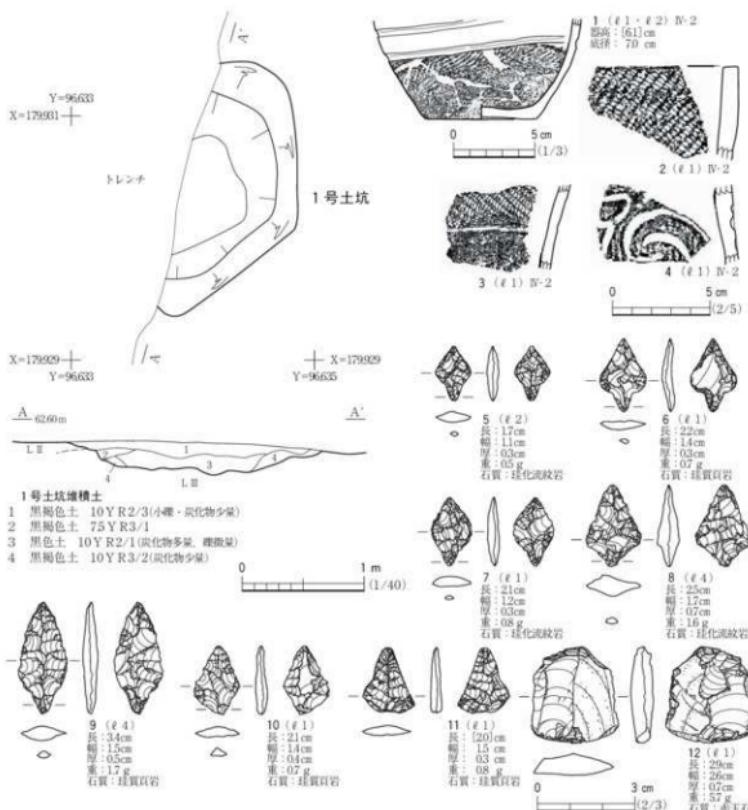


図11 1号土坑、出土遺物

半截されており、遺構内堆積土は4層に分けられた。堆積の状況から、 $\ell 1 \sim 4$ は流入土の自然堆積、 $\ell 2 \sim 3$ は堆積の不自然さと包含する炭化物の不均一性から人為的な埋土と判断した。

遺構の平面形は遺存する下端の形状から不整長方形と推定される。遺構の長軸方位は、直線的な南東壁を基準にするとN 67°Eを示す。遺構の規模は崩れ部分を含めない上端遺存値で150cm、遺構検出面からの深さ24cmを測る。周壁は上部が崩落しており、底面から20~30°の角度で緩やかに立ち上がる。底面はL IIIに形成され、凹凸があり一定していない。

本遺構からは、縄文土器片78点、石器8点が出土したほか、珪化流紋岩・珪質頁岩等の細剝片が多量に出土した。縄文土器は後期中葉の所産と考えられるものが主体である。出土遺物のうち、特徴的な土器4点と石器8点を図11に示した。

1は深鉢形土器の底部資料である。内湾気味に立ち上がる器形で、幅4mmの2条の沈線で区画された緩やかに上下する無文帯を形成し、その直下に単節縄文を施している。

2は深鉢形土器の口縁部資料で、ほぼ垂直に立ち、口唇部を水平に面取りしている。外面には単節縄文を施している。

3は深鉢形土器の胴部資料で、横位の縄文帯の下を浅い沈線で区画している。

4は後期前葉の所産と考えられる深鉢形土器で、単節縄文施文後、盲孔を基点に幅5mmの太めの沈線で渦巻き状のモチーフを描き、部分的に磨り消している。

5～11は石鏃である。いずれも基部有茎石鏃で、6が基部のえぐりが深く、そのほかは基部のえぐりが浅い。5・7は莖部が長く、8～10は刃部が長い。11は莖部を欠損している。

12は2次加工剥片と判断した。方形に薄い両極石核を加工しているよう、三辺に調整剥離が認められる。

本遺構は、住居跡群に隣接して造られた浅めの土坑である。堆積土中から多くの細かい剥片が出土することから、打製石器制作場の剥片を寄せて廃棄したものと考えられる。遺構の時期は出土遺物の特徴から、縄文時代後期中葉の所産と判断した。  
(笠井)

## 2号土坑 SK 02 (図12、写真13・23)

本遺構は、調査区東部のG 10グリッドに位置し、川1・2に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。重複する遺構はなく、遺構の遺存状況は比較的良好である。周辺には、北東0.5mにSK 03、南西1.2mにSM 01、北西1.5mにSK 01が所在する。

遺構検出面はL III上面で、黒褐色土の円形の輪郭を確認した。遺構内堆積土は2層に分けられた。堆積の状況から、ℓ 1は壁の崩落土、ℓ 2は流入土の自然堆積と判断した。

遺構の平面形は円形である。遺構の規模は直径約73cm、検出面からの深さ50cmを測る。周壁は、底面からほぼ垂直、南壁の一部で内傾しつつ立ち上がり、底面から35cm付近で傾斜が変換して40°ほどの緩やかな角度で外傾する。周壁の傾斜変換は上部の崩落によるものと考えられる。底面はL IIIを掘り込んで形成されており、半球状にくぼむ。

本遺構からは、縄文土器片4点が出土した。縄文土器は後期中葉と晩期の所産と考えられるものである。出土遺物のうち、特徴的な土器3点を図12に示した。

1・2は後期中葉の所産と考えられる粗製深鉢の胴部資料である。引搔文で弧状のモチーフをランダムに施している。

3は晩期の所産と考えられる粗製深鉢の胴部資料で、撲糸文が施されている。

本遺構は、微高地上に造られた平面円形でやや深めの土坑である。ほぼ垂直に掘り込まれており、常に底から水が湧く状態であった。遺構の時期は、新しい時期の出土遺物の特徴から晩期の所産としておく。  
(笠井)

## 3号土坑 SK 03 (図12, 写真14・23)

本遺構は、調査区東部のG 10グリッドに位置し、川1・2に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。重複する遺構はないが、遺構上部が削平されており、底面を除いて遺構の遺存状況は比較的悪い。周辺には、南西0.5mにSK 02、同2.5mにSM 01、北西2mにSK 01が所在する。

遺構の検出面はL III上面で、にぶい黄褐色土の楕円形の輪郭を確認した。遺構内堆積土は黄褐色土の1層のみであった。層厚が薄く、また単層であることから断定できないが、均質な土で川砂を多く含むことから、流入土の自然堆積と判断した。

遺構の平面形は隅丸長方形をしており、長軸長71cm、短軸長60cm、検出面からの深さ8cmを測る。遺構の方位は短辺の中点を結んだ線を基準とするとN 17°Wを示す。周壁は最も遺存している部分で床面から6cmほどの高さしかなく、どのように立ち上がっていたか不明である。底面はL IIIを掘り込んで形成されており、概ね平坦である。

本遺構からは、縄文土器片1点が出土したのみである。図12-4は後期中葉の所産と考えられる胴部資料で、非結束の單節縄文を羽状に施している。

本遺構は、住居跡群に隣接して造られた隅丸長方形の浅めの土坑である。遺構の時期は、出土遺物の特徴から縄文時代後期中葉の所産としておく。

(笠 井)

## 4号土坑 SK 04 (図12, 写真14・23)

本遺構は、調査区東部のE 10・11グリッドに位置する。川2の河床に立地し、遺構の上を川2の堆積土ℓ 1'が覆っていた。重複する遺構ではなく、遺構の遺存状態は良好である。周辺には、東5~6mにSI 02・03、南東1.6mにSD 01が所在する。

遺構の検出面はL III上面で、川2の土層観察断面で存在を確認した。土層観察用断面が、ちょうど遺構の中央にかかっていたため、南側をさらに掘り下げて遺構を半截した。遺構内堆積土は2層に分かれた。ℓ 1・2ともに西側から堆積土が流入している状況が観察できるため、自然堆積と判断した。

遺構の平面形は楕円形である。遺構の長軸長は下端で97cm、短軸長80cm、検出面からの深さ32cmを測る。遺構の方位は長軸線を基準とするとN 3°Eを示す。周壁は全体的に垂直か内傾しつつ立ち上がる。底面はL IIIに形成されており、概ね平坦である。

本遺構からは、縄文土器片13点が出土した。縄文土器は大半が後期前葉の堀ノ内1式に比定される。これらのうち、特徴的な5点を図12に示した。

5~9は深鉢の胴部資料で、地文地に集合沈線で文様が描かれている。5・7は縦に並んだ盲孔をもつもので、5では盲孔の回りに斜位の集合沈線と重弧状沈線が、7では盲孔を基点に重弧状の集合沈線が施される。6・8は集合沈線のみが施されたもので、6は斜位、8は斜位と縱位に施されている。9は縦位に平行沈線が認められる。

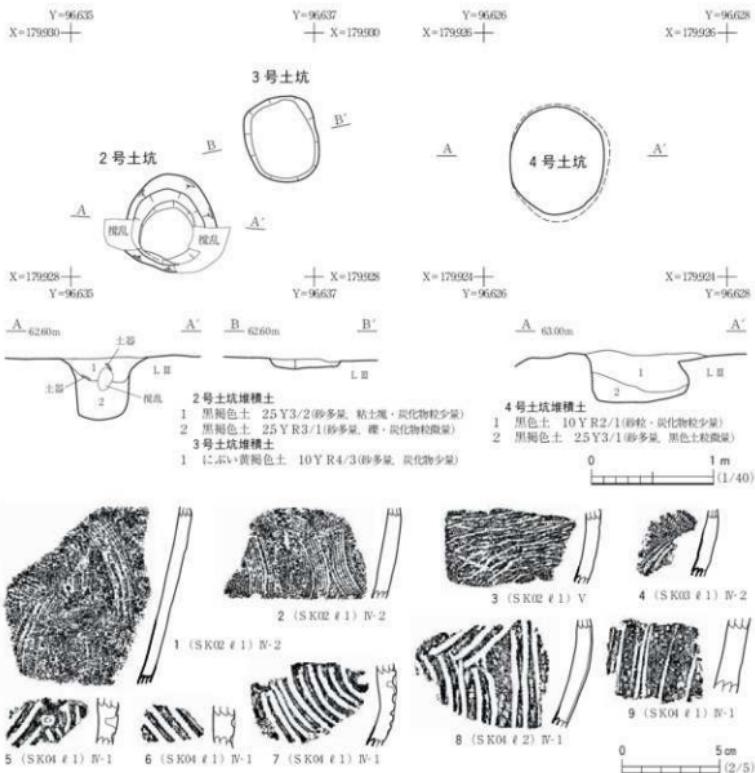


図12 2~4号土坑、出土遺物

本遺構は、周壁がオーバーハングするフラスコ状土坑のような形態をした土坑で、荒井遺跡で唯一微高地に立地せず川2の河床に造られた遺構である。遺構の調査中から常に水が湧く状況であったが、遺構の使用時の状況は地下水位の状況も含めて不明である。遺構の時期は、縄文時代後期中葉の遺物を包含する川2 #1に覆われていることから少なくとも後期中葉以前の所産であり、出土遺物の特徴から縄文時代後期前葉の所産と考えられる。

(笠井)

## 第4節 土器埋設遺構・溝跡・性格不明遺構

荒井遺跡では、土器埋設遺構、溝跡、性格不明遺構が各1基ずつ検出された。土器埋設遺構および溝跡は住居跡、土坑と同じ1・2号河川跡に挟まれた南北に細長い微高地上に立地しており、先の遺構と有機的な関係をもっていたと推定される。性格不明遺構のみは、3号河川跡西側の微高地上に位置している。以下、土器埋設遺構、溝跡、性格不明遺構の順に説明する。

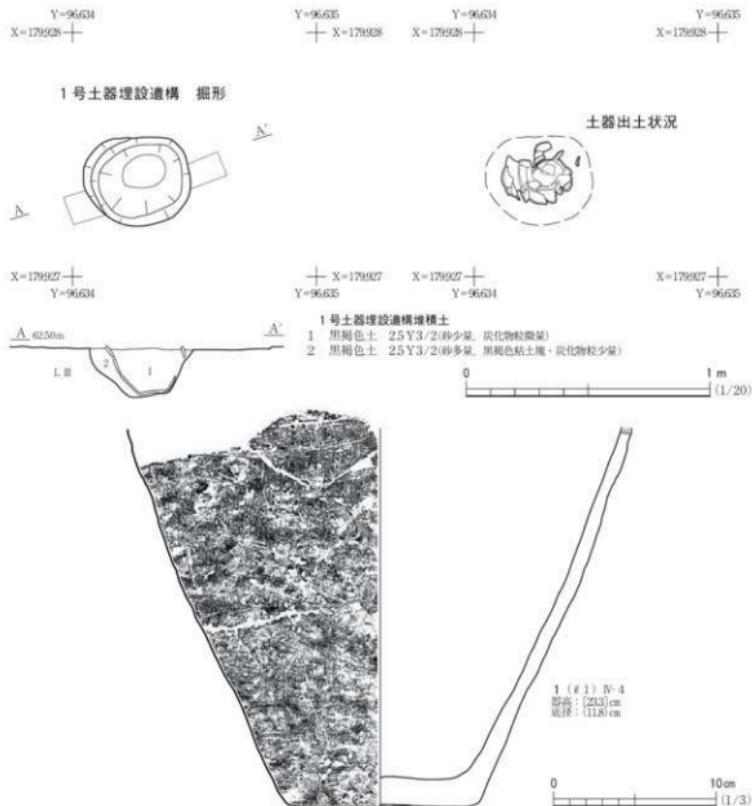


図13 1号土器埋設遺構、出土遺物

### 1号土器埋設遺構 SM01 (図13, 写真15・25)

本遺構は、調査区東部のF 10グリッドに位置し、川1・2に挟まれた南北に細長い微高地に立地する。重複する遺構はないが、南側にS I 02が隣接し、北1.8mにS K 01、北東1.2mにS K 02が所在する。

遺構の検出面はL III上面で、土器の輪郭とそれより一回り大きい黒褐色土の輪郭を確認した。土層断面の観察から土器内の堆積土ℓ 1と掘形埋土ℓ 2が異なることが判明した。埋設されていた土器は、縄文時代後期中葉の深鉢で、胴下部～底部部分が遺存していた。埋設土器は掘形の東寄りにほぼ正位に埋設されていた。

掘形は平面形が梢円形で、長軸長43cm、短軸長37cm、検出面からの深さ20cmを測る。遺構の方位は短辺の中点を結んだ線を基準とするとN 73°Eを示す。周壁は底面から50～70°の角度で円錐状に立ち上がっている。底面はL IIIを掘り込んで形成されており、概ね平坦である。

本遺構からは、埋設土器である縄文土器1点が出土したのみである。図13-1は後期中葉～後葉の粗製深鉢と考えられる。底部から直線的に外傾する器形で、横位の引搔文が認められる。

本遺構は、住居跡群に隣接して造られた土器埋設遺構で、遺構の時期は、出土遺物の特徴から縄文時代後期中葉～後葉の所産としておく。  
(笠井)

### 1号溝跡 SD01 (図14, 写真16・23)

本遺構は、調査区東部のE 11・12グリッドに位置し、川1・2に挟まれた南北に細長い微高地の川2側の縁に立地する。重複する遺構はなく、北西1.6mにS K 04、東約4mにS I 03・04が所在する。溝の南東側の肩に石皿と考えられる平石が置かれており、少なくともこの面までは削平を受けていないと考えられるため、浅い遺構であるが、遺存状態は比較的良好である。

遺構の検出面は川2 ℓ 1上面およびL II上面で、黒褐色土の細長い輪郭を確認した。南北2カ所に土層観察用ベルトを設定して掘り下げ、堆積土を調べた。堆積土は2層に分かれた。堆積状況から、ℓ 1は流入土の自然堆積、ℓ 2はL IIに近いことから壁の崩落土と判断した。

遺構はほぼ南北方向に延びており、長さ3.56m、幅87cm、検出面からの深さ16cmを測る。遺構の方位は両端の中央を結んだ線を基準とするとN 5°Eを示す。両肩は底面から30～35°の角度で緩やかに立ち上がっている。底面はL IIIに形成されており、北側は断面が台形で、南側は断面がU字形である。全体的に北側へ緩やかに下っている。

本遺構からは、縄文土器片1点と石器1点が出土した。縄文土器は後期中葉の加曾利B式土器に比定される。図14-1は深鉢形土器の胴部資料と考えられる。横位の単節縄文帯を細く浅い沈線で区画している。2は石皿である。板状礫の一面を磨面としている。

本遺構は、川2東岸の縁に掘り込まれた浅い溝状の遺構である。遺構の時期は、出土遺物の特徴から縄文時代後期中葉の所産としておく。  
(笠井)

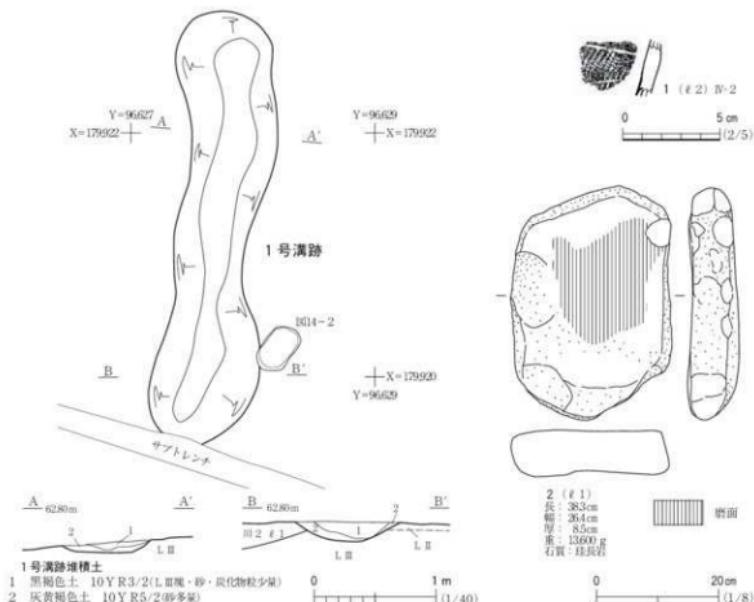


図14 1号溝跡、出土遺物

## 1号性格不明遺構 S X 01 (図15、写真17・23・24)

本遺構は、調査区東部のA 8, B 8グリッドに位置し、川3西岸の微高地上に立地する。遺構の西側は調査区外となるが、25mほどの距離に赤柴遺跡の川4が所在する。重複する遺構はないが、遺構東側および南側に後世の水路等による搅乱を受けているほか、遺構上面が水田耕作に伴い削平されているため、遺構の遺存状態は悪い。

遺構の検出面はL III上面で、黒褐色土の半円形の輪郭を確認した。遺構の遺存状況に合わせT字に土層観察用ベルトを設定し、掘り下げを行った。堆積土は2層に分かれた。堆積状況から、ℓ 1・2ともに流入土の自然堆積と判断した。

本遺構は中央部分が弱くくぼみ、その上に堆積土が遺存していたもので、明瞭な掘り込みや周壁の立ち上がりが認められない。このため平面形および規模は不明である。遺構の規模は遺存値で、南北1.8m、東西2m、検出面からの深さ10cmを測る。底面はL IIIに形成されており、底面の東寄りには、平面形が隅丸長方形と推測される窪地がある。窪地の規模は長軸長120cm、短軸遺存長63cm、検出面からの深さ15cmを測る。

本遺構からは、縄文土器片14点と石器1点が出土した。縄文土器は、いずれも後期中葉の加曾

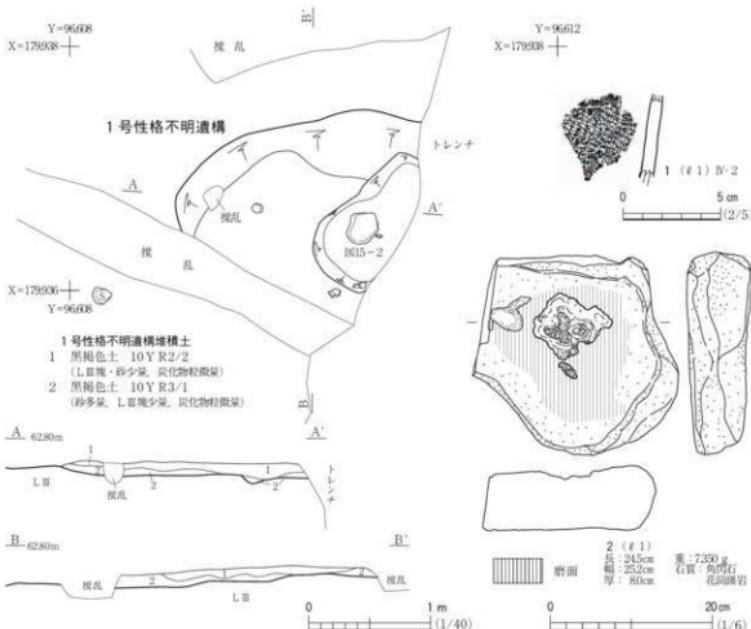


図15 1号性格不明遺構、出土遺物

利B式に比定される。細片が多く、図示し得た1点を掲載した。図15-1は深鉢形土器の胴部資料と考えられる。単節繩文帯を細く浅い沈線で区画している。2は石皿である。板状礫の一面を磨面としている。磨面中央には敲打痕が認められる。

本遺構は、他の遺構から離れて川3のさらに西側に位置する遺構である。明瞭な掘り込みは観察できなかったが、周囲とは異なる堆積土が堆積することから遺構と判断した。遺構の時期は、出土遺物の特徴から縄文時代後期中葉の所産としておく。

(笠 井)

## 第5節 河 川 跡

本遺跡では、調査区内の3カ所で河川跡を検出した。いずれの河川跡からも縄文時代の遺物が出土しており、本遺跡で確認した当該期の遺構群と関わりが深いと考えられる。人為的な遺構ではないが、本遺跡を理解する上で欠くことができない痕跡であることから、1節を設けて報告する。河川跡は検出順に1~3号河川跡とし、略号をそれぞれ川1・川2・川3とした。

## 1号河川跡 川1

### 痕 跡 (図16, 写真20)

本河川跡は調査区境のE 13, F 12・13, G 6~9・11~13, H 6~7グリッドに位置し、調査区の東境を蛇行しながら概ね南から北へ延びている。河川跡の東側が調査区外となっているため、調査区内では西側の一部を確認したにすぎない。北側でS 1 01と、南側ではS 1 04と重複し、いずれの遺構も壊している。

検出面はL IIおよびL III上面で、砂を多量に含む黒褐色土の輪郭を確認した。河川跡内の堆積土は3層に分層でき、堆積状況からいずれも自然の水性堆積土と判断した。堆積土上層は有機質を多く含む土層で、北部では暗褐色のℓ 1、南部では黒褐色のℓ 1'が堆積していた。両土層の上下関係は調査区内では重なる部分が認められないため不明である。下層のℓ 2は砂礫と黒褐色土の互層で、河川跡の全域に堆積していた。

調査区内における本河川跡の規模は北側で長さ18.6m、南側で14.5mを確認した。河川幅は東側が調査区外であることから不明であるが、遺存値では北側で2.3m、南側で4.0mを測る。断面形は確認できる部分では北側が逆台形、南側がU字形である。底面は起伏があり、南側では中央に高まりが認められる部分がある。底面の標高は南側で62.3m、北側で61.6mあり、南側が70cmほど高いため、川の水は北流していたと考えられる。

### 遺 物 (図16, 写真26)

本河川跡からは、縄文土器片86点、石器54点が出土した。縄文土器は、後期前葉～中葉にかけての所産が出土しており、いずれも小破片で互いに接合するものが認められない。これらのうち4点を掲載した。

図16-1～3は縄文時代後期前葉の深鉢形土器の口縁部資料である。1は口縁部が屈曲して内傾する器形で、口縁端部と屈曲部外面に粘土紐を貼付けて隆帯状に肥厚させている。波状口縁の波頂部には半捻りした漏斗状の突起がついており、この突起と屈曲部外面が橋状把手で結ばれている。橋状把手の接合部には盲孔が施され、両脇には弧状の貼付文を添付している。貼付文と屈曲部の隆帶に沿って沈線が施されている。2は外反する器形で、口縁端部が垂直につまみ上げられている。これも波状口縁の波頂部と考えられ、横方向からの盲孔を施された小突起が付加されている。3は漏斗状の突起をもつ波状口縁の波頂部付近の資料で、突起外面から口縁端部に沿って「ハ」の字形に深く、太い沈線が巡る。4は後期後葉の所産と考えられる粗製深鉢の胴部資料で、外面に引搔文が横位に施されている。

### ま と め

本遺構は、調査区の最も東側を流れる河川跡で、調査区境に位置することから、全貌をつかむことができなかった。河川跡の時期は、縄文時代後期中葉の住居跡を壊していることから、少なくともこの時期以降の所産と考えられる。本遺跡では最も新しい河川跡である。

(笠 井)

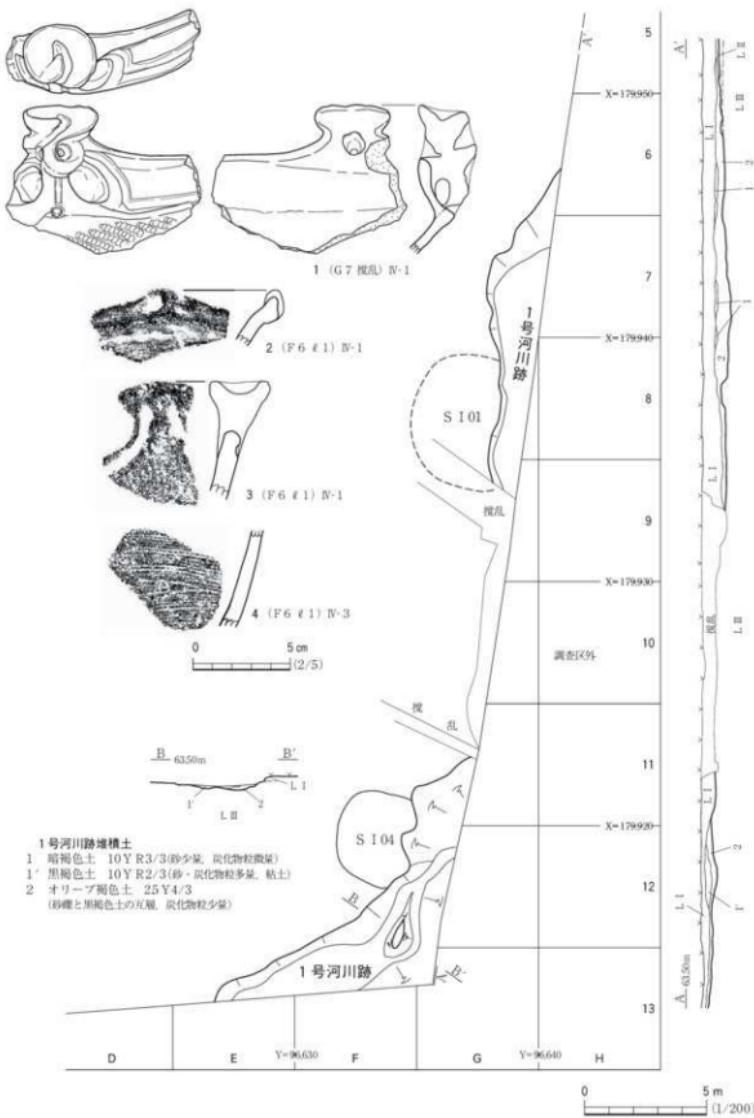


図16 1号河川跡、出土遺物

## 2号河川跡 川2

### 痕 跡 (図17、写真18~20)

本河川跡は、調査区東部のC 10・11、D 10~12、E 4~12、F 4~10、G 9グリッドに位置する。調査区南部のD 12、E 12グリッド付近とC 10・11グリッドの境界付近の2カ所から始まり、北東方向へ延びて、E 10グリッドの辺りで北へ方向を変え、そこからはほぼ一直線に北方へ向かって調査区外へ延びている。S K 01・04、S D 01と重複し、これらよりも古い。また、西側から北東方向へ延びてくる3号河川跡とE 7グリッドで合流しており、堆積土の観察では本河川跡が新しい。河川跡の検出面はL III上面で、遺物を多量に含む黒褐色土の長大な帶状範囲を確認し、適宜土層観察用ベルトを設定して掘り下げと記録を行った。

堆積土は3層に分層でき、堆積状況からいずれも自然の水成堆積土と判断した。 $\ell$  1'は河川跡の南側にのみ堆積する黒褐色土層で、主に縄文時代後期中葉以降の遺物を包含している。 $\ell$  1は河川跡全域に堆積する黒褐色土層で $\ell$  1'よりも黒味が強く、砂粒をあまり含んでいない。縄文時代後期前葉～中葉の遺物を含むが、後期前葉の遺物が圧倒的に多い。 $\ell$  2は最下層の暗褐色土で、砂粒を多量に含む。河川跡のほぼ全域で検出されたが、層厚は薄く、遺物の出土量も少ない。縄文時代後期前葉の遺物が出土する。

調査区内における本河川跡の規模は長さ43m、幅3.5~7.8m、深さは最深部で40cmを測る。断面形は幅の広いU字形である。底面は平坦で起伏は少ないが、南端のみ二股に分かれこの部分のみ深くなっている。現在でもこの部分から水が湧いてくることから、湧水点であった可能性が高い。底面の標高は概ね南側が高く、北側が低いことから、川の水は北流していたものと考えられる。

### 遺 物 (図18~38)

本遺構からは、縄文土器片10,857点、土製品6点、石器263点が出土した。土器は、縄文時代後期前葉～中葉にかけてのもので、特に後期前葉の土器はE 9、F 9グリッド以北でおびただしい量が出土した。これらのうち、縄文土器168点、土製品6点、石器20点を掲載した。

### IV群1類土器 (図21~34、写真27~33)

図21、図22-1~8・11・12は、綱取I式に比定できる深鉢形土器で、口縁部無文帯の下端を隆帶のみで区画するものである。図21-1~3は器形復元したもので、1・2は胴上部から口縁部にかけて内湾気味に直立する器形であり、3は胴部最大径を上位にもち、口縁部無文帯で弱くくびれて口縁端部が外反する器形である。1は平縁で、区画隆帶上には盲孔をもつ円形貼付文と刺突列が加えられている。口縁部無文帯を縱位に分割する貼付文は直線的で、無文帯の区画隆帶から枝分かれしたように斜めに延びており、貼付文上端には上方からの盲孔と沈線が付加されている。なお、本資料は地文を含む胴部文様が施されていない。2・3は波状口縁で、波頂部直下には、盲孔と沈線を付加されたC字状貼付文が認められる。胴部文様は、2では波頂部に対応する位置に2本の縦位沈線を垂下させた同心円文が施され、この間に、蕨手状文が施されている。なお、同心円文

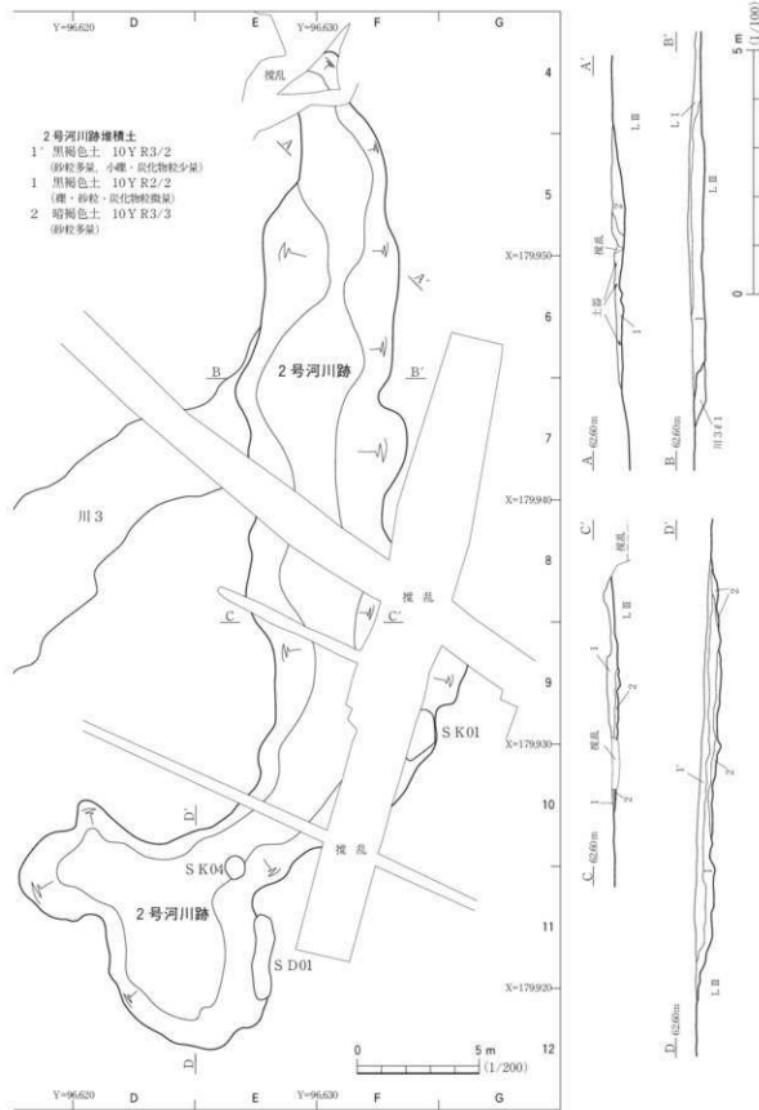


図17 2号河川跡

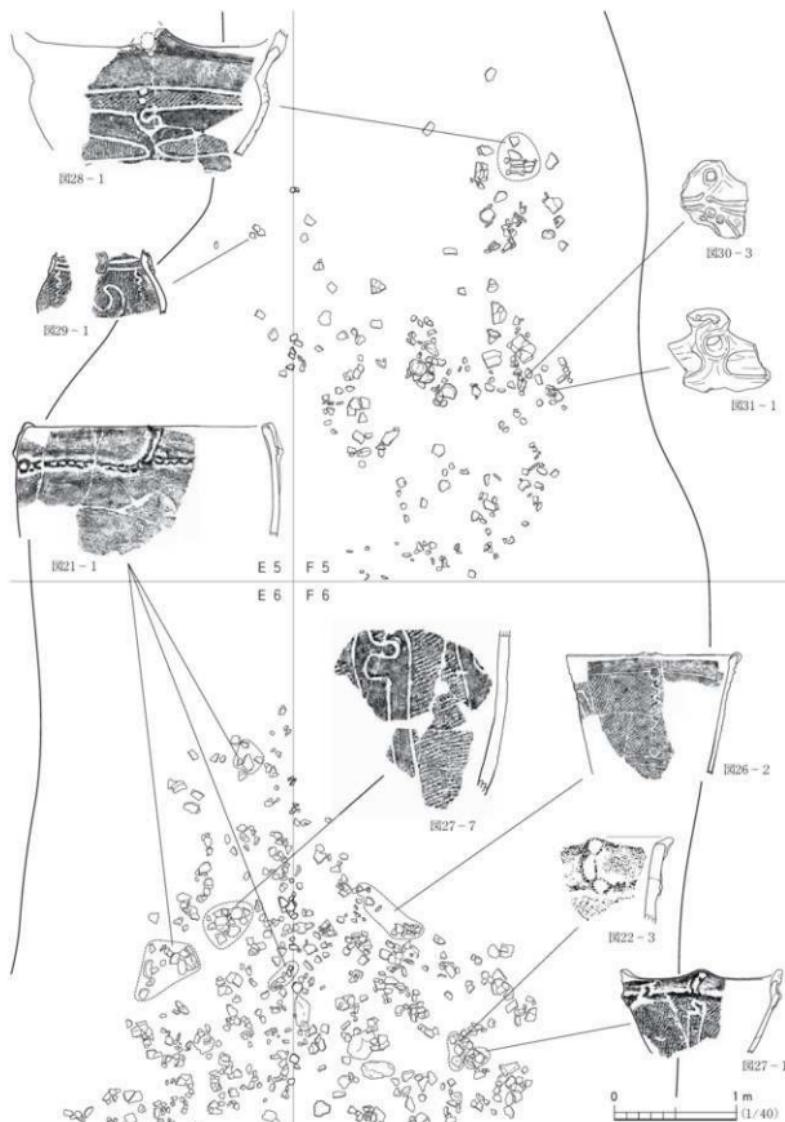


図18 2号河川跡遺物出土状況(1)

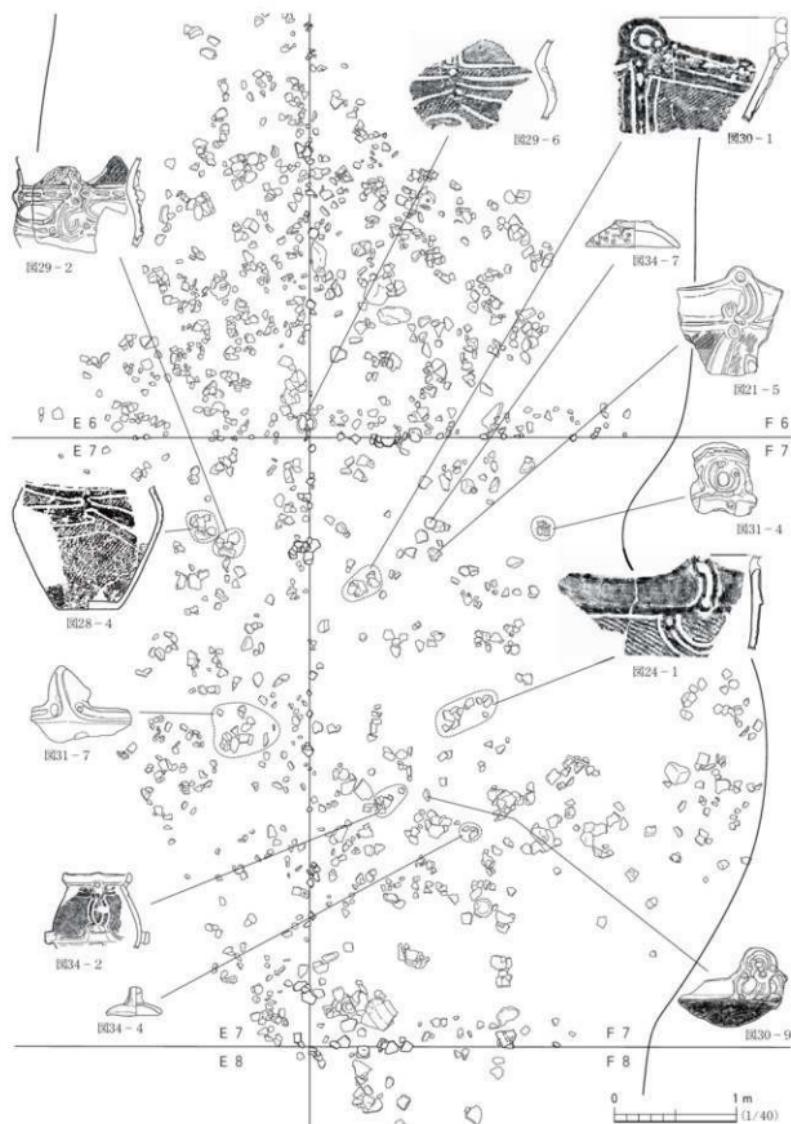


図19 2号河川跡遺物出土状況(2)

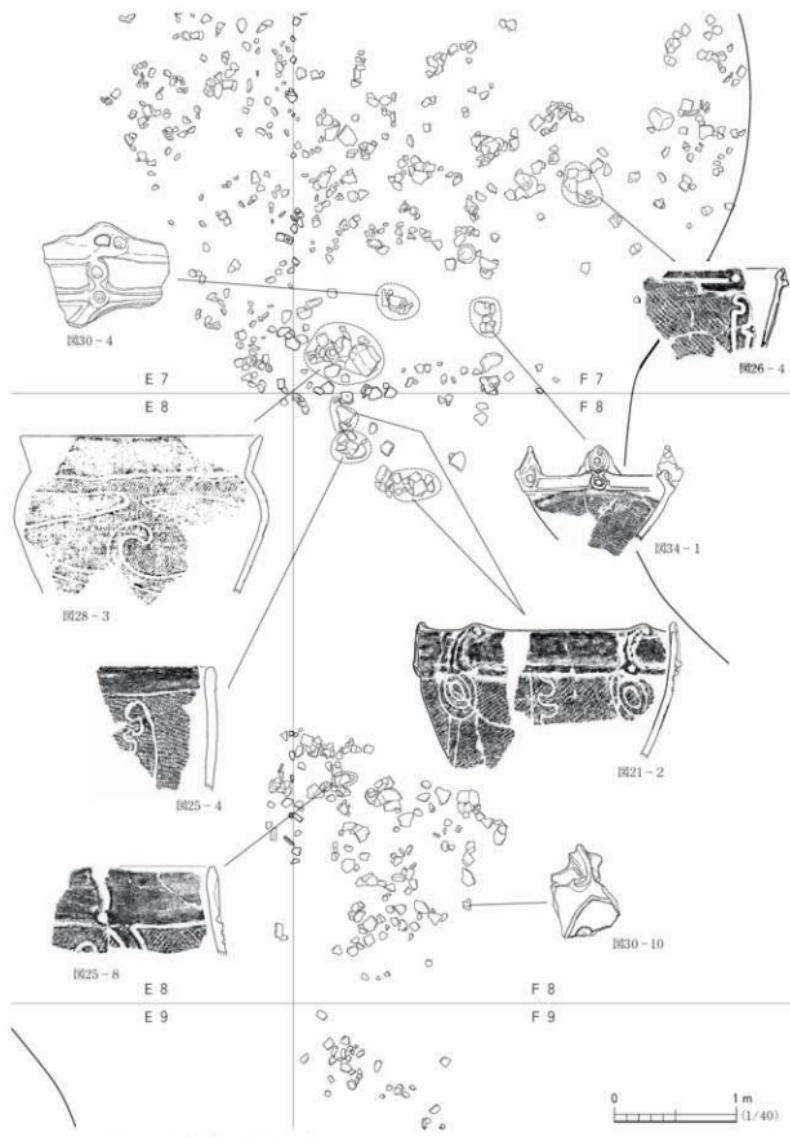


図20 2号河川跡遺物出土状況(3)

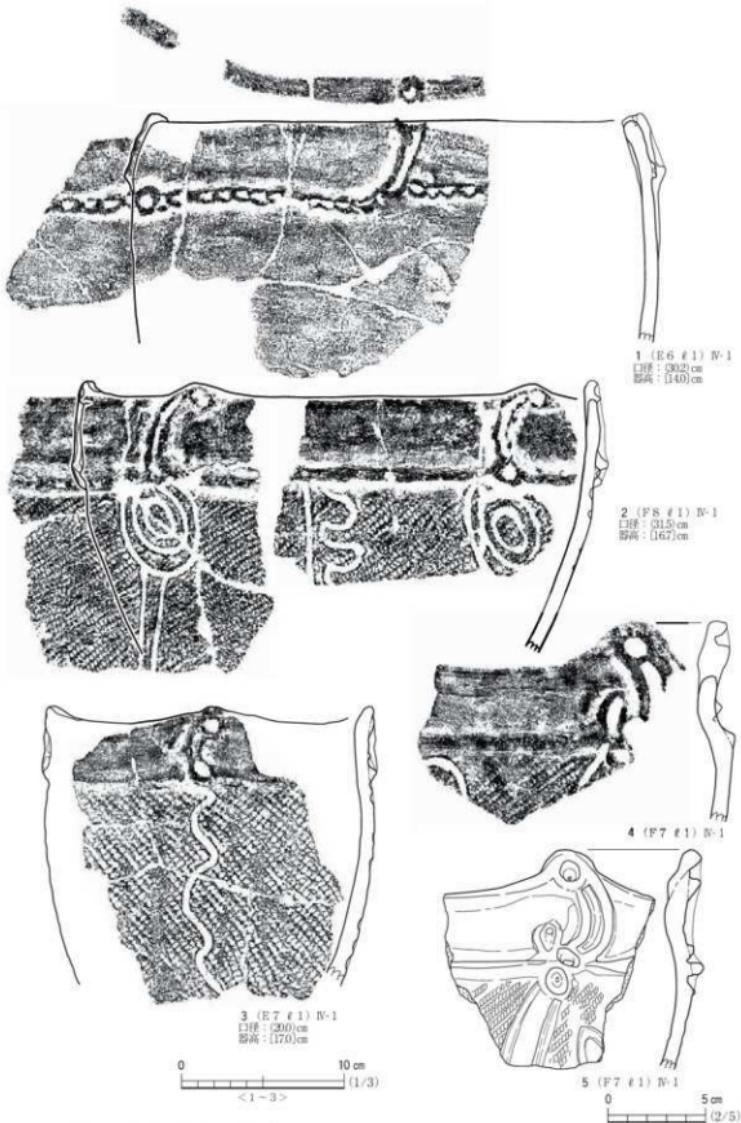


図21 2号河川跡出土縄文土器(1)

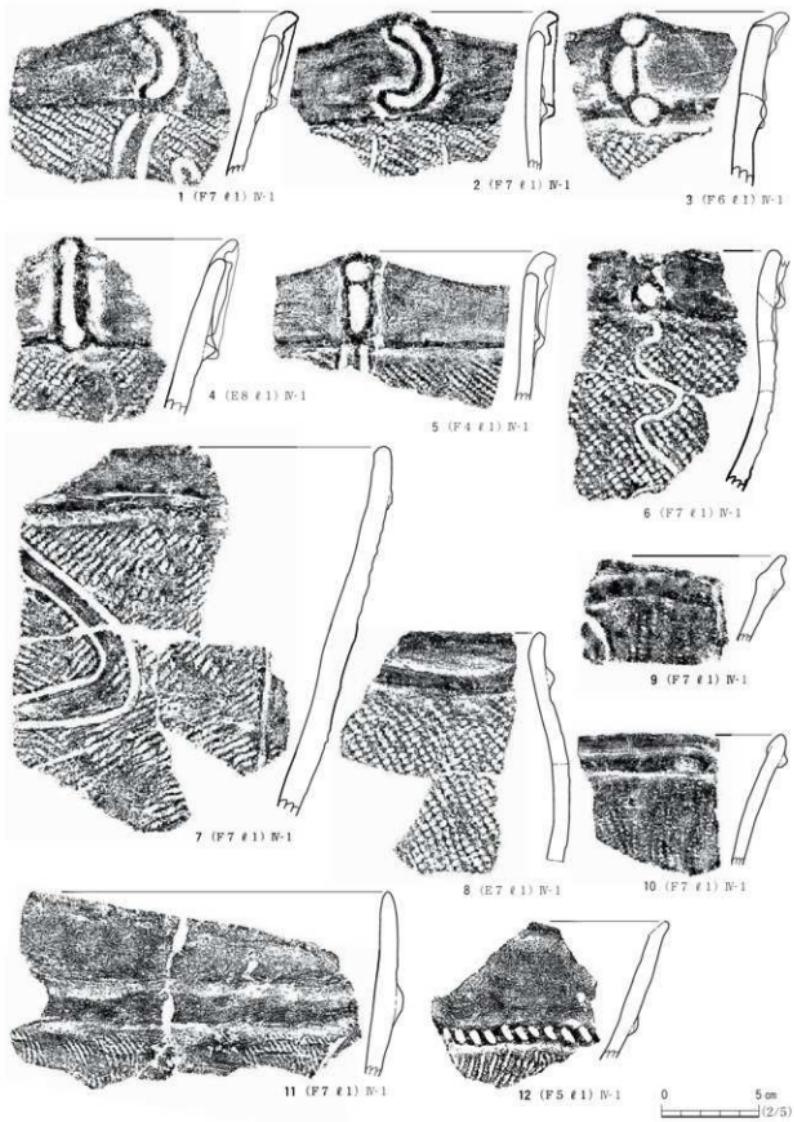


図22 2号河川跡出土縄文土器(2)

と蕨手状文の地文は磨り消されていない。3では、波頂部に対応する位置には波長の長い蛇行状沈線が施され、図22-6も同様の構成である。

図21-4・5、図22-1~6は口縁部資料で、波状口縁の波頂部外面に貼付文が認められる資料である。C字状貼付文下端の盲孔から、さらに弧状の貼付文が付加され、釣針状になっているもの(図21-4・5)、C字状貼付文で、両端に盲孔があり、盲孔間を沈線が結ぶもの(図22-1~3)、貼付文が直線的なもの(図22-4~6)が認められる。図22-3は盲孔が大きめで、弧の湾曲が弱い。また同図5では下端の盲孔が省略されている。

図22-7・8・11・12は口縁部無文帯に貼付文が認められない部分の資料で、7・8は無文帯の幅が狭く、12は区画隆帶上にキザミ目が施される。

胴部文様は、図22-1ではJ字状文、同図5では垂下する平行沈線、同図7では弧状の平行沈線が認められ、沈線内は地文が磨り消されている。同図9・10は、無文帯下端の区画隆帶ではなく、口縁部外面直下の隆帶で、図26掲載資料のような、直線的に開く器形の深鉢形土器に伴うものであろう。

図23・24は、綱取I式に比定される深鉢形土器で、口縁部無文帯下端を隆帶と、隆帶に沿うように施された沈線で区画するものである。隆帶を縁取る沈線は、隆帶の下端のみに引かれるもの(図23-1~3・7、図24-1~4・6~10)と、隆帶の上下に引かれるもの(図23-4~6、図24-5)が認められる。また、図24-8では隆帶上に横位の沈線が付加される。

図23-1は器形復元したもので、口縁部を欠く。内湾気味に立ち上がる器形で、資料上端に区画隆帶と隆帶の下を縁取る沈線が認められる。隆帶下の沈線からは、舌状部を垂下させた磨消繩文によるU字状文と蛇行状沈線が施されている。同様の構成は図24-4でも認められる。

図23-2~7、図24-1~4・6・8は無文帯に貼付文を付加された口縁部資料である。両端の盲孔を共有して対向するC字状貼付文が楕円状に配置され、さらに区画隆帶との境目付近に盲孔が付加されるもの(図23-2)、典型的なC字状貼付文で、基本的には貼付文の両端に盲孔がつけられ、盲孔間を沈線で結んでいるもの(図23-3~7、図24-1~3・6・8)、C字状貼付文両端の盲孔が省略されたもの(図23-7、図24-8)、C字状貼付文上端の盲孔の横にさらに盲孔を付加したもの(図24-6)が認められる。図24-8については、無文帯幅が狭く、貼付文がC字状というよりは、弧状になっている。これらの胴部文様は、隆帶下端の区画沈線が、波頂部下で直角に折れて2条の平行する蛇行状沈線となって垂下するもの(図23-2)、垂下する蛇行状沈線(図23-4、図24-10)、垂下する平行沈線(図23-3)、J字状文(図23-5・6、図24-2・3)、蕨手状文(図23-7・図24-3)、盲孔と沈線を付加された半弧状文(図24-1)、隆帶状の弧状文から派生する内部の地文を磨り消した平行沈線文(図24-9)等が認められる。

図24-5・7は口縁部無文帯に貼付文が認められない部分の資料である。5では隆帶上に盲孔を伴う円形貼付文が付され、直下に蕨手状文が認められる。

図25は綱取II式に比定できる深鉢形土器で、口縁部無文帯の下端を沈線のみで区画するもので

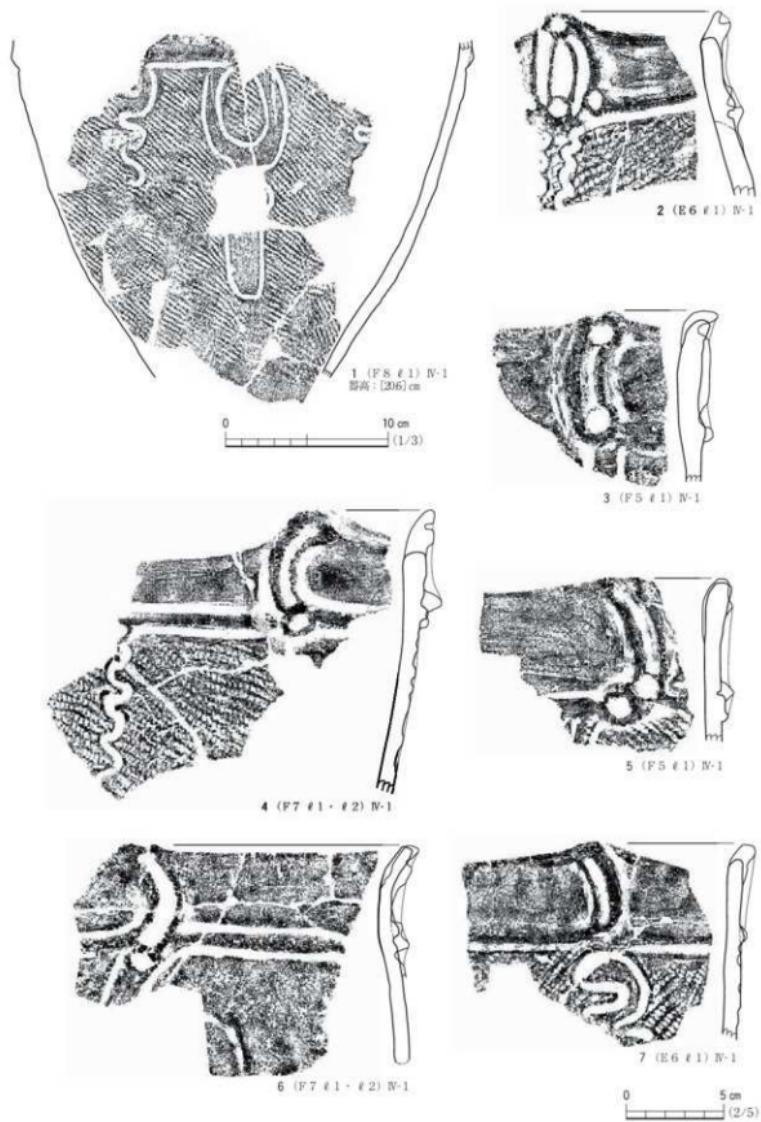


図23 2号河川跡出土縄文土器(3)

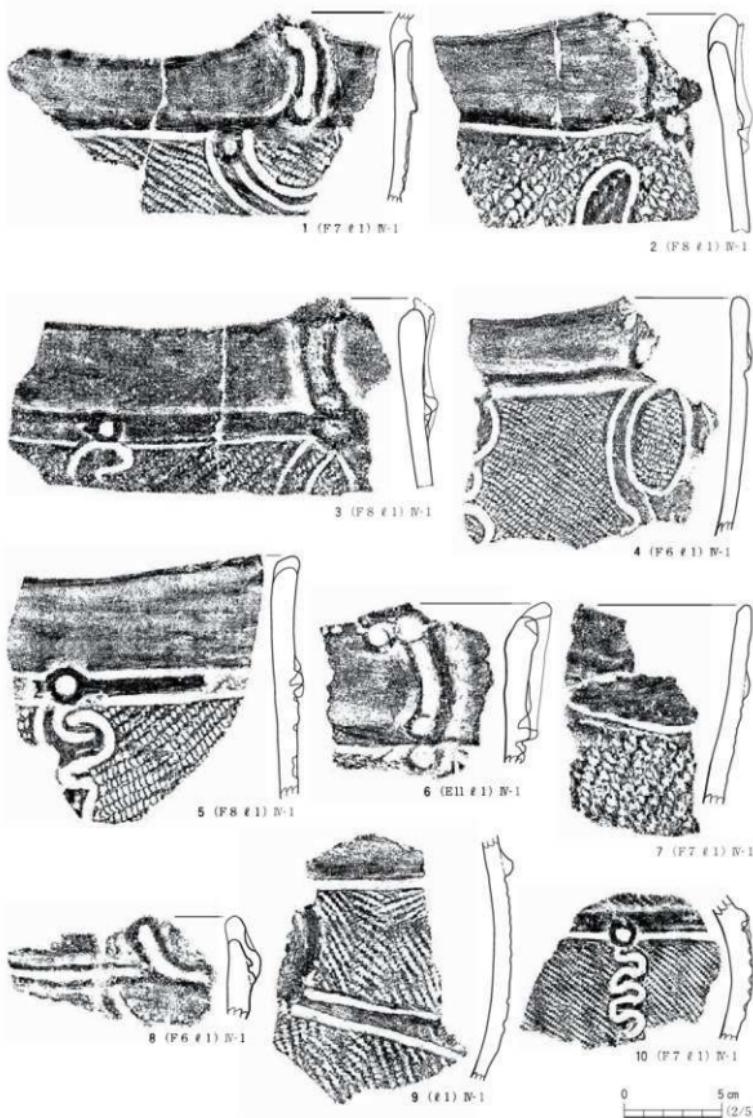


図24 2号河川跡出土縄文土器(4)

ある。1～3は器形復元したもので、胴部が弱く張り、口縁部が内湾ないし直立する器形である。1は波状口縁をなし、口縁部無文帯である部分に幅広い沈線で描かれた横位の楕円文が施される。波頂部外面の楕円文に挟まれた部分には、貼付文ではなく、3個の盲孔が継位に並ぶ。胴部文様は、波長部に対応する部分で両脇から延びる文様帶区画が直角に折れて平行線となり垂下し、平行線間の地文が磨り消されている。2は平縁の小型品で、口縁部無文帯の区画沈線から、1列の刺突文が垂下している。3も平縁の資料で、口縁部無文帯の区画沈線から沈線間を磨り消されたU字状文が垂下する。

図25～4～8は口縁部資料である。4・7は平縁で、胴部文様に巻手状文が描かれている。4では無文帯下端の区画沈線と、巻手状文は分離しているが、7では巻手状文が無文帯内に貫入し、入組文化している。また4では巻手状文内に地文が残るが、7では磨り消されている。5・8は波状口縁で、直線に近いC字状貼付文が添付され、胴部には磨り消しのJ字状文が施される。5ではJ字状文と区画沈線が別に描かれているが、8では一体の文様として描かれている。6は無文帯下端の区画沈線が波状になるもので、大型の盲孔が付加されている。

図26も網取Ⅱ式に比定できる深鉢形土器で、底部から口縁部へ直線的に開く器形のものである。1～3は器形復元したものである。1は平縁で、口縁部が強く開く器形である。口縁部外面に粘土帯を貼り付け、折返し口縁状に成形し、横位沈線を付加している。口縁端部には突起の痕跡があり、盲孔の一部とみられるくぼみが観察できるが、突起本体は欠損している。胴部には内部の地文を磨り消した4条の平行沈線と、蛇行状沈線が垂下する。2は平縁の資料である。口縁の端部形状は内削ぎ状で、端部に三角形状の小突起をもつ。口縁部と胴部に無文帯をもち、沈線で区画している。口縁部無文帯下端の沈線上には盲孔が付加され、そこから胴部無文帯まで垂下する蛇行状沈線と地文が磨り消されたJ字状文が認められる。3は全体を復元できた資料で、平底の底部から平縁の口縁部へ直線的に開く器形である。口縁部外面には端部直下とやや下部に平行沈線が引かれ、無文帯を形成し、口縁部内面は肥厚して段をなしている。胴部文様は無文帯下端の区画沈線から3条の平行沈線が垂下し、その両脇に()状に配置された倒卵文が認められる。この倒卵文は下端が開放されており、沈線の内側の地文は磨り消されている。

図26～4～8は口縁部資料である。4・5が平縁、6～8は波状口縁をなす。4・7は口縁端部に粘土帯が付加されて、1のような横位沈線を付加された折返し口縁をなし、内面は肥厚して3のように段を形成する。4には口縁部外面に盲孔が付加され、7には口縁の波頂部下に矢印状の貼付文が付加されていた痕跡が認められる。5・8はほぼ同様の文様構成である。沈線で区画された口縁部無文帯をもち、貼付文の名残と考えられる盲孔とそれを結ぶ沈線が付加される。胴部文様は下部の盲孔を基点として、無文帯下端の区画沈線と連結した平行沈線が()状に垂下する。6では、波頂部外面と内面に盲孔が付加されている。外縁の盲孔を基点に、無文帯下端の区画沈線と考えられる沈線が施されている。胴部文様は、波頂部下に逆U字形の弧状沈線に閉まれた巻手状文が施され、弧状沈線と巻手状文の間の地文は磨り消されている。

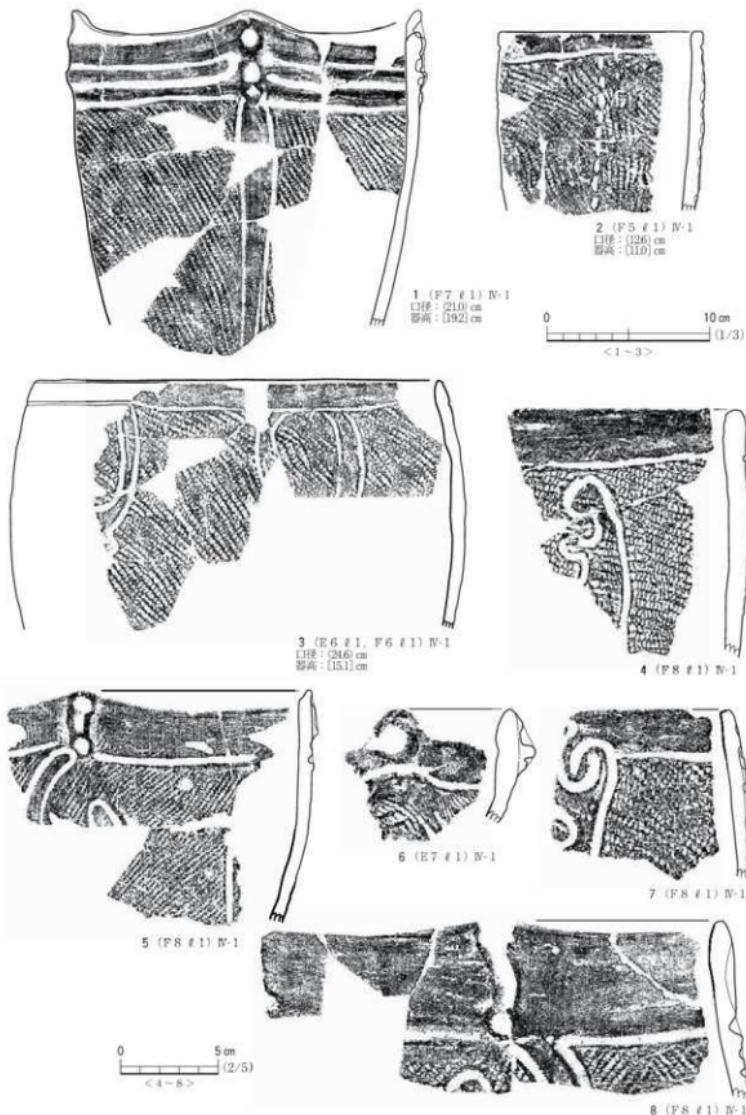


図25 2号河川跡出土縄文土器(5)

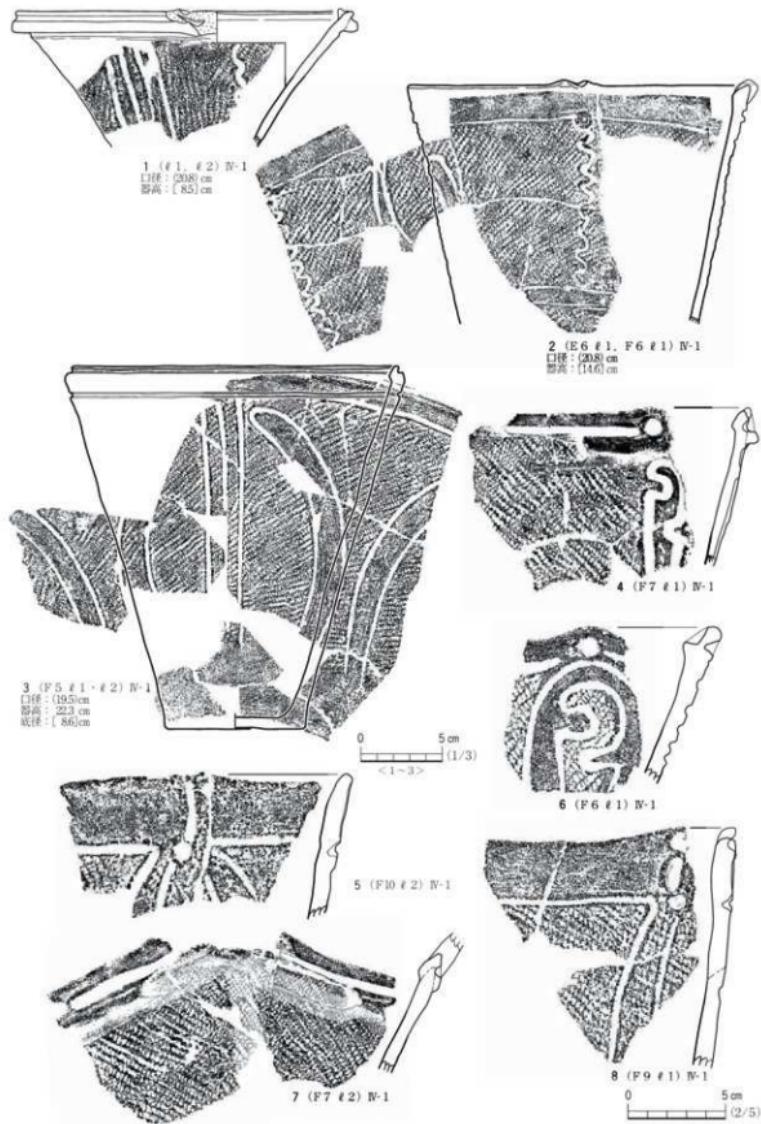


図26 2号河川跡出土縄文土器(6)

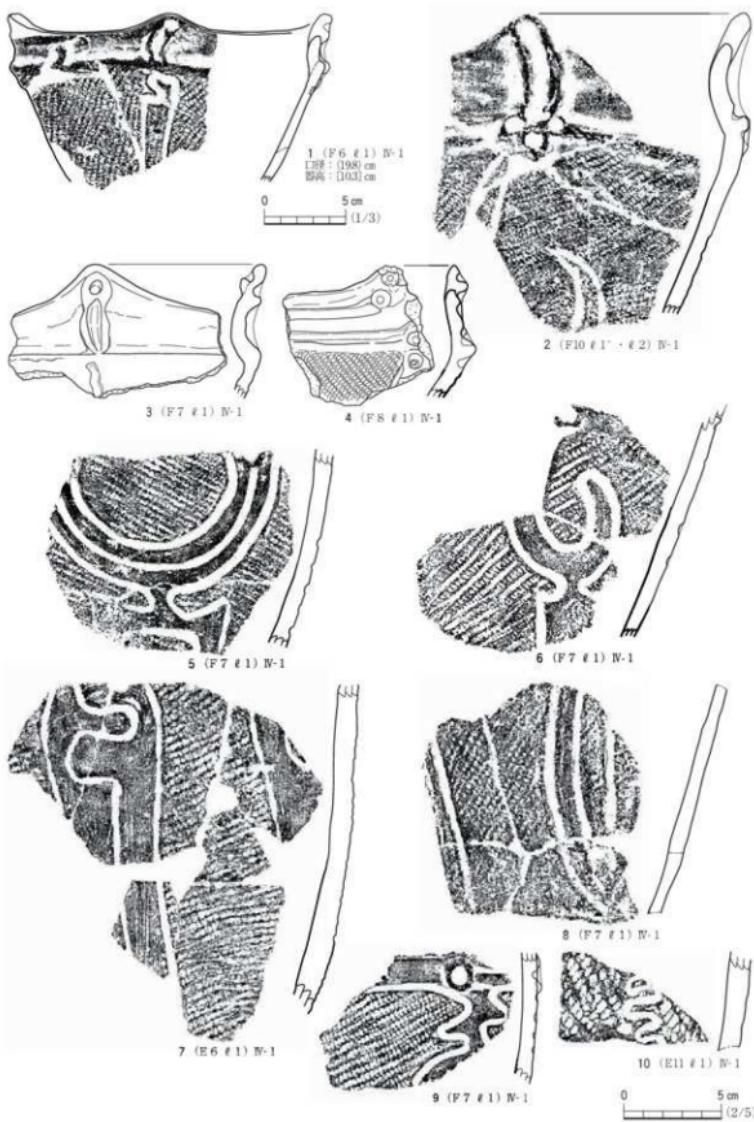


図27 2号河川跡出土縄文土器(7)

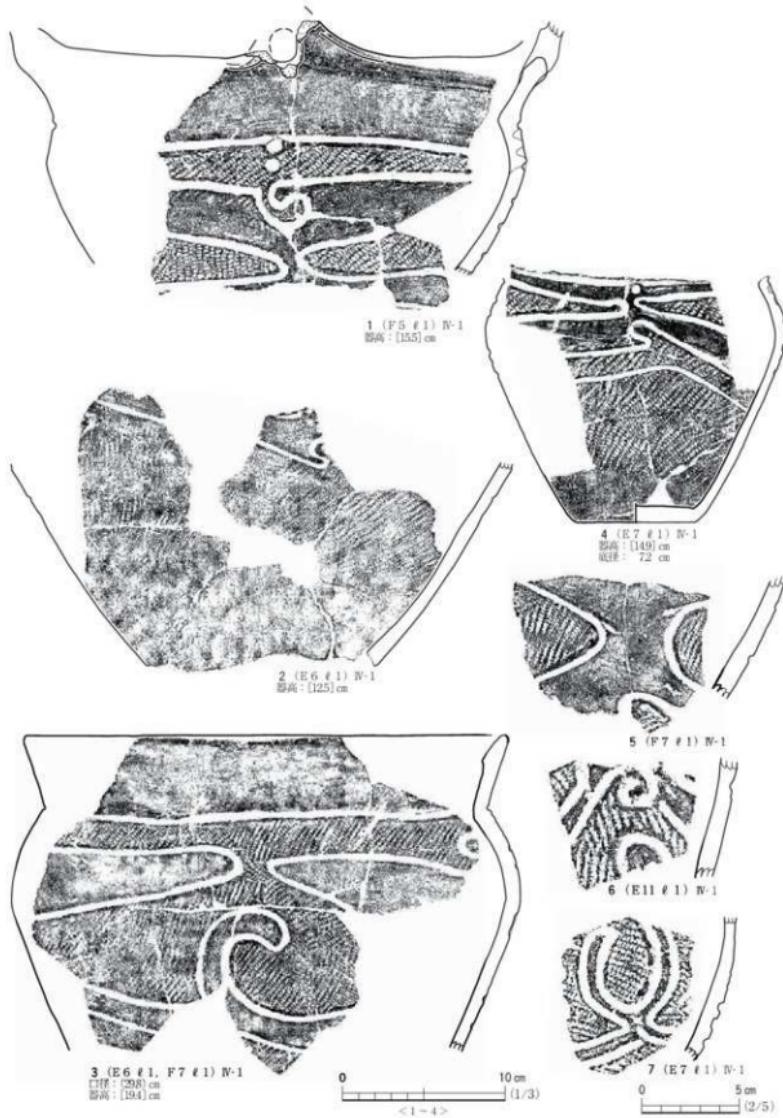


図28 2号河川跡出土縄文土器(8)

図27-1～4は、底部から直線的に開く胴部が口縁部無文帯下端で屈曲し、口縁部が「く」字状に外反する器形の深鉢形土器である。すべて波状口縁で、口縁部無文帯下端が肥厚し、無文帯間に段が認められるのが特徴である。1は器形復元したもので、波頂部直下に盲孔と沈線が付加されたC字状貼付文が認められ、胴部には内部の地文が磨り消された蕨手状文が施されている。2～4は口縁部資料で、2ではC字状貼付文の下部に3個の盲孔が付加されており、地文を磨り消されたJ字状文が垂下する。3では、直線状の貼付文下に縱位の沈線が認められ、4ではC字状貼付文の一部と、その上部左と直下に付加された盲孔、口縁部外面を縁取る沈線が認められる。いずれの資料も口縁部無文帯下端に隆帯をもたないが、C字状貼付文の形状から、網取II式に比定される。

図27-5～10は、深鉢形土器の胴部資料と考えられるものである。5は地文が磨り消されたU字状文と、そこから垂下する剣先状文で、U字状文の内側には盲孔と弧状沈線が施される。6は盲孔から垂下する剣先状文の付いたJ字状文で、文様内の地文は磨り消されている。7・8は、内側の地文が磨り消された蕨手状文で、7が文様上部の資料、8が下部の資料とみられる。9は盲孔を伴う無文帯区画沈線から派生する平行沈線が表現された蛇行状文で、やはり文様内の地文は磨り消されている。10は蛇行状沈線が垂下している。

図28は算盤玉状の胴部から、口縁部で内面に棱を形成しつつ頸部で屈曲する鉢形土器で、胴部文様が横向方に展開するのが特徴である。文様が沈線により構成されることから、網取II式に伴うと考えられる。1～4は器形復元したものである。1は口縁が波状を呈する。波頂部には正面からの貫通孔が認められる。口縁部は無文で、胴上部に文様帯を形成する。文様帯の上部は沈線区画の単節繩文帯で、波頂部に対応する位置には盲孔2個が縱位に付加され、J字状文が縱位に垂下する。無地文部を挟んだ文様帯下部には、三角形に近い横長の楕円文がJ字状文の真下に隙間をあけるように横位に並んでおり、さらにその下部に無地文部を挟んで、文様帯下端の区画沈線が認められる。2は胴下部の資料で、連結部分にS字状のクランクをもつ横長のN字状沈線で胴部文様帯下端を区画しており、この沈線よりも下部には地文の単節繩文が施されている。3は平縁の資料で、口縁端部の断面形状は内削ぎ状である。胴部文様は1の文様帯の地文施文部と無地文部を反転し、さらに天地を回転したような文様構成をとる。4は底部から胴上部までの資料で、1と2の胴部文様を足した文様構成である。異なるのは文様帯上部の垂下するJ字状文が盲孔となり、文様帯下端の区画沈線のさらに下に山形の沈線が付加されていることである。

図28-5～7は胴部資料である。5には、三角形に近い横長の楕円文の一部とみられる文様が施されており、6では頂点が渦文状になる山形沈線と、弧状文で区画した充填繩文帯が施され、7では、上部がU字状になるX字状モチーフが沈線で描かれ、沈線の内側の地文を磨り消している。

図29は胴部が球形で、頸部が屈曲して口縁部が外反する器形の深鉢形土器で、屈曲部に横位の平行沈線および沈線区画の単節繩文帯が施されることから、網取II式に伴うと考えられる。1・2は、屈曲部を含む胴部資料で、器形復元したものである。1は屈曲部に横位の平行沈線とC字状貼付文が認められ、胴部には垂下するJ字状文と蛇行状沈線が交互に展開する。2は屈曲部に連続する短

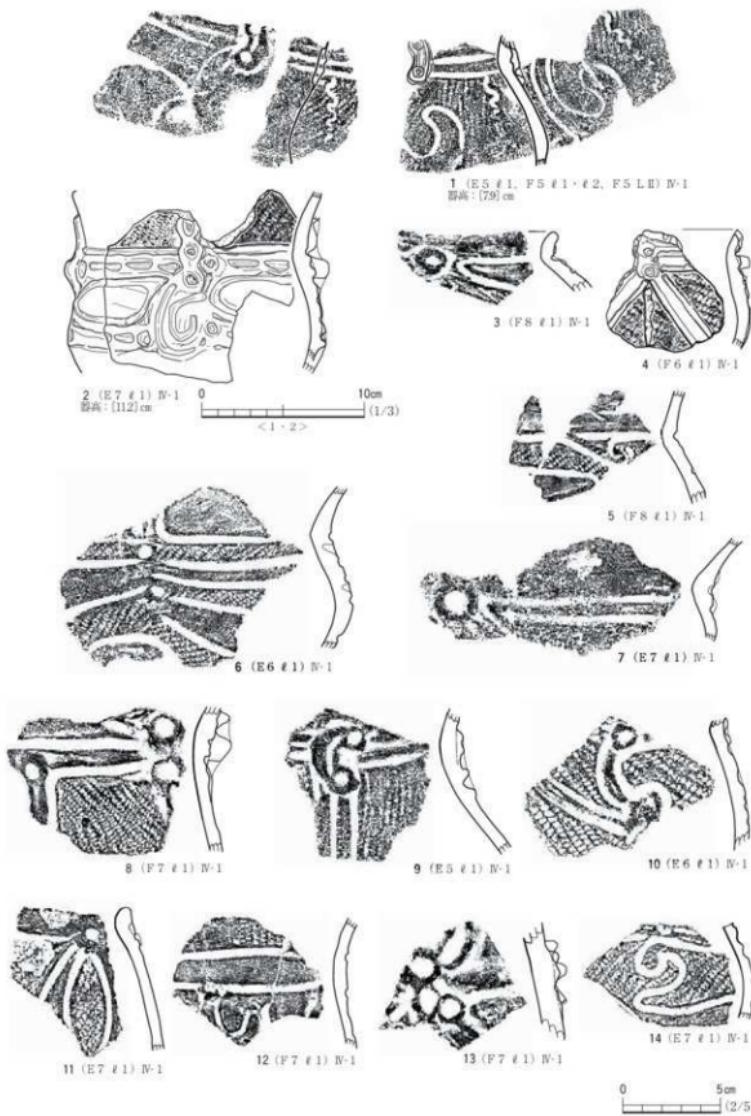


図29 2号河川跡出土縄文土器(9)

沈線を付加された隆帯が巡り、隆帯上に盲孔が並ぶ直線的な貼付文が認められる。胴部文様はJ字状文およびJ字状文下部を横方向に連結する隆帯で構成される。隆帯上には盲孔・短沈線・沈線が施される。

図29-3・4は口縁部資料で、ともに短い口縁部が外反する。3では屈曲部に盲孔が付され、逆三角形状に近い横長の楕円文が横位に展開し、4では屈曲部に平行沈線と盲孔2個を縦位に付加された楕円形の貼付文が付され、そこから縦位沈線と「ハ」の字状に聞く平行沈線が垂下する。

図29-5-14は胴部資料で、盲孔と沈線を付加されたC字状貼付文をもつもの(9・13)、盲孔を付加された楕円形の貼付文をもつもの(8)、盲孔のみのもの(6・7・10・11)があり、屈曲部には、横位の平行沈線を引くもの(7・9)、沈線区画の単節繩文帯を巡らすもの(5・6・8・12)が認められる。胴部文様は、平行沈線を縦位に垂下させるもの(8・9)、「ハ」字状に垂下させるもの(7・13)、()状に垂下させるもの(11)、S字状で横位に展開するもの(10)、沈線区画の単節繩文帯を横位展開するもの(6)、横位沈線からJ字文が垂下するもの(12)、退化し横位に展開する藤手状文をもつもの(14)が認められる。

図30・31は口縁部の突起が特徴的な破片資料を集めた。このため、網取I・II式が混在する。

図30-1は円盤状の突起で、中央に貫通孔があり、右下に盲孔が付され、そこから貫通孔と同心円状に沈線が巡る。口縁部無文帯は沈線区画で、突起直下で直角に折れて列点を付加された垂下する平行沈線となる。仙台湾の影響が認められる資料である。2-5はわずかに隆起した突起の中央に貫通孔があり、内面上方から盲孔が付されたものである。上方からの盲孔は2では貫通孔の右側、3では真上、4・5では左側に付加されている。4の突起部直下には盲孔を縦位に付加された楕円形の貼付文が認められる。6はより複雑になったもので、突起中央に貫通孔があり、貫通孔上部と左脇に上方から盲孔が付され、S字状の粘土帶で縁取られる。さらに外面に環状の小突起、内面に盲孔と沈線をもつ貼付文が付加される。7は円形の突起の中央に漏斗状の貫通孔があり、貫通孔の周開を、口縁部無文帯下端の区画隆帯から派生してきた隆帯で宿返りするように取り巻いていく。貫通孔を取り巻く隆帯上には刺突列が加えられている。8は貼付文が巨大化して口縁部から突出したもので、上部中央に貫通孔があり、貫通孔の上下に盲孔と()状の沈線が付加され、さらにその下に大きな盲孔が認められる。9は注口土器とみられるもので、1に似た円形の突起をもち、その下に橋状把手と()状に配置されたC字状貼付文が認められる。10は縦位の貼付文で、正面からみるとS字状をなし、横方向に貫通孔をもつものである。

図31-1は、波状口縁の波頂部に半捻りした漏斗状の突起がついており、突起正面には貫通孔が穿たれている。突起の下部には橋状把手があり、胴部上端の段と結ばれている。2は波頂部に逆三角形の突起がついており、中央には貫通孔と盲孔、両側面には盲孔と沈線が認められる。3は橋状把手上部が突出したもので、幅広の橋状把手上端に盲孔2個が付加され、正面には縦位の沈線が施されている。4は、漏斗状の突起と円盤状の突起が合体したような突起である。突起正面の中央には貫通孔があり、貫通孔の外側面は、盲孔と盲孔間を結ぶ沈線で縁取られる。突起上部は上方を

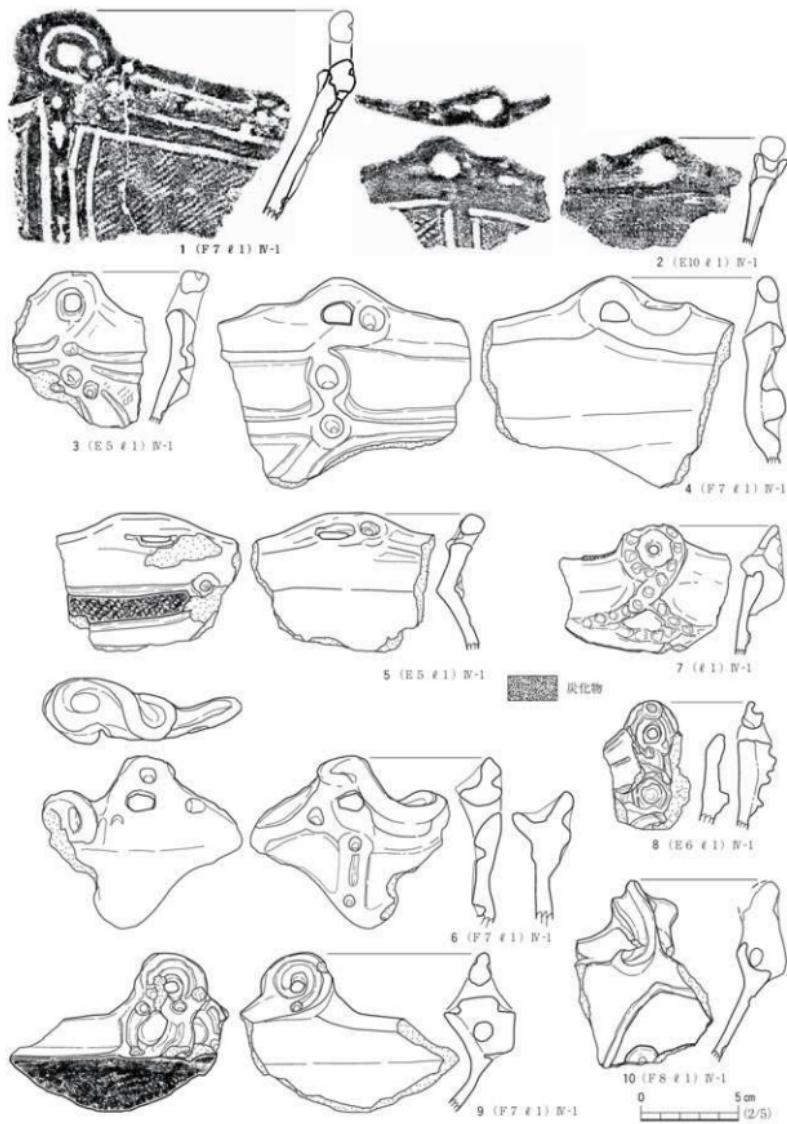


図30 2号河川跡出土縄文土器(10)

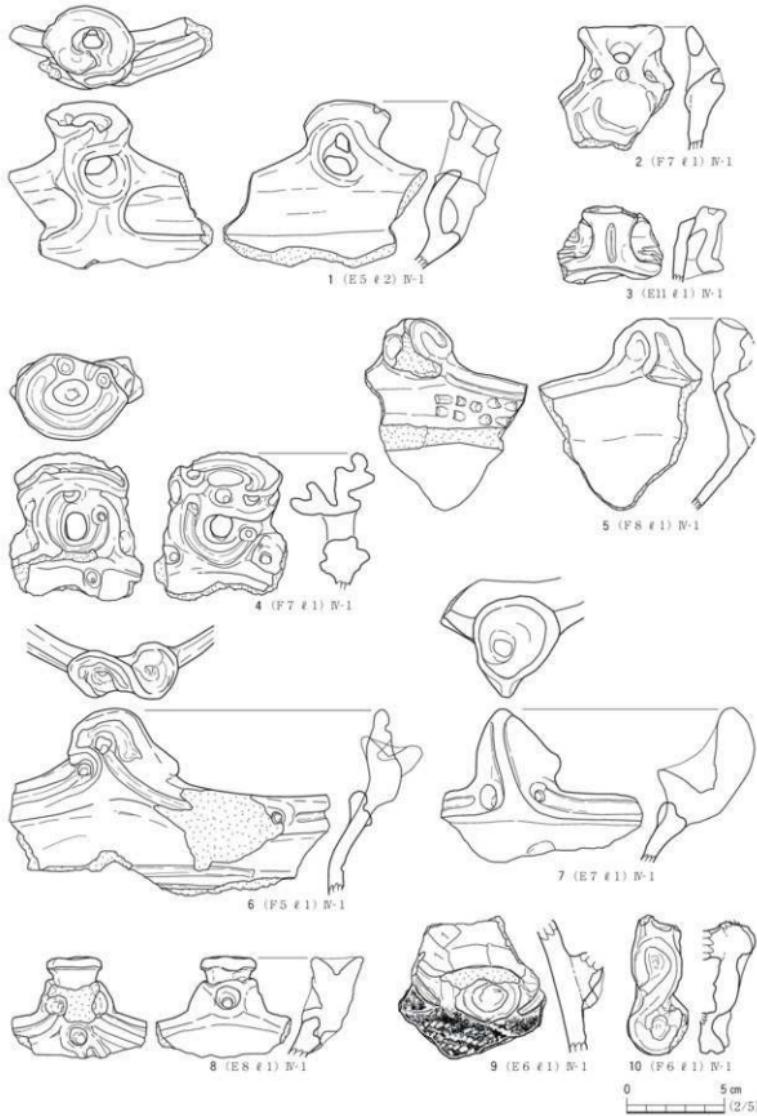


図31 2号河川跡出土縄文土器(11)

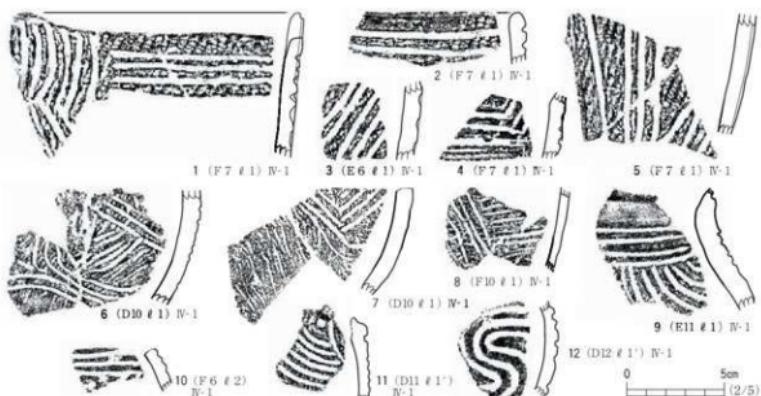


図32 2号河川跡出土縄文土器(12)

向いた漏斗状で、中央に盲孔が穿たれ、その周囲も盲孔と盲孔間を結ぶ沈線で縁取られている。5は正面に稜をなす突起で、正面の両脇と内面には浅い沈線と盲孔が付加される。正面中央と、胴部上端に剥離が認められることから、この間に橋状把手が存在した可能性がある。6は、波頂部正面に付く不整円形の突起と、その右側に並ぶ半捻りした漏斗状の突起から構成されている。正面の突起には外面や上方から盲孔が穿たれ、漏斗状のものは真上から盲孔が穿たれる。7は正面にC字状貼付文に似た稜をもつ漏斗状の突起である。内面寄りの上方から逆円錐状の盲孔が穿たれ、漏斗の縁は外面側に高く尖る。8は上方へ突出する円筒状の突起で、上面に逆円錐状の盲孔があり、突起基部の外面に2個、内面に1個の盲孔が付加されている。9は両耳壺とみられる資料の把手基部であり、10はS字状の貼付文を付加された橋状把手である。

図32は多条の平行沈線で文様が構成される深鉢形土器で、堀ノ内1式に比定される。この類の資料は出土点数が少なく、器形復元できるものはない。1～5は単節縄文を地文とするもので、1・2は口縁部資料である。1・2の外側には横位の集合沈線が引かれ、小規模な波頂部外側に垂下する集合沈線が引かれる。3～5は胴部資料で、斜位・縦位・屈折する集合沈線が施されている。

図32-6～8は撚糸文を地文とするもので、斜位および弧状の集合沈線が認められる。

図32-9～12は無地文の資料で、9・10では横位沈線と縦位の弧状沈線、11では円孔を基点とした同心円状、12ではS字状の多条沈線が認められる。9～12の資料に関しては三十櫛場式の影響が認められる。

図33は、地文のみの深鉢形土器および底部資料である。1・10は加曾利B式に伴う可能性もあるが、地文が羽状構成をとらないことから、本類とした。1は器形復元したもので、あまり開かず、胴部から口縁部が直立する器形で、口縁端部に三角形の突起を有する。外面には原体を斜位に回転させた単節縄文が地文として施されている。2は胴部資料で直線的に開く器形をしており、資料上半

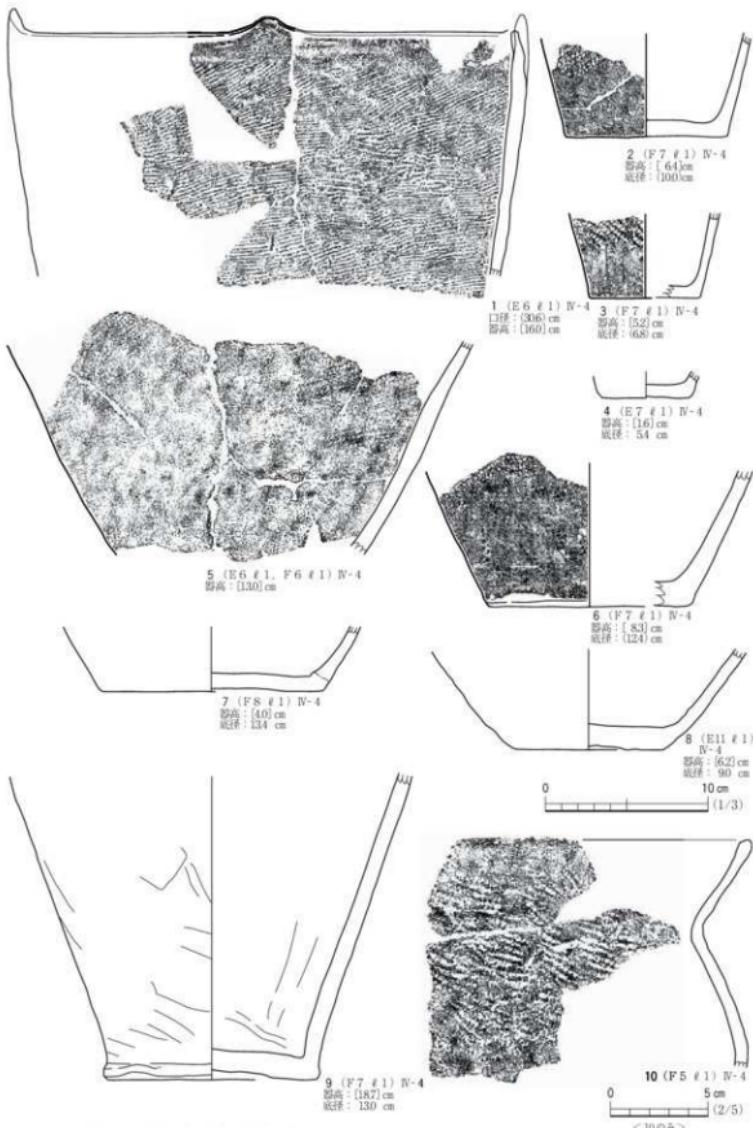


図33 2号河川跡出土縄文土器(13)

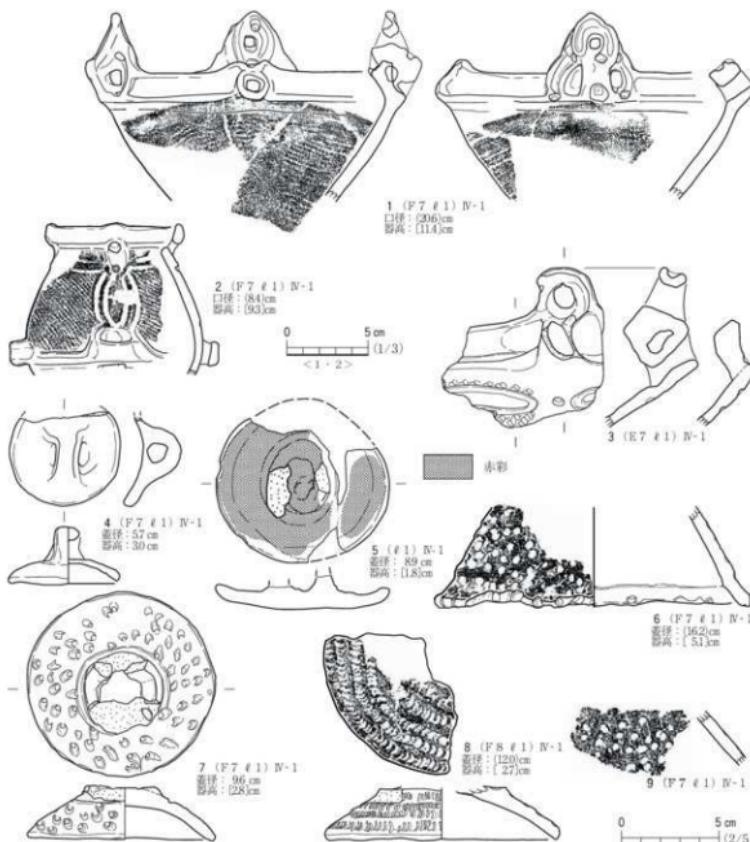


図34 2号河川跡出土繩文土器(14)

部に原体を斜位に回転させた単節縄文が地文として施されている。

図33-3~9は底部資料で、4は小型品である。基本的に平底の底部から直線的に弱く外傾する器形である。7・8はやや内湾気味で外傾の度合いが強く、加曾利B式に伴う可能性がある。3・5・6の上部には単節縄文が認められる。

図33-10は口縁部から胴上部にかけての資料で、頭部が「く」字状に屈曲する器形である。口縁部上端付近は無地文で、その下には原体縱位回転の単節縄文が施される。

図34は、注口土器、壺形土器、蓋である。1・3は注口土器である。1は器形復元したもので、強く開く体部が、上端で内側へ屈曲する器形である。屈曲部外面は肥厚して口縁部との境に明瞭な

段を形成し、口縁部外面は凹んで無文部となる。この無文部を4分割するように、注口と大型の突起が付加される。注口は短い円筒形で、やや上向きに取り付けられており、上部に剥離痕が認められることから、他の3カ所と同様の突起がついていたと推定される。突起は、C字状貼付文を両端に付加した半円形の板状突起の上に円盤状の貼付文が乗る形状である。円盤状の貼付文は中央に貫通孔があり、貫通孔の周囲を盲孔と沈線が縁取る。円盤状の貼付文の下部は橋状把手となり、胴部上端の肥厚部と連結されている。体部には単節縄文が縱位に施されている。3は破片資料であるが器形は1と同様と考えられる。注口上部には貫通孔を伴う突起があり、注口との間を橋状把手で結んでいる。突起上部には、逆円錐の盲孔が施される。体部文様は沈線区画した磨り消しの楕円文で、注口直下の両脇に配置されている。

図34-2は壺形土器である。洋ナシ形の胴部に受口状の口縁部が付く器形である。口縁部端部には小さな山形突起が付加されており、口縁部内面から外面へ貫通孔が開いている。胴部最大径の部分には隆帯が巡り、口縁部の突起に対応して、上下方向に開口する環状突起が付加されている。胴部文様は横走する平行沈線の上端を区画し、口縁部の突起直下の盲孔を基点に、地文を磨り消した平行沈線による傾卵文を施している。

図34-4~9は蓋である。概ね円形で、内湾気味に聞くもの(4・6~8)と外反するもの(5)があり、内湾気味に聞く6は、端部の内面に稜を形成しつつさらに外方へ聞く器形である。つまみは、遺存する4と不完全ながら痕跡の残る5・7から類推して、円環状であった可能性が高い。文様は、4・5は無文であるが、5には赤彩が認められ、6・7・9には断面円形の工具で刺突が施され、8では半截竹管で刺突列が施されている。6では端部を指でつまんで、内側から刺突が加えられている。6~9に関しては三十編場式に比定される。

#### IV群2類土器 (図35・36、写真33)

図35、図36-1~9は加曾利B式に比定される深鉢形土器である。図35-1~5は波状口縁をなすものである。1は口縁部外面を沈線区画の羽状縄文帶で縁取り、その下部に沈線区画の磨消羽状縄文帶によって肉彫り状に盛り上がった入組文が展開する。2では口縁部外面にキザミ目が付加され、無文部を挟んで横位の羽状縄文帶が施される。3は波頂部に沿って羽状縄文を施し、沈線を付加している。4では口縁部に横位の羽状縄文帶が施され、無文部との境を沈線で区画する。5では口縁部に沿って幅の狭い無文帶があり、沈線区画を境に羽状縄文が施される。

図35-6~13は平縁の口縁部資料である。6は内削ぎ状の内面が肥厚し、外面には沈線区画の細い縄文帶が平行して施される。11は口縁端部が無文帶で、沈線区画された直下に羽状縄文が施される。12では口縁端部を羽状縄文帶が縁取り、文様帶には肉彫り状の縄文帶が施される。7~10・13は粗製深鉢で、7~10には羽状縄文、13には単節縄文が施される。

図35-14~16は胴部資料である。沈線区画の羽状縄文帶で、14は入組文、15はクランク状文が施され、16は羽状縄文帶が幅広である。

図36-1~9は引搔文が施された粗製深鉢である。1~3が口縁部資料、4~9は胴部資料で

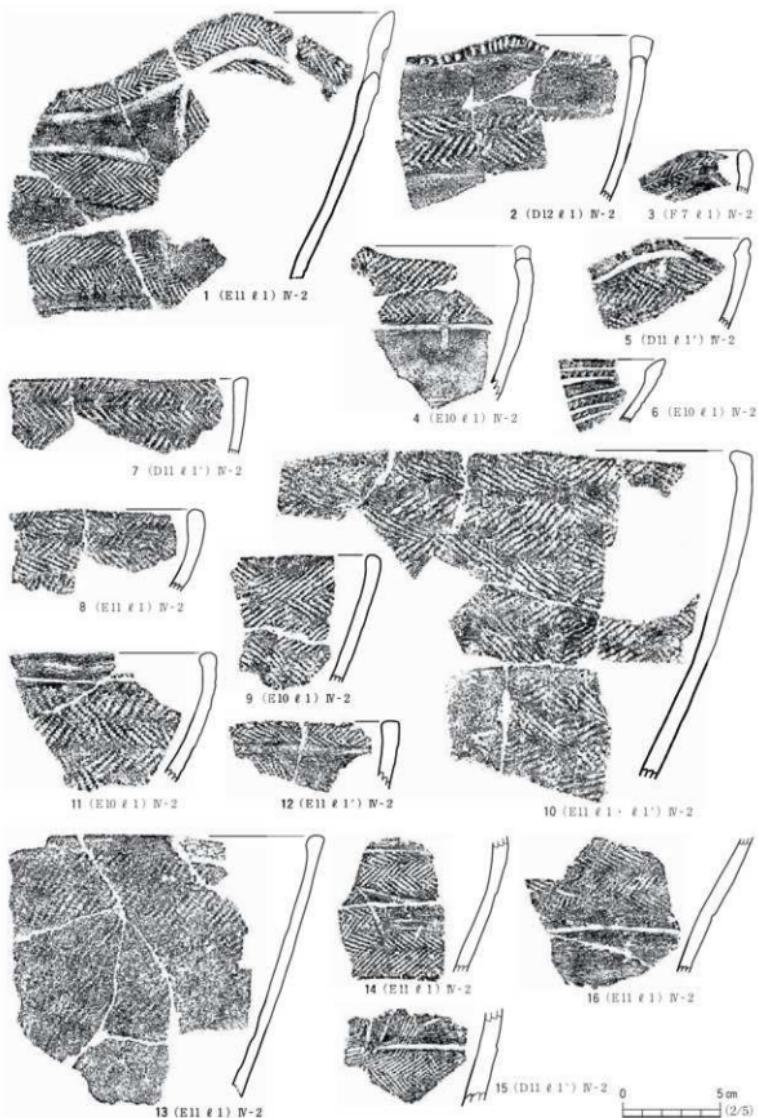


図35 2号河川跡出土繩文土器(15)

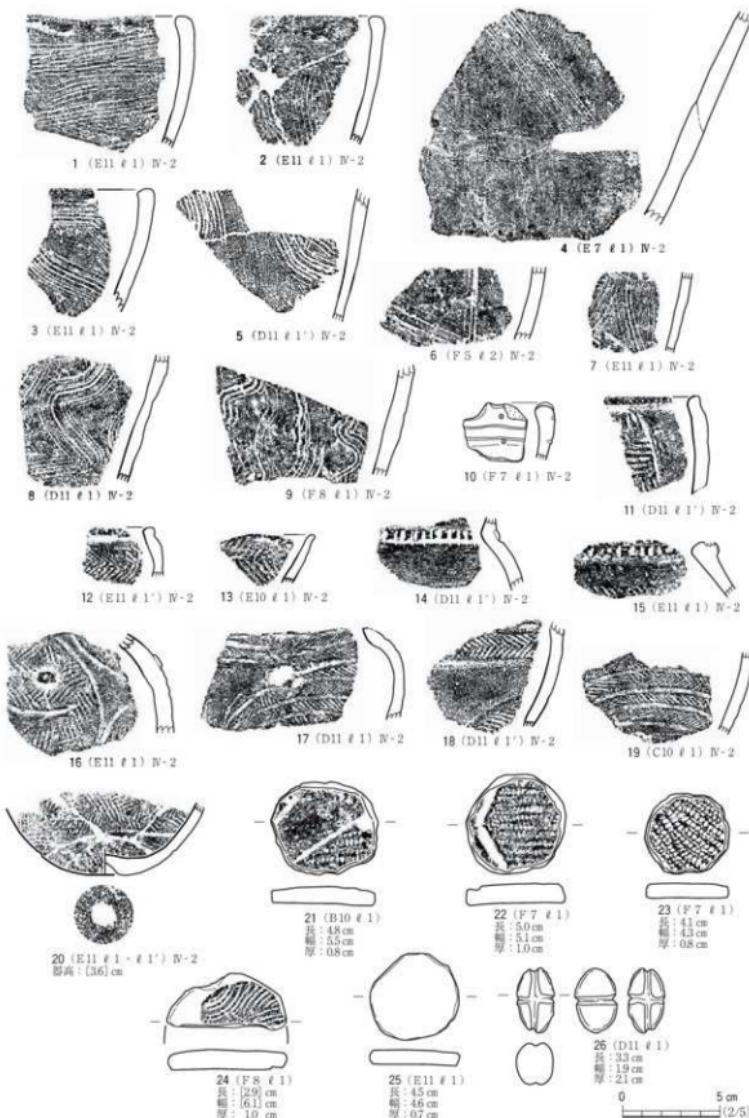


図36 2号河川跡出土縄文土器(16)

ある。平行沈線は横位(1)、垂下する弧状(2・5・7)、横位および斜位(3)、斜位および縦位(4・6)、垂下する波状(8・9)のモチーフが認められる。1は後期後葉の所産である可能性もある。

図36-10～20は加曾利B式に比定される壺形および注口土器である。10～12は内湾する口縁部資料で、10には中央がくぼむ小突起が付加され、外面には小さな円孔と横位の平行沈線が引かれる。11は沈線区画の羽状繩文で弧状モチーフを描き、12では横位の羽状繩文が施される。13は直線的に開く器形で外面に羽状繩文が施される。14・15は屈曲部付近の胴部資料である。14は屈曲部に平行沈線が引かれ、間にキザミ目が施される。15では隆帯状に盛り上がった部分にキザミ目が施される。16～19は胴部資料で、16は沈線区画の磨消羽状繩文で弧状モチーフを描き、貼瘤状の突起が付加される。17では羽状繩文帶の上から平行沈線を付加しており、18では沈線区画の羽状繩文帶で横位区画と弧状モチーフが施されている。20は底部資料で、球形の器形をなし、底面中央が凹む丸底である。外面には沈線区画の羽状繩文帶が施される。

#### 土 製 品 (図36、写真34)

図36-21～26は土製品である。21～25は土器片を加工した土製円盤である。土器片の周囲を研磨し円形の形状を作りだしている。26は長球形の有溝土錘である。長軸方向と短軸方向に溝が一周する。

#### 石 器 (図37・38、写真35)

図37-1～12は石鎚である。1～4は凹基無茎石鎚である。1・2は基部のえぐりが深く、3・4は浅い。1は長さが幅の3倍近い細長いもので、2は基部付近の側刃が内湾気味で先端に向かい直線的になる器形である。3・4は内湾気味の側刃で、4は小型の資料である。5は平基無茎石鎚で、基部の端を欠損し、器形はやや傾いている。6～8は凸基有茎石鎚である。3点ともに小型で、8は茎部が相対的に長い。石鎚の完成品は素材剥片の両面から丁寧な押圧剥離を施されている。9～12は未成品とみられるもので、器体が厚く、縁刃の調整剥離は未然である。

図37-13は石錐である。つまみは楕円形とみられるが、欠損している。基部に調整剥離を加え先端部を作り出している。先端部には使用による磨滅が認められる。

図37-14・15は削器と考えられる。横長の三角形に近い剥片の長辺部分に両面から押圧剥離を加え、刃部を作り出している。また、短辺の一部にも調整剥離が認められる。

図37-16・17は石核で、ともに自然面が残る。16は打面の移動を繰り返しながら、剥離が施されている。17は平たい素材の縁刃から求心的に剥離が施される。

図38-1は打製石斧の未成品と考えられる。楕円形の自然剥片の一端に調整剥離を加え刃部を形成しているが、中途で放棄されたようである。

図38-2は敲石である。円盤状の円窓の側縁を中心に敲打痕が認められる。

図38-3は石剣の未成品と考えられる。薄板状の剥片に調整剥離を加えて器体を成形した後に、一方の面に研磨が加えられている。

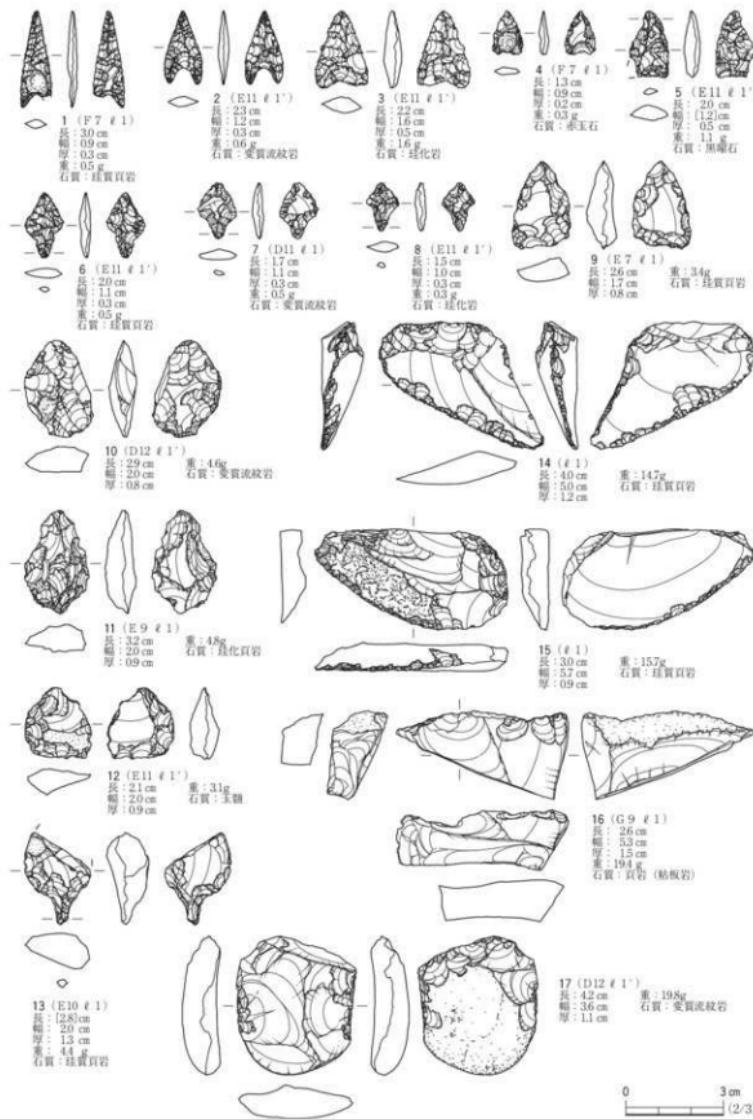


図37 2号河川跡出土石器(1)

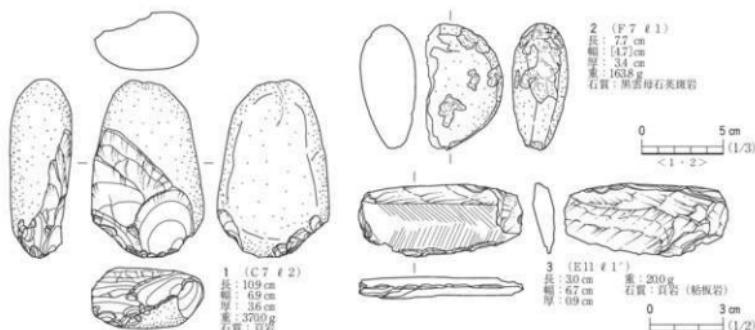


図38 2号河川跡出土石器(2)

### まとめ

本河川跡は、調査区の東側をほぼ南北に継続し、南端に湧水点をもっていた可能性がある。本遺跡の出土遺物の大半は本河川跡に伴うもので、特に縄文時代後期前葉の土器群は廃棄された状態で出土した。流路は北流して調査区外に延びており、赤柴遺跡検出の川4・5と合流する事が推定できるが、合流部分が調査範囲外であるため、前後関係等の状況は不明である。河川跡の時期は、出土遺物の状況から縄文時代後期前葉から埋没が始まるようであるが、後期中葉でも埋まりきらず、水が流れているものと考えられる。

(笠井)

### 3号河川跡 川3

#### 痕跡 (図39, 写真20)

本河川跡は、調査区西部～中央部のA 10・11, B 8～11, C 7～9, D 7・8, E 6・7グリッドに位置する。調査区南西部のB 11グリッド付近から始まり、北東方向へ曲線を描きながら延び、E 7グリッド付近で川2と合流する。川2との前後関係は堆積土の観察から本河川跡が古い。河川跡の検出面はL III上面で、黒褐色土の帶状範囲を確認し、適宜土層観察用ベルトを設定して掘り下げと記録を行った。

堆積土は3層に分層でき、堆積状況からいずれも自然の水成堆積土と判断した。 $\ell$  1は河川跡の南側に堆積する黒色土層で、主に縄文時代後期前葉～中葉以降の遺物を包含している。砂粒をあまり含んでおらず、川2の $\ell$  1に対応する可能性がある。 $\ell$  2は造構北側に堆積する黒褐色土層で縄文時代早期末葉の遺物が少量出土した。 $\ell$  3は最下層の黒褐色土で、白色粘土塊を含まないことが分層したが、 $\ell$  2の一部である可能性がある。遺物は出土していない。

調査区内における本河川跡の規模は長さ34m、幅3.6～6.2m、深さは最深部で40cmを測る。断面形は幅の広いU字形である。底面は起伏が多く、中央付近で急激に深くなる。底面の標高は、概ね南側が高く、北側が低いことから、川の水は北流していたものと考えられる。

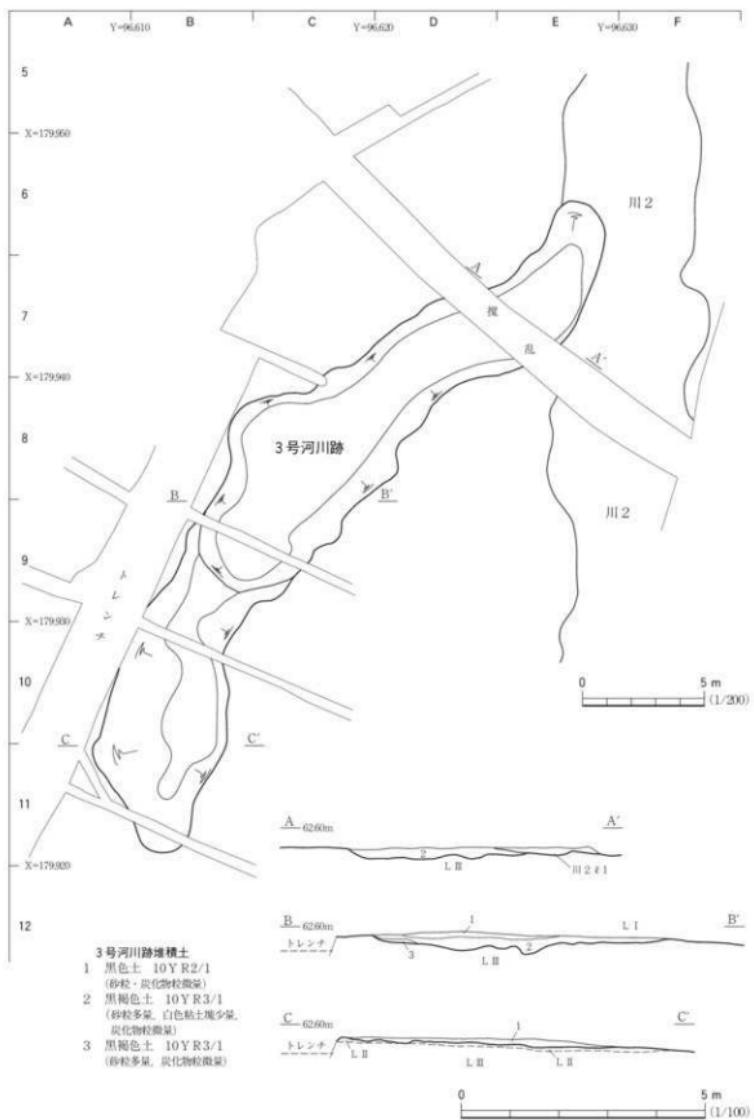


図39 3号河川跡

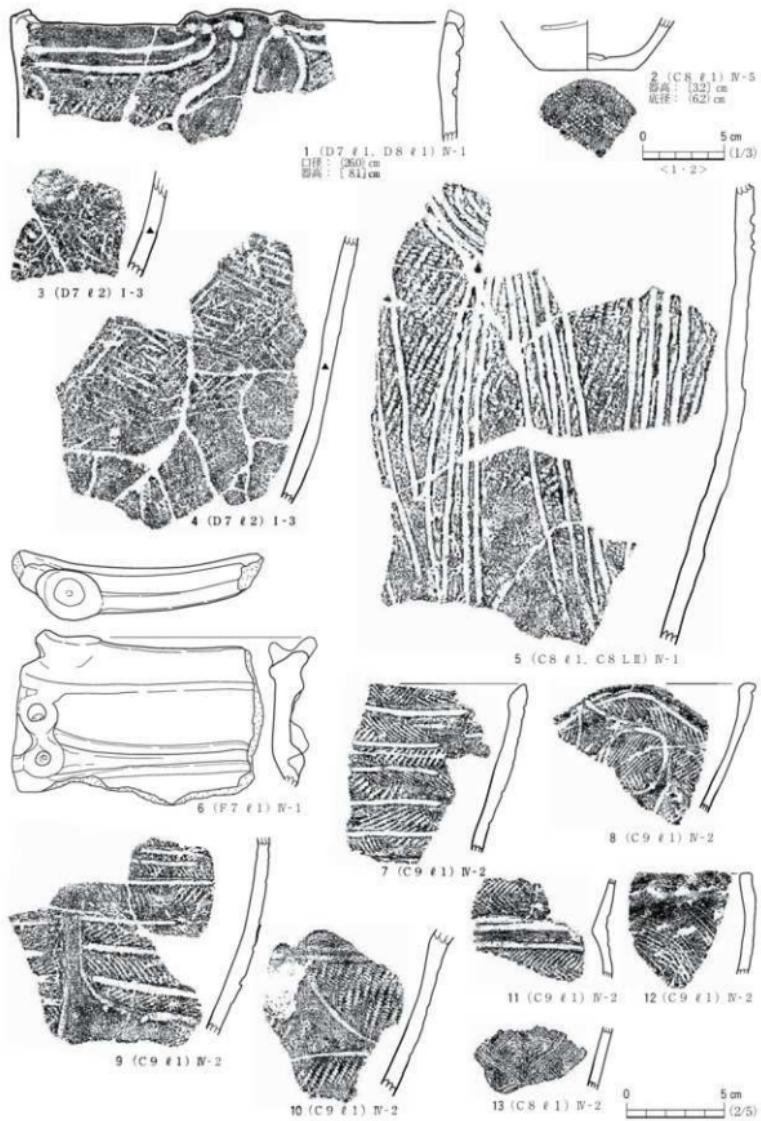


図40 3号河川跡出土縄文土器

## 遺 物 (図40・41、写真35・36)

本河川跡からは、縄文土器片440点、石器11点が出土した。縄文土器は、早期末葉と後期前葉～中葉にかけてのものである。これらのうち縄文土器13点、石器1点を掲載した。

図40は縄文土器である。1・5・6が後期前葉の網取式、3・4が早期末葉の日向B式、2・7～13が加曾利B式に比定される。

1は、網取II式の深鉢形土器の器形復元したものである。胴部から口縁部にかけて外反気味に直立する平縁の器形である。口縁端部に半円形を中心に三角形の小突起を両脇に付加した突起があり、突起外面には盲孔が3個横位に穿たれる。この盲孔を基点に横位に展開する弧状モチーフに区画された磨消縄文が施されている。2は加曾利B式の底部資料で、内済気味に立ち上がる器形で、外面に沈線、底面に網代痕が認められる。

3・4は胴部資料で、胎土に纖維混和痕が認められ、風化して不明瞭であるが地文に単節縄文が施され、文様帶に多条の平行沈線による菱形のモチーフが描かれている。5は堀ノ内1式に比定される深鉢形土器の胴部資料である。地文上に多条の平行沈線で弧状文と垂下する縦位・斜位の文様を描いている。6は網取I式に比定される深鉢形土器の口縁部資料である。口縁部無文帶が一段凹み、盲孔を付加された8字状の貼付文が認められ、その上の口縁端部に盲孔を付加された漏斗状の突起が付属する。

7・8は加曾利B式の口縁部資料である。ともに弱く聞く器形で、口縁端部の断面形状は7が内削ぎ状で内面が肥厚し、8は丸状で外側が肥厚し沈線が加えられている。文様は7が横位の羽状縄文の上から平行沈線を施しており、8では口縁部を縁取る無文帶下端に沈線を施し、その下の文様帶には沈線区画の羽状縄文で弧状モチーフを描き、無文部を磨り消している。

9～11は深鉢形土器の胴部資料で、加曾利B式に比定される。文様は9が羽状縄文の上から梢円状の区画沈線と文様内を区画する平行沈線で構成される。10は沈線区画の単節縄文で弧状モチーフが描かれる。11は屈曲部を含む資料で、屈曲部付近は沈線区画の無文帶でその上下に横位の羽状縄文が施される。12・13は加曾利B式の粗製深鉢の口縁部と胴部の資料で、引搔文で12では弧状、13では縦位の波状に文様が描かれる。12には、口縁端部に指頭押圧が観察できる。

図41 3号河川跡出土石器

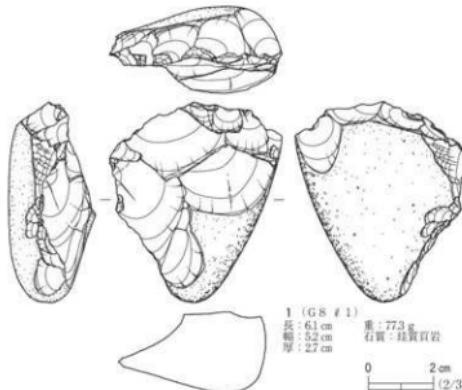


図41-1 は石核と判断した石

器である。自然面が残り主に図の上方から加熱されており、側縁には調整剥離痕が認められる。

### まとめ

本河川跡は、調査区の西側から中央部にかけて延びる河川跡である。川2と合流し、本河川跡が古い。出土遺物の大半は縄文時代後期の所産であるが、堆積土下層からは縄文時代早期末葉の資料が少數ながら出土している。河川跡の時期は、出土遺物の状況から縄文時代早期末葉から埋没が始まるようで、縄文時代後期中葉ではほぼ埋まりきったものと考えられる。

(笠 井)

## 第6節 遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文土器片3,048点、弥生土器片1点、土製品2点、石器246点が出土した。図42に示したように、遺構外出土遺物は河川跡と重なる部分に集中しており、本来河川跡に伴っていたものが、後世の耕作および調査初期の採り上げミスにより河川跡から分離され、遺構外となつたものが多いと考えられる。土器は縄文土器が主体で、弥生土器がごく少量含まれる。縄文土器の時期は、前期前葉、後期前葉、後期中葉、晩期のものが認められ、後期前葉～中葉の資料が多い。

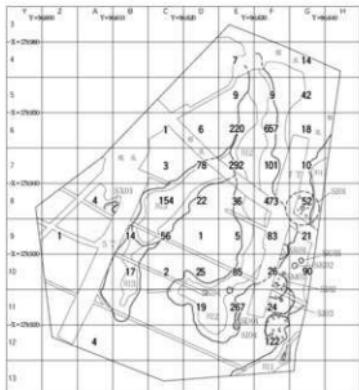
出土遺物の時期ごとの分布の傾向としては、縄文時代前期の所産がC7・8グリッド周辺、晩期の資料がG10グリッド周辺に集中し、縄文時代後期の遺物は、ほぼ河川跡に重なるように出土している。これらの遺物のうち、特徴的な土器40点、土製品2点、石器7点を図示した。以下土器については、序節第1章第2節の分類に従い記述していく。

### II群2類土器（図43、写真37）

図43-1・2は縄文時代前期前葉に比定される深鉢形土器の胴部資料である。胎土に纖維混和痕



遺構外および河川跡



遺構外のみ

図42 遺構外出土土器分布状況

が認められ、外面に結束一種の縄文が施されている。

#### IV群1・4類土器（図43、写真37）

図43-3～13は綱取式に比定される資料である。3～5は口縁部に無文帯をもつ深鉢形土器の口縁部資料である。無文帯下端を隆帯で区画しており、3では隆帯の上下、5では下部に沈線を沿わせている。3・4は波状口縁の波頂部で、盲孔と沈線を伴うC字状貼付文が貼付けられている。いずれも綱取I式と考えられる。

6・7は胴部文様が横方向に展開する綱取II式に比定される深鉢形土器の胴部資料である。6では沈線区画の磨消縄文帯が横位と斜位に施され、7ではJ字状文とそこから横方向へ連続するモチーフが、平行沈線で区画された無地文部で表現されている。

8～10は口縁部の突起資料である。8は波頂部付近で、波頂部先端に内面上方に向いた漏斗状の貼付文が付加され、中央に盲孔が認められる。突起正面にも縦に4カ所の盲孔があり、口縁部外側に沿って横位の短沈線が施される。波頂部下は弧状沈線で区画され、沈線の上部と口縁部外側の短沈線の下端に沿ってキザミ目が施されている。9は複雑な文様の横横円形の突起で、突起下には貫通孔と橋状把手が付加されている。突起部分はC字状貼付文を横にしたような粘土帯の縁取りがあり、盲孔と沈線が付加される。10は半円形の突起で、貫通孔とその横の盲孔から構成される。

11は橋状把手である。両端に盲孔があり、沈線が連結する横位の弧状貼付文が認められ、その上部には単節縄文の地文に蛇行状沈線が垂下している。12は注口土器の注口である。短い円筒形で、上部に漏斗状の突起がつく。13は口縁部資料で、外面に単節縄文が施されている。

図43-14・15は堀ノ内1式に比定される胴部資料で、集合沈線で文様が描かれる。

図43-16・17は底部資料で、17は底面に縄文が施されている。

#### IV群2類土器（図44、写真37、38）

図44-1～15は加曾利B式に比定される資料である。1～7は深鉢形土器の口縁部資料である。1～3は波状口縁で、1・2は口縁端部外側に沿ってキザミ目を伴う2条の平行沈線が引かれる。3は口縁部外側と屈曲部下に羽状縄文帯が施され、羽状縄文帯の上から平行沈線が引かれる。4は鉢形土器の可能性もある口縁部資料で、端部に小突起をもち、端部外側に縄文帯を施し、縄文帯下端の区画沈線下を磨いて縄文帯との間に段差を形成している。細い無文帯を挟んで平行沈線を施された羽状縄文帯が巡る。5・7は口縁部外側に羽状縄文帯が巡り、5は縄文帯下端に沈線区画が認められる。6は口縁部外側と屈曲部を横位沈線で区画し、区画内に沈線区画の磨消羽状縄文で、木葉状の弧状モチーフを描いている。

8～12は深鉢形土器の胴部資料と考えられる。8～10は沈線区画の羽状縄文帯で横位の帶状モチーフが描かれている。9では縄文帯以外を磨り消しており、縄文帯が肉彫り状に盛り上がる。11は屈曲部に平行沈線が引かれ、沈線の上下に弧状沈線で区画された単節縄文が認められる。12は壺形土器の可能性もあるもので、羽状縄文帯が横位から縦位へ直角に折れるように施され、その上から平行沈線が付加されている。

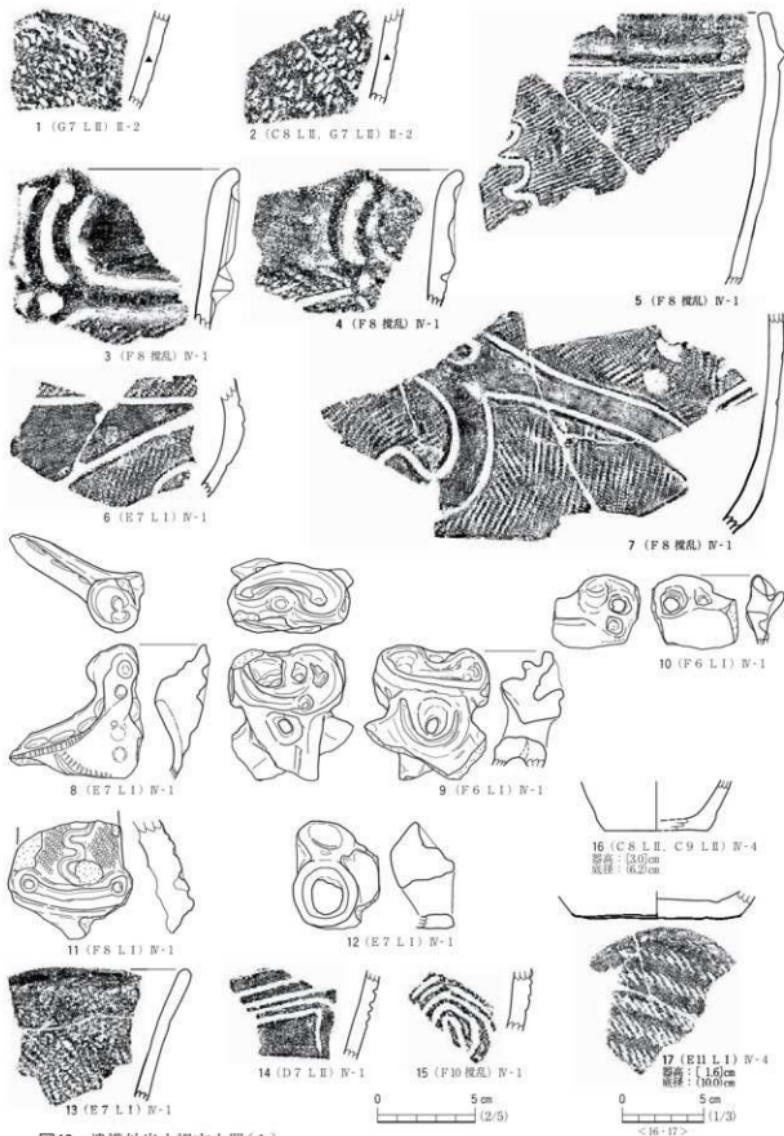


図43 遺構外出土縄文土器(1)

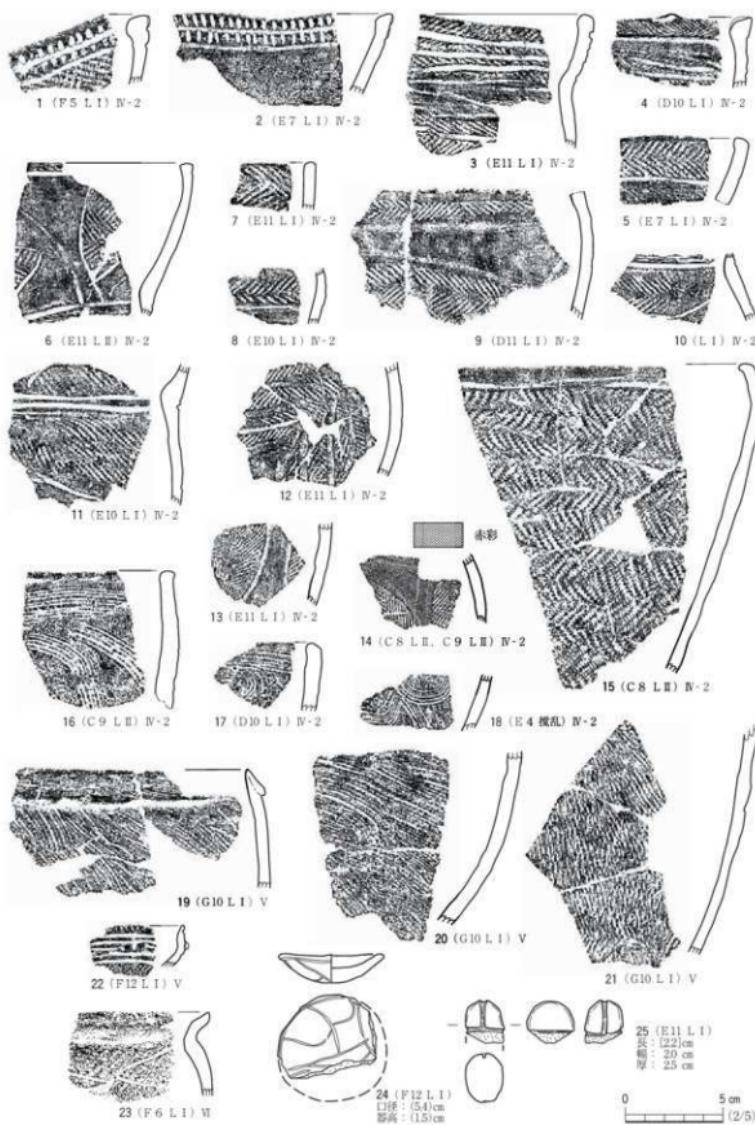


図44 遺構外出土縄文土器(2)

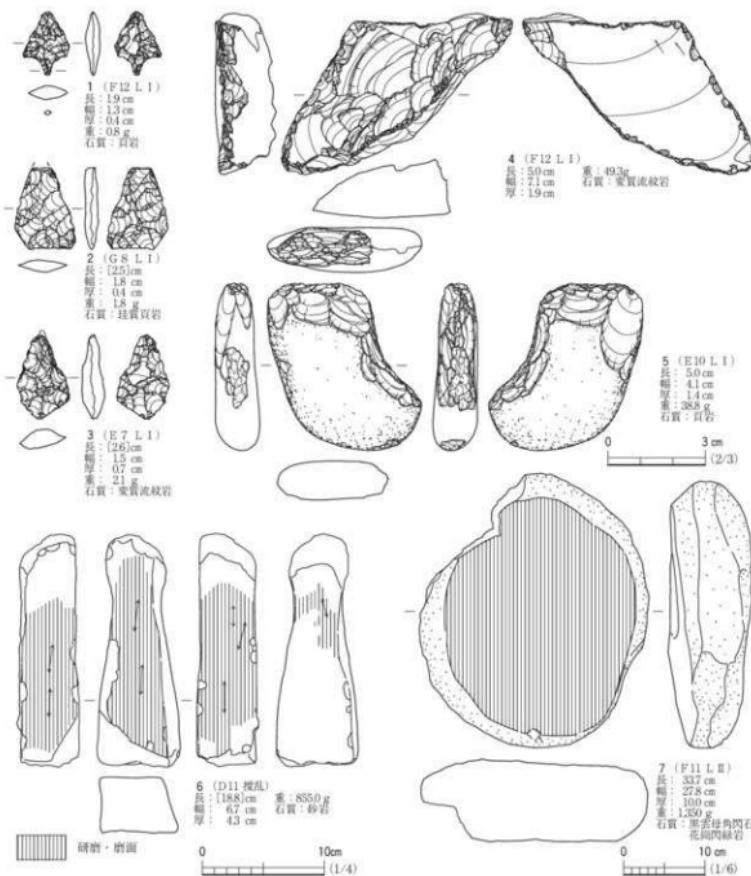


図45 遺構外出土石器

13・14は注口土器か壺形土器の胴部資料である。沈線区画の充填・磨消羽状縄文帯で縱位の弧状モチーフが描かれる。14には赤彩も認められる。15～18は粗製の深鉢形土器である。15は外面に羽状縄文が施され、口縁部付近の細い無文帯下端に沈線区画が認められる。16～18は引搔文を施されたものである。16・17では口縁部外面に横位の引搔文と、その下の垂下する弧状の引搔文が施され、18では横位に波状の引搔文が施されている。

#### V群土器（図44、写真38）

図44～19～22は縄文時代晚期の資料である。19～21は粗製の深鉢形土器で、外面に撲糸文が

施されている。19は口縁部資料で、端部が折り返し状の口縁となっている。22は注口土器か壺形土器の口縁部資料と考えられ、端部にキザミ目が巡り、口縁部外面の文様帶には沈線を平行に施し、中央がくぼむ貼付文を付加している。文様帶の下位には単節繩文が施されている。

#### VI群土器（図44、写真38）

図44-23は弥生時代中期前葉の資料である。壺形土器の口縁部資料とみられ、頸部下に単節繩文と沈線が施されている。

#### 土 製 品（図44、写真38）

図44-24・25は土製品である。24は浅鉢か蓋のミニチュア土器と考えられる。口縁端部外面に横位の沈線が巡り、底面に弧状沈線による格子状のモチーフを描いている。25は有溝土錘で、半分を欠損している。長球形と考えられ、短軸方向と側面に溝が一周する。

#### 石 器（図45、写真39）

図45-1～7は石器である。1・2は石鎌で、1が平基有茎石鎌、2が平基無茎石鎌である。3は未成品であろう。いずれも両面から押圧剥離が加えられている。4は二次加工のある剥片である。三角形の縦長剥片の周縁に調整剥離を加えている。5は石核とみられる。平たい円盤の一端の両面から剥離を行い、剥片を探られた部分は刃部状になっている。6は砥石である。直方体の側面すべてを砥面とし、使用により中央付近は細くなっている。平安時代以降の所産と考えられる。7は石皿である。板状碟の一面を磨面としている。

(笠 井)

### 第3章 まとめ

荒井遺跡は、段丘の縁に細長く延びる沖積地に立地する遺跡で、今回の調査により、沖積低地に形成された微高地上に展開する縄文時代後期の集落の姿と、集落に隣接する河川跡の一端が明らかになった。今回の調査で検出した遺構は、堅穴住居跡4軒、土坑4基、土器埋設遺構1基、溝跡1条、性格不明遺構1基、河川跡3カ所で、出土遺物は縄文土器片14,725点、弥生土器片1点、石器668点、土製品8点である。以下、遺跡の変遷を概観し全体のまとめとする。

荒井遺跡で最も古い遺物は、3号河川跡から出土した縄文時代早期末葉の土器片である。胎土に纖維混和痕が認められ、縄文の地文に沈線で斜格子状文が施されており、日向B式に比定される資料である。また、遺構外出土遺物の中に、地文に結束2種を施した縄文時代前期前葉に比定される資料も出土しているが、当該期の遺物はきわめて少なく、遺構は伴っていない。

次に確認されるのが、縄文時代後期前葉の遺構・遺物である。遺構は、2号河川跡の右岸寄りの川底で検出された4号土坑がある。4号土坑は、堀ノ内1式に比定される土器が出土している。4号土坑のすぐ東側で、2号河川跡右岸にあたる微高地上に立地する2号住居跡もこの時期の所産である可能性がある。遺物は、2号河川跡の北部を中心に多量の土器片が投棄された状態で出土している。網取I式の新段階～II式の古段階に比定される資料を主体とし、堀ノ内1式・三十塙場式に比定される資料を少数含む。2号河川跡出土の縄文土器は荒井遺跡の調査で出土した土器の7割を超えており、その中でも当該期の資料が大半を占める。これらの資料の供給元であると考えられる集落跡は、今回の調査区内では確認されておらず、遺物の出土状況から、調査区外の東側に当該期の集落があった可能性がある。また、隣接する赤柴遺跡で当該期の集落跡が確認されているが、直線距離で40mの距離がある。

続く、縄文時代後期中葉では、2号河川跡右岸の南北方向に細長い微高地上に石畠炉をもつ3軒の住居跡(先述した2号住居跡が当該期の所産であれば4軒)と3基の土坑、1基の土器埋設遺構、1条の溝跡が立地する。また、3号河川跡左岸の微高地上には、石皿を伴う1号性格不明遺構が立地する。土坑のうち、1号土坑は比較的大型の土坑で、堆積土から、石器の微細な剥片が多量に出土した。また、出土遺物から2号土坑および1号土器埋設遺構は、より新しい時期の所産である可能性がある。この時期は、隣接する赤柴遺跡の南東向き斜面に当該期の集落跡が営まれる時期で、河川を挟んで段丘斜面と低地部の微高地上に集落が営まれる景観が推定できる。遺物は、遺構および各河川跡から加曾利B2～3式に比定される資料が出土している。

その後、縄文時代後期後葉～晩期・弥生時代と土器・石器が少量確認されるのを最後に本遺跡では遺構・遺物が見られなくなる。この頃までには完全に埋没したものと考えられる。

(笠井)